

第20回全国バス学習研究集会

提 案 要 項

小・中・高校

期日 昭和60年10月25日・26日

会場 姫路市立高丘中学校
姫路市立城南小学校
姫路市立御国野小学校

主催 全国バス学習研究会
姫路市立高丘中学校
姫路市立城南小学校
姫路市立御国野小学校

共催 中播バス学習研究会

後援 兵庫県教育委員会
姫路市教育委員会
姫路市立高丘中学校PTA
姫路市立城南小学校育友会
姫路市立御国野小学校PTA

第1分科会 算数

研究主題 学習具を工夫し、創作活動を通して数学的な考え方をどのように高めるか

兵庫県揖保郡揖保川町立半田小学校 萩原辰秀

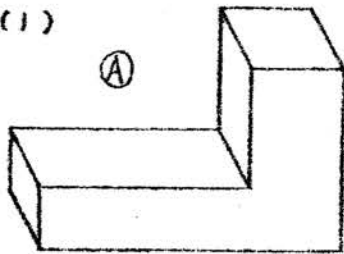
要旨 「算数はきらいだ」という児童がクラスの中に多くいる。原因はわからない、むずかしい、ややこしい、既習概念が利用できない等、いろいろあるようである。

なぜそう考えるのか、納得できないまま進むことが多く、算数をわからなくしていることが多い。

「算数が好きだ」この言葉の中には、わかるという意味がかくされていると思う。考えていく中で、思考の手助けとなるものがあれば、より確かな考え、よりヒントになるはずである。

研究内容

(1)

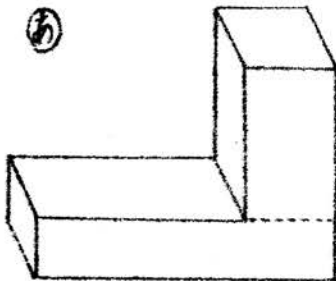


<5年> 体積は、何ccでしょう。

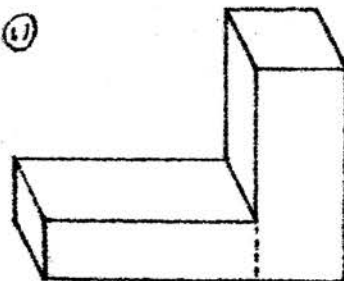
問題点

- ・図形が、立体の組み合わせたものであることがわからない。
- ・立体を分けるとどんな形になるのかわからない。

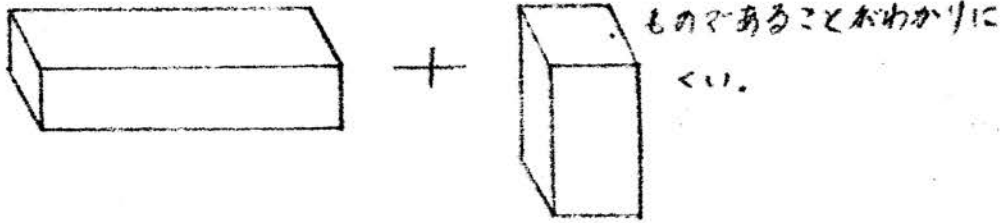
あ



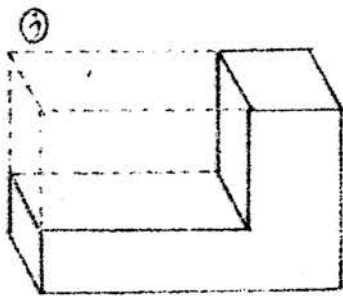
い



⑥ ⑤は、児童に分けてさせた時の、児童の方法である。切ったあとの様子がわかりにくく、立体感が出ないという点があり、下図の立体の組み合わせさせた

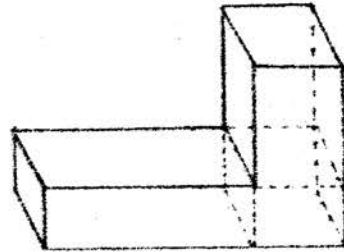


又、大きな直方体から一部の直方体を除いた図形と考えることも容易ではないようであった。そこで、画用紙を用い、上図の図形を組み合わせ、④の図形になるようにしておき、2つの立体に分けて見せると、視覚的にも立体が組み合わせさせたものであることが理解しやすかったようである。



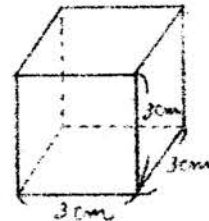
このようなことをやっているると、児童から別の方法がでてきた。

④の立体を2つの立体に分ける方法である。2つに分けるより不便であるが、なるほどとみんなを認めた。



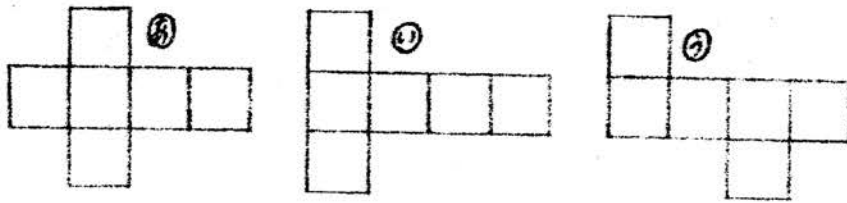
(2) 立方体の展開図は、何種類あるのだろうか。

(右の図は、立方体の見取図です。
この立方体の展開図をかきなさい。
(4年)



問いに対して、児童が見取図からどんな展開図をかきか興味があった。児童の考えた展開図を使い、方眼工作用紙からできるだけ多くの立方体を作り出したかったら思っていたからである。

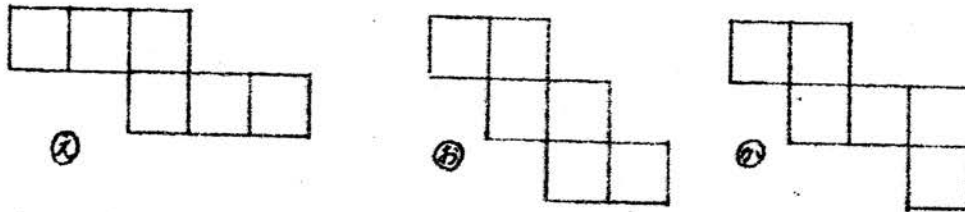
児童が、まず最初にかきはじめたのが、下図の様な正方形を4つまっすぐに



ならべた両側に、1つずつ正方形のついた形である。なかなか他の種類の展開図が出ないで「もうない」「ややこしい」等の言葉が出た。そこで、実際に、同じ大きさの正方形6まいを使い、自分で展開図を作ってみることにした。頭ではなかなか考えにくいものが、実際に自分の手で作ってみると、展開図の数が増えた。

6まいの正方形のそれぞれにセロテープをまき、それぞれをセロテープでつないで立方体を作る。作った立方体から、逆にセロテープをはずして展開図をつくる。ということをくり返し児童がやっていた。

「前と同じ展開図だ」「これだけが展開図だ」と言いながら、結構多くの展開図をかきことができた。



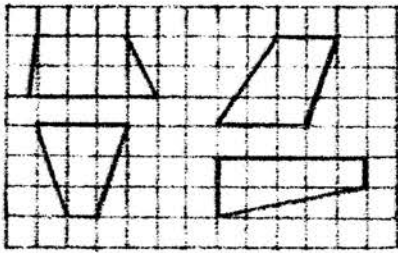
児童は、⑫・⑬・⑭のような展開図もかいた。

⑧・⑨・⑩のような展開図では、どの面とどの面が垂直になるのか、どの面とどの面が向かい合うのかが比較的考えやすいが、⑪・⑫・⑬のように複雑になると、念頭ではなかなか考えにくい。クラスの中で、だれかか新しい展開図をかけば、みんなに知らせていった。展開図から、立方体に組み立てることかむずかしい児童もいたが、実際に組み立て、ばらし、又組み立てていく中で、面と面との関係もとらえやすくなるように思った。

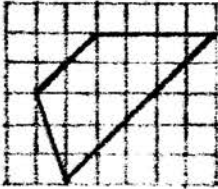
方眼工作用紙に立方体の展開図をできるだけ多くかき、立方体をたくさんつくるのは、⑫の方法であるが、なかなかかけない児童もあった。

(3) 台形 (4年)

方眼紙にいろいろな四角形をかかせると、児童は、線にそっていろいろな四角形をかき、その中から、平行な向かい合った辺を1組もつ四角形をいくつか



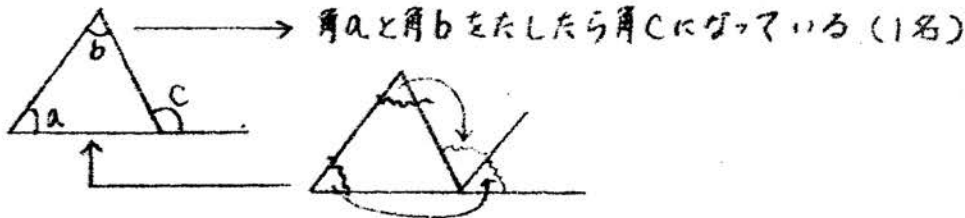
を取り出し、児童に提示し、辺の關係に着目させていくと、台形の概念(向かい合った平行な辺が1組ある)は、出まされたが、児童のかいていた図形のうちで、平行な辺が方眼紙の上にあるのではなく、左図のように斜めに通っている台形について考えさせることができなかった。



斜めにかかれた台形を学習させることにより、

方眼紙がなくなった場合でも、平行の關係がはっきりとし、より確かな概念となるように思う。

(4) 三角形と四角形の角 (5年)



この考え方が出まされたのは、児童が角を切って一直線に並べるということをやった産物だと思ふ。

児童が算数が好きになるには、まずわかる問題が解けようかと思ふことだと思ふ。そこで、児童の思考の手助けとなるものがあるれば、又、児童自らを作り出せば、児童とともに作り出すことができれば、クラスの中から算数好きの人が少なくなっていくように思う。

1つでも多く、数学的な考え方を高める学習具をつくり出してほしい。

第1分科会(算数)

数学的思考を高める相互作用のあり方

愛知県春日井市立高座小学校 後藤幸康

1. はじめに

私は新任3年目、ほとんどが一斉学習の形態を続けてきた。できる限り全員を授業に参加させたい、思考を深めさせたいと願ってきたが、発言の機会が少ない児童が多くいるし、教師や友だちから認められたという児童が多くいました。

そこで、何とか意欲的に授業に参加させ、ひとりひとりを認めてやる授業を工夫したいと考え、バズ学習の実践を試みてきた。

殊に、「算数」という教科は、「考える」ということ、多面的に考える、深く考える、という場面を重視したいと考えた。そこで、バズ学習による話し合い活動(相互活動)をとり入れることにより、思考力を身につけさせたい。

以下、拙い実践であるが、述べてみたい。

2 指導例

(1) 題材 5. 比例

③ 正比例のグラフ(1/2) (啓林館 6年上 P.78)

(2) 本時の目標

- 正比例のグラフをかき、その特徴を理解させる。

(3) 指導過程

	学習課題	形態	学習活動														
準備課題	<table border="1"> <tr> <td>x</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>5</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>y</td> <td>2</td> <td>4</td> <td>6</td> <td>8</td> <td>10</td> <td>12</td> </tr> </table> <p>(1) 上の表を見て、「決まった数」を求め、xとyの関係を表に式にまとめなさい。</p>	x	1	2	3	4	5	6	y	2	4	6	8	10	12	比例 ↓ 比例	<ul style="list-style-type: none"> 前時に学習した。 「$y = (\text{決まった数}) \times x$」 を利用し、表からxとyの関係を式に表わす。 $y = 2 \times x$
	x	1	2	3	4	5	6										
y	2	4	6	8	10	12											
<p>(2) 表をグラフにかき、正比例のグラフは、どんな特徴があるか答えなさい。</p>	比例 ↓ 比例	<ul style="list-style-type: none"> 方眼紙にとる。 となり同士で確かめる。 															

中心課題	① 表からそれぞれの点を方眼紙をとりのさい。		
	② 点と点とを結びなさい。	ひとり ↓ となり	<ul style="list-style-type: none"> 点と点とを結びなさい。
	③ 正比例のグラフはどんな特徴があるか答えなさい。	ひとり ↓ となり ↓ 班 ↓ 全体	<ul style="list-style-type: none"> 気づいたことをまとめる。 となり同士で確認する。 班ごとに発表し合う。 全体に発表する。
確認課題	④ ホテストをしなさい。	ひとり	

3. 課題の設定

課題を、準備、中心、確認とする過程に分け、課題の提示を行ってきた。

(ア) 準備課題

- 中心課題解決のための基礎的な課題。
- 本時の中心課題に迫るための既習知識を整理する課題。

(イ) 中心課題

- 本時の目標を達成させるための課題。
- 十分な思考を要する課題。

(ウ) 確認課題

- 本時の学習内容が確認され、まとめられる課題。
- 本時の学習内容が一般化されたり、転移される課題。
- 本時の学習内容が次時の目標へとつながる課題。
- 本時の学習内容が次時への興味や関心を喚起する課題。

4. 学習の形態

(ア) ひとり学習

- 個人の思考を深める学習。

(イ) となり学習

- 学習の確認をした上、知識の定着を確実にする学習。

(ウ) 班学習

- ・ 思考の多面化をはかったり、知識の定着をはかったりする学習。

(エ) 全体学習

- ・ 教師の指導、補足、修正を聞き、学習内容をより確かなものに
する学習。

5. 思考の深まりと知識の定着

(ア) 知識の定着

- ・ 表からグラフをとる作業(課題1)

ひとり学習でできた者 ————— 72%

x軸とy軸のとり方をつまづいた者 ——— 8%

目盛りのとり方をつまづいた者 ————— 12%

点がみつけれなかった者 ————— 8%

「となり学習」(隣接法)の結果、100%理解に達した。もちろん、
これから忘却していくこともあろうが、現時点の即時評価としては、
「となり学習」の効果は、大といえよう。

(イ) 思考の深まりと広がり

- ・ 課題(2)② 点と点とを結ぶ

- ・ 「どうして表には、xとyに、0がついていないのに、0と
いう点を通るのか。」

- ・ 「どうして表には、2,3の間に値がないのに、グラフでは、
あるのか。」

のような疑問を持つ児童がかなりいた。「ひとり学習」を2分間
とったが、解答は得られなかった。その後、「班学習」で話し
合いを深めていくと、グラフ化の意味に着目して達成を見た。

- ・ 課題(2)③ 正比例のグラフの特徴

「ひとり学習」から「班学習」にいくにしたがって、思考は広が
りを見せた。「ひとり学習」で、かなりの児童は解答を得てい
たが、「班学習」をすることにより、「そういう考えもあるのか
と、思考は深まり、広がりを見せた。

解答を例示すると

△ 直線である。

△ x軸に「1」進んだら、y軸に「2」進む。

△ 同じ間隔で上へ進んでいる。

△ 方によがっている。

したがって、ひとり学習→班学習と話し合いをすることによって、思考は深まり多面化していくことに有効である。

(4) 簡易な問題点

① 課題の性質の難度によって、学習の形態をよく考える必要がある。

基本的学習形態として、ひとり学習→ひとり学習→班学習→全体学習と進めるわけだが、それほど思考の深まりや広がりも必要としない課題の場合は、適切な取扱選択が必要である。

6. 評価の方法

評価はいかにあるかが問われているが、評価については、次のようなことをふまえて、研究していきたい。

① 評価を単なる評定と考えるのはない。評価を指導との表裏一体、どう考え、よい授業は、よい評価活動の結果と考える。

② 評価を教師のものだけと考えるので、評価を児童のもの—即ち自己評価に重点をおきたい。

7. まとめ

まだまだバズ学習を始めて半年ばかり。私の指導技術の未熟さもあり、十分な成果を挙げ得えていない。しかし、確かに言えることは、

① 児童が生き生きと授業に参加してきた。

② 思考を深めること、広めることに有効である。

③ 評価を児童自身のものとするにより、授業が彼ら自身のものとなった。

まだ、試考錯誤の状態、問題点も多くかかえている。こうした問題をひとつひとつ解決して、児童の成長を期していきたい。

第1分科会 算数

研究主題 1年生の子どもが、お金を払ったり、おつりを渡したりして、加法・減法の使われる場を確かなにとらえていく指導はどうか。

兵庫県 加西市立富田小学校 西村忠昭

要旨 1年生の子どもは、抽象的な思考ができていない。そこで、次のような事柄を大切にして学習を進めている。

- ① 体を使った行動を通しての学習をさせる。
- ② 具体物を使っての学習をしくむ。
- ③ 絵に表す記録方法を学習に取り入れる。

そして、数(計算)のひらべりを次のようにしてきた。

4月—10までの数	左の学習活動の中で、子どもたちが生活の中の具体的な場と加法減法を結びつけることを常に意図しながら指導した。
6月—答えが10までの加法・減法	
7月—20までの数	
10月—繰り上がり繰り下がりのある加法・減法	
1月 <small>上半期</small> —100までの数	
1月下旬2月上旬—100までの加法・減法 (繰り上がり繰り下がりを含む)	

ここでは、1年の数と計算の領域のまとめとして、もう一度、具体的な生活の場にもどすことを考えた。

買い物ごっこを持ち込み、体験的な学習をさせるのである。今までの加法・減法のとらえを、買い物ごっこで生かしてくれたらと願っている。

分科会の研究主題との関連

① 学習具を工夫し、創作活動を通して ② 数学的な考え方をどのように高めるか。

①については、買い物ごっこの準備(品物、お金)を子どもたちが作るものとする。

②については、意欲をもうあげ、活動を具体的にする買い物ごっこの中で、加法と減法の使われる場を具体的にとらえることである。

研究内容

体験的な学習として、買い物ごっこを設定した。しかし、むやみやたらにさせていても無意味であろう。加法・減法の場合を広くとらえさせるために、どんな買い物ごっこをさせるのが大切である。

1. 学習計画

第1時	第2時	第3時	第4時	第5時
計画を立てる (何やさんにならうか) (いぬものは何か)	準備をする (品物を用意する) (値段をつける)	買い物ごっこをする		

子どもたちが、計画を立てたり、準備をしたりする中で自ら、学習具を工夫し創作活動に夢中になる姿を想定した。

2. 約束を変えながら買い物ごっこをしていく。

第3時	第4時	第5時
○ 2つのしなものをかう	○ 2つのしなものをかう	○ 1つのしなものをかう
○ おつりをもらうおれ方を する	○ どちらが 高いか しらべろ	○ どのしなものも 20円 ねあげている。

このように、買い物の約束を変えていくことにより、加法と減法のいろいろな場を子どもたちが体験していくと信じている。子どもの意欲と活動が次々と連続していく。学習が連続したものとなる。

3. 買い物をするとき、売り手と買い手の会話を大切にする。

4. 買い物メモを記入させる。

以上の4つを、本單元買い物ごっこの構想として実践した。大会当日、それを発表する予定である。

第1分科会 算数

研究主題

学習具を工夫し、創作活動を通して数学的な考え方を、どのように
高めるか —— 複線式指導による授業改造をめざして ——

兵庫県姫路市立野里小学校 久保好則

1、複線式指導とは

本校では昨年11月、「複線式指導による授業改造」というテーマで市指定の研究発表会〔国語、算数〕を行った。

子どもたちは、一人ひとり、個性も能力も異なっているものである。その子どもたちを前にして、画一的な一斉指導だけでは、全ての子どもたちに「わかった」という喜びを味あわせることはできない。従来、漠然と中位の子どもに向けられていた指導者の視線を上位者、下位者にも意図的に向けようとするものである。

2、三層構造について

前提条件テスト、事前テスト等によって学級の児童の到達度をA層（上位者）B層（中位者）C層（下位者）の三層（複線）に分け、指導者はそれぞれの層に適した指導法を考えなければならない。

3、複線式指導の方途

（ア）説明のためのレトリックを考える

とくにC層の児童には、やさしいいいまわし、物に例えて説明する等の工夫が必要である。

（イ）学習形態の工夫

学習内容によって、個別学習、小集団学習等を適宜とり入れる。

（ウ）問題解決的な学習過程

つかむ → 調べる → 深める → まとめる

（エ）教育機器の活用

とくに、つかむ段階、まとめる段階等において活用している。

(オ) 教具、操作活動の重視

(カ) 指導案の工夫

A層、B層、C層に対する三通りの指導案を工夫する。

(キ) 学習規律を高める。

4、本校のすすめている算数指導

(ア) ねらい

- ・ 児童一人ひとりに確実な数と計算能力をつける。
- ・ ものごとを論理的なすじ道に従って考える力を養う。

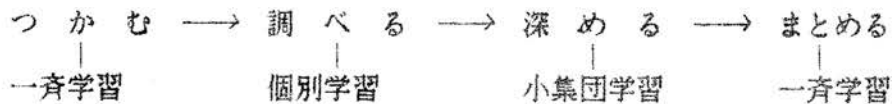
(イ) 教材内容の分析

- ・ 目標の明確化、具体化
- ・ 単元全体および本時の目標分析

(ウ) 児童の実態把握

- ・ 前提条件、事前テストの結果をs.p表、座席表等に表す。

(エ) 学習展開



(オ) 評価

- ・ 授業中、机間巡視をしながら座席表にチェック
- ・ 事後テストによる評価

5、授業の実際

(1) 単元 分数(5年)

(2) 本時の目標

- ・ 分数の第二義($a \div b = \frac{a}{b}$)について知らせる。また分数を小数で表すことができるようにする。

(3) 児童の実態

これまで分数についてどの程度覚えているか、簡単なテストを実施した。その結果は次のページの表のようである。

内 容	誤答率 %
分数の第一義	3
分数の大小	13
同分母の真分数のたし算、ひき算	0
帯分数を仮分数に直す	30
等しい分数	40

帯分数を仮分数に直したり、仮分数を帯分数に直す問題は計算のまちがいが多かった。また等しい分数については $\frac{4}{6}$ と $\frac{6}{9}$

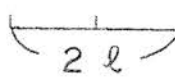
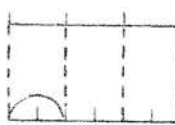
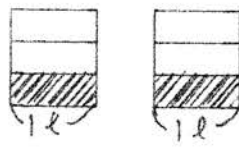
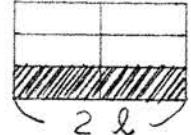
とが同じであるということがわからない児童があった。これは $\frac{2}{3}$ という分数になることがわからなかったためである。

(4) 展開

○つかむ

しょうゆ2ℓを同じように3つに分けると、1つ分は何ℓになるでしょう

○調べる

A	B	C
<p>2ℓを3つに分けるのだから $2 \div 3$ わり切れないから、分数で表して $\frac{2}{3}$ ℓ</p> <p>(指 導 の て だ て)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 式を一ばん化する $\triangle \div \square = \frac{\triangle}{\square}$ <ul style="list-style-type: none"> ・ みんなに説明できるようにさせる。 ・ 練習問題をする。 	<p>2ℓを3つに分ける</p> <p>$2 \div 3 = 0.666$</p> <p>約 0.67ℓ</p> <div style="text-align: center;">   </div>	<p>$2 \div 3 = 0.666?$</p> <div style="text-align: center;">   </div>



○たしかめる。

- ・それぞれの考えを発表する。
- ・みんなの考えを聞いて自分の考えを確かめる。
- ・類似問題をする。

(小集団で話し合い)

(A層の児童がリーダーとなる)

○まとめる

- ・O, H, Pを使って説明する。

6、授業後の考察

○事前テストについて

本時にはいる前に「2mのテープを3つにわけました。1つ分はいくらになるでしょう。」という問題をやらせてみた。下はその座席表の一部である。

① A $\frac{3}{3}$ は1m
のことだから1つは
 $\frac{1}{3}$ m. 2つは $\frac{2}{3}$ m

② C
 $2 \div 3 = 0.6$
0.6m

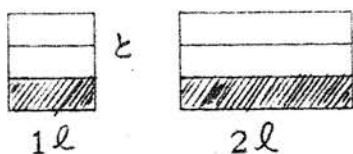
③ B
 $2 \div 3 = \frac{6}{10} = \frac{3}{5}$

⑦ B
 $2 \div 3 = 0.66$
 $\frac{66}{100} \quad \frac{33}{50}$

⑧ A $1 \div 3 = \frac{1}{3}$
 $\frac{1}{3} \times 2 = \frac{2}{3}$

⑨ C
 $2 \div 3 = 0.666$

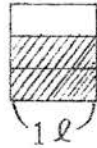
○子どものつまずきの例



を見せるとどちらも $\frac{1}{3}$ lではないかという。

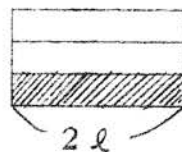
そこで と の大きさを比べ

どちらも $\frac{1}{3}l$ ではおかしいではないかと気づかせていった。左は $1l \div 3$ 、右は $2l \div 3$ の意味であることを指導していった。これまでの学習ではほとんど、全体が1となるような場合が多かったのとまどったのだと思う。

ある子どもは、答えが $\frac{2}{3}l$ であると  でもいいではないかという。なるほど斜線の部分は $\frac{2}{3}l$ である。子どもの思考として $\frac{2}{3}$ というのは、 $1 \div 3 \times 2$ というように解釈し、 $2 \div 3 \times 1$ というようには考えにくい。(3、4年で、分数の第一義、全体を1としたとき〜は何分のいくらという学習をしてきているので、そのことが強く頭に残っている。)そこで全体が漠然とした量ではなく $2l$ とか、 $3m$ とか、 $4km$ というように具体的な数量で表す場合について指導した。



と



の図の違いについて徹底的に討論させた。

○教具の活用について

本校ではとくに教具の開発については、組織をあげてすすめているわけではない。教師一人ひとりの創意工夫にまかされている。B層、C層の児童にどのように指導するかについて、だれもが頭を悩ませている。本クラスでは平凡ではあるが、線分図、面積図の書き方についてとくに力を注いでいる。(線分図については長さ10cmのテープを、面積図については1辺が10cmの正方形の紙を与えて、それを折ったり線を引いたりして考えさせる。)授業に操作活動を取り入れることによって、子どもたちは生き生きと学習に取り組むことを再認識した。

7. 今後の課題

わたしたちは今後も算数については、複線式指導を続けていくつもりである。今までのことを反省し、さらにつぎの諸点についてもっと考えていかなければならないと思っている。

- 子どもの学力の定着度を深く知るために、事前テスト、前提条件テスト等の内容についてもっと深く分析しなければならない。
- B層、C層の児童に対する指導の手だてを工夫するために、適確な教具を開発しなければならない。
- 学習に対する意欲を喚起するために、展開の導入部において、どのように課題提示をすればよいか。
- 小集団学習を活発にするための 学習リーダーの養成。

数学的な考え方を育てる授業の創造

—操作活動, 学習具の工夫, 活用を通して—

兵庫県姫路市立御国野小学校 中島 憲子

1. 主題設定の理由

本校は昨年度まで、子どもに確かな計算力をつけたり、文章題を読み取る力をつけることに重点をおきつつ、知識や技術の習得を通して、数学的な考え方を育てようとしてきた。

本年度は、子どもが与えられた問題を解くだけでなく、自らが活動していく中で、問題を意識し、それを数学的な問題にまで形式化し、問題解決の過程をふまえる授業の創造を考えた。そのためには、口頭だけの指導や文字を通しての学習から、作業を活用した学習をめざし、学習具の工夫を必要とする。授業の中で子どもたちが、その学習具を使って実際に手を動かし、生き生きと学習に取り組み、発見、追求、定着をくり返しながらか、やがて内面化された思考的活動そのものになるような学習方法でなければならぬ。

即ち、子どもが自ら課題を見つけるような学習具を工夫するとともに、その学習具を操作しながら、子どもが学習集団として未知の世界にチャレンジする精神と、そのよりよい方法を追求する中で、「数学的な考え方」を伸ばしていこうと、本テーマを設定した。

2 研究推進の概要

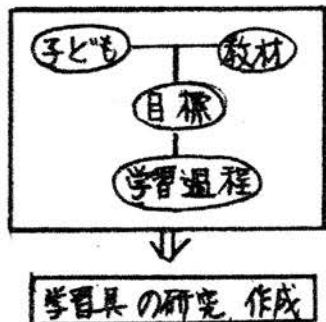
(1) 「数学的な考え方」の明確化

算数科の目標は「数量や図形について基礎的な知識と技能を身につけ、日常の事象を数理的にとらえ、筋道を立てて考え、処理する能力と態度を育てる。」ことである。この後半のねらいは、数学的な考え方を伸ばすことであると端的にまとめることができる。

その数学的な考え方は、知識や技能の習得を通して、筋道をたてて推論したり、論理的に思考したりすることによって育成される。そこで、子どもたちがどのような行動や態度をとったときに、数学的な考え方が育成されたかを明確にすることが重要である。そのために、単元ごとの数学的な考え方の目標分析に努めた。

(2) 学習具の工夫

数学的な考え方を伸ばすためには、まず、子どもが学習に興味・関心を持ち、「よし、やろう!」という意欲を喚起させ、学習活動に具



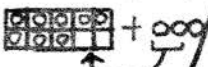
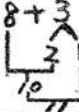
体性を持たせることが大切である。そのために、実用的価値、数学的価値があり、解決方の多様性を持って、発展的な扱いが可能な学習具の研究を進めている。

(3) 操作活動の重視

主体的に学習に取りくんだり、性質、きまりの発見や発展的な考察処理、概念の獲得のために、学習具を用いた操作活動を重視した。特に具体的な操作活動をどのように行わせると数学的な考え方が伸びる

のかを研究したり、具体的思考から抽象的思考への移行を図るために、「映像的操作活動」を重視し、絵、図、表を活用して、抽象化、念頭的思考への発展を意図してきた。また、数学的な考え方の育成を助長する適切な助言やまとめについて、指導上留意したい。

単元における操作活動の流れ

種類	具体的操作活動	映像的操作活動	形式的操作活動
媒介	具体物、半具体物を使って	絵、線分図やいろいろな図、表を使って	数、文字、記号を使って頭の中での念頭操作を使って
例 8+3 の計算	おはじきを用いて操作 	8+3  また操作を示した上の図を見て	「8に2をたして10、10と1で11」を念頭で

(4) 相互学習の活用

個人思考の結果を広め、深め、より確かなものにするために、下記のような基本的な学習過程を設定し、グループの学習や全体学習の場面で相互学習を重視した。自分の考えと他の人の考えとを比較し、修正したり、明確化したり、簡潔化したり、統合したりすることによって、より一層数学的な考え方を伸ばそうとした。

基本的な学習過程

1. とらえる (課題を自分のものとする。)
2. しらべる (操作活動等を通して、自力解決を図る。)
3. たしかめる (集団での話し合いで、自分の考えを補い、広め、深める。)
4. まとめる (考えや解き方、概念、法則等をまとめる。)
5. ふかめる (練習、定着、新しい課題を発見する。)

3. 実践例 (第3学年 単元「三角形」)

(1) 本単元の指導にあたって

本単元の数学的な考え方を次のようにとらえた。

- ・ 辺の長さや角の大きさに着目して図形を調べようとする考え方。
- ・ 三角形を関連づけてとらえようとする考え方。

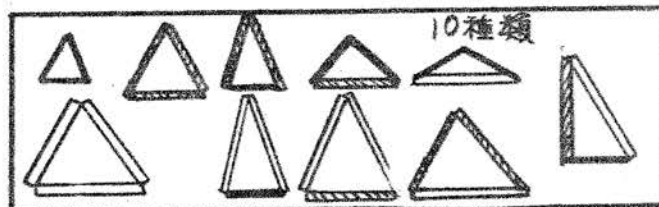
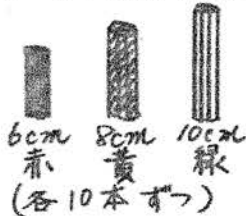
そこで、この数学的な考え方を伸ばすために、第2学年の「三角形」を特殊化して、正三角形、二等辺三角形を理解させ、今まで全体的、直観的にとらえていた三角形について、その構成要素に目を向けて、類似点、相違点等を考察しながら、部分的、分析的に三角形をとらえて検証させたい。そこで、具体的な操作活動の中で思考し、その操作の過程を次第に抽象的な思考活動にまで高めたい。

(2) 第1次 第1時 「三角形作りと分類」の授業

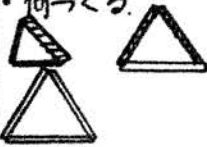


① 本時の目標

- ・ 認知的目標
 - ・ いろいろな三角形を作り、辺の長さに着目して三角形をなかま分けし、正三角形、二等辺三角形について知る。
- ・ 態度的目標
 - ・ ひごを使って三角形を構成、分類することに興味や関心をもつ。
 - ・ 三角形を分類する観点について、自分の考えをグループで説明できる。

② 本時の学習具と 作成可能な三角形



③ 学習の流れの概要

学習の流れ	児童の反応(操作活動と子どものつばやきを中心として)	
	作業のはやかったA子	作業のおそかったB子
1. 課題を確認する いろいろな 三角形をつくらう	<ul style="list-style-type: none"> 何つくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 何つくる。
2. いろいろな三角形 をつくる。	<ul style="list-style-type: none"> どんなん作ろう。 (作った三角形をみなから、他の三角形を抽出している) あれ、同じもん作ってしもうた。 (作業途中で課題を意識し、修正しながら操作活動をしている) 	<ul style="list-style-type: none"> できた。 (1つ作るのに時間がかかるが、できたことに喜びを感じる) 
3. 作った三角形(10種類)を黒板に提示する。	<ul style="list-style-type: none"> これあつた、あつた。 (自分の形と黒板の形を対比し、分類している) 反対にしたら同じや。 (まわしたら同じ三角形だと実際に回す操作で理解した) 	<ul style="list-style-type: none"> これちがうのや。 (2つの図形をうら返し重ねる方法が考えられず、合同な2つの直角三角形(裏の合同)をちがう形と判断していろいろ移動している)
4. 三角形を仲間分けする。 ・個人で分類する。 ・グループで話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 形がこもうな、とうたけやから、同じなかまや。 (正三角形の条件を理解している) こうや、てひくり返したら、これとこれは、い、し、やろ。 (グループ内で分ける時となり、の子に操作を加えて説明) 同じ色やから、い、し、よにするんや。 (色と辺の長さが結びつきにくい発言もある) 	<ul style="list-style-type: none"> △ △ △ どれも赤が2本あるから同じなかまや。 (等しい辺が2本の形と3本の形の区別ができにくい) ああ、ほんまや。 (分類も具体的操作で理解できた)
5. 学習のまとめをする。 「正三角形」「二等辺三角形」の用語を知る。		

(3) 第1次 第1時の授業の考察

本時学習でねらう数学的な考え方は、三角形の概念の形成に際して位置、大きさ、形を捨象して、辺の長さに着目して分類できることである。

そのため、まず、色のついたひご（学習具）を用い、三角形を構成した。具体的な操作活動であるので、児童は意欲的に三角形を構成した。しかし、操作活動をする時の約束は、教師からではなく、子どもたちが決めたり、見つけたりした方が課題に対する取り組む姿勢がより意図的な活動となつたのではないだろうか。

次に、四角形の構成要素に着目させ、作成した三角形を分類していったが、分類につないでいける発問、指示の仕方が子どもの自由な思考を拘束した面もあった。数学的な考え方を効果的に育てるためには、子どもが主体となる授業を創造しなければならない。

授業後の子どもたちの感想は、「おもしろかった。」「形が反対でも同じだとわかった。」「三角形なんかかんたんだと思っていたけど、とてもむずかしかった。」「たくさんの三角形をつくって辺の長さや形をよくみてわかった。」「等であったが、グループ学習で、相互学習のはたした役割もみのがすことができない。その際、個人差にどう応じるか、教師の個別指導はどうあるべきか、今後の課題である。

4. 今後の課題

操作活動を重視した授業によって、学習への興味、関心や学習内容の理解の面に効果は上がってきている。今後、さらに單元ごとの数学的な考え方の目標分析や、1時間ごとの数学的な考え方の具体目標の明確化を図ると共に、学習具の作成に力を注ぎ、操作活動をとり入れ、数学的な考え方を育てる授業の創造の推進に努めたい。

第2分科会

社会

研究主題 「活動」を重視した指導の実践(1年生1学期の授業から)

広島県豊田郡豊町立豊小学校 土井 紀美子

I. 授業にあたって

- 1) 学級の実態
 - ・持続性が乏しい
 - ・自分の基準で判断したことに固守したり、友達の見解を聞くとうとしない。
- 2) 主体的な学習を進めるための教師自身の姿勢
 - ・変化のある授業をくみ、楽しい授業をする。
 - ・話し合い活動を多く組み入れ、わかる授業をする。
- 3) 話し合い活動の目標行動
 - ・1学期
 - ・人の話をよく聞ける。
 - ・大きな声では、きりと語尾までいえる。
 - ・2学期
 - ・思いつき発言でなく、根拠をもった発言ができる。
 - ・3学期
 - ・自分の考えを相手にうまく伝える話し方ができる。
- 4) 社会科授業の中で
 - ・自分の所属する学校や家庭が学習の対象なので 疑問が生まれるたびに現地学習をし、どのようになっているかに力点をおいて事実をいねいに見させる。
 - ・集団で表現する「楽しさ」を味わわせる。

<p><例> 豊小学校 通学路の位置 季節にあわせたくらし 学校にある施設 豊小学校ではたらく人達 給食をつくる人達 うちの人の仕事 私が生まれてから</p>	<p>床地図模型 絵年表 絵カード ゲーム 動作化 ごっこ遊び・イラスト KJ法</p>
---	--
 - ・種々の表現活動により、問題解決する喜びを味わわせる。

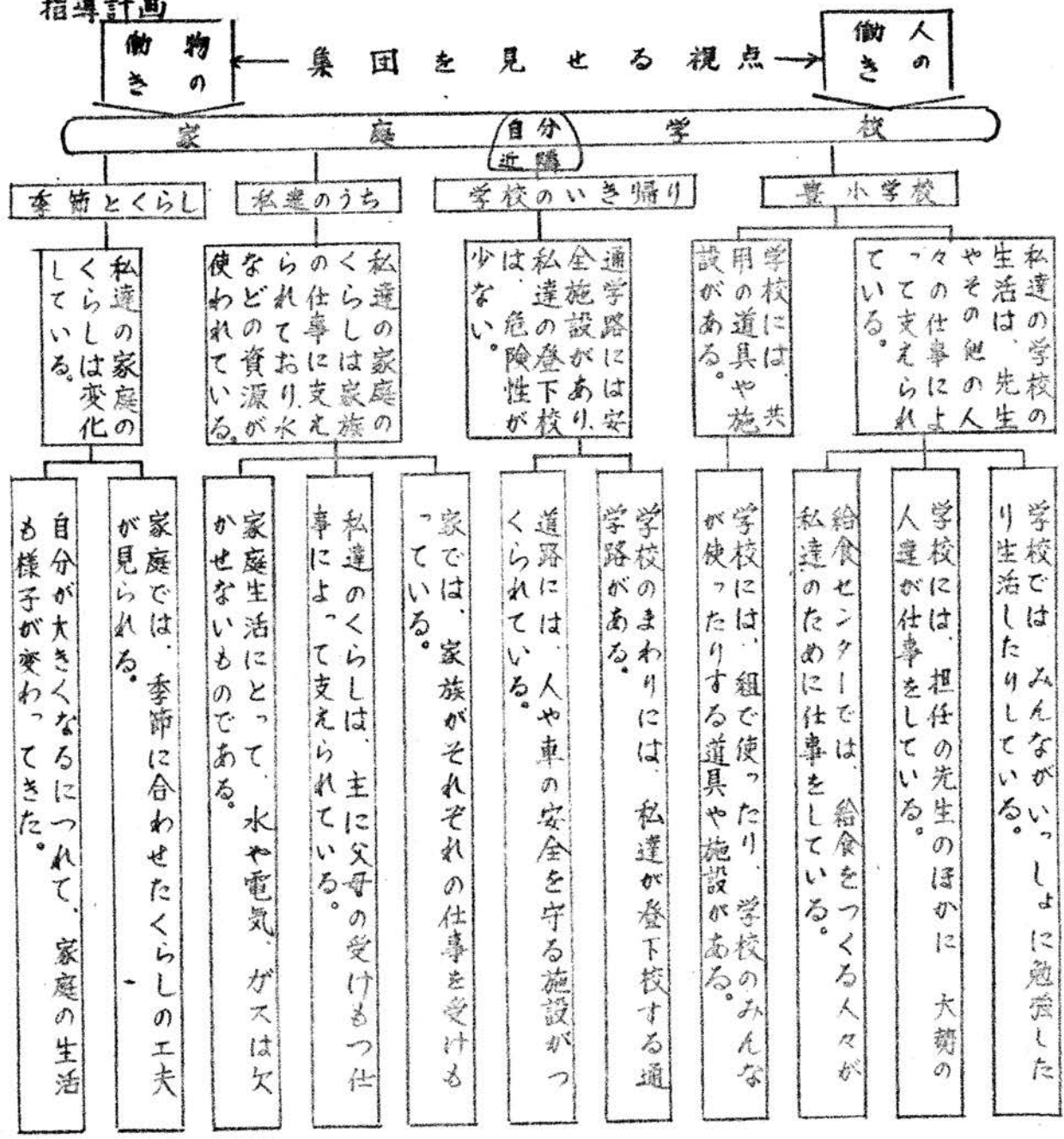
II. 授業設計の手順

- (指導書) (指導要領) (複数の教科書) (子供の実態)
- ① 1年間の指導計画
 - ② 単元の設定
 - ③ 単元の目標
 - ④ 単元の指導計画
 - ⑤ 主題決定
 - ⑥ 指導目標・目標行動の設定
 - ⑦ 下位目標行動の分析
 - ⑧ 下位目標行動の相互関連図の作成
 - ⑨ 学習教材の選択
 - ⑩ 学習方法・形態の決定
 - ⑪ 指導プログラム作成
 - ⑫ 教材の準備
 - ⑬ 抽出児のカルテ配布
 - ⑭ 学習プロフィール分析
 - ⑮ 授業反省

Ⅲ. 年間目標と指導計画

- 目標(1) 自分達の生活を支えている人々の仕事や施設などのはたらきに気付かせ、社会の一員としての意識をもつようにさせる。
- (2) 日常生活で経験する社会的事象を具体的に観察させ、効果的に表現させる。

指導計画



Ⅳ. 大単元のねらいと指導計画

1) 大単元名 豊小学校

2) 大単元のねらい

いくつもの学級があって沢山の人が勉強したり生活したりして、
学校を支える大切な仕事をしている人がいることに気付かせ、集団

3) 指導計画と配当時数

単元	目 標	主 な 学 習 内 容	主 な 学 習
一 年 一 組	学級には、自分だけ でなく 大勢の友達が おり、みんなで使う施 設や道具があることに 気付かせる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年1組の人 ・ 友達の席と自分の席 ・ 1年1組の中の自分 ・ 1年1組という集まり ○ 1年1組にあるもの ・ 教室内にある施設や道具の名前 ・ 自分のもの ・ 友達のもの ・ 先生のもの ・ みんなで使うもの 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各自の顔 ・ 座席表づくり ・ 名前あてり ・ 人数調べ ・ 絵カード作り ・ 見取り図の貼付
学 校 め ぐ り	学校のめぐりを通して 学校にはいくつもの学 級があることに気付か せ、施設を使っての遊 びを通してみんなが使 い方にきまりがあるこ とを理解させる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分達の学級と同じところや 違うところ ・ お兄さんやお姉さんの教室 ・ 特別教室 ○ 学校の道具や施設の性格 (共有物) ・ 道具 使い方ときまり 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校めぐり ・ 絵カード作り ・ 床地図模写
豊 小 学 校 で 働 く 人 達	子供たちにとって最 も身近である担任の仕 事を通して先生の仕事 の理解をさせる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土井先生の仕事 ○ みんながいる時 ・ 勉強 ・ 遊び ・ 給食の世話 ○ 放課後 ・ 学習の準備 ・ 採点 ・ フリント印刷 ・ 掲示 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観察日記

ある豊小学校には、共用の道具や施設があり、また、担任の先生以外にも
 日の一員としての自覚と喜びをもたせる。

活動(形態)	能力の育成	配時
会 (個) くり (ペア・集) ゲーム (集) ゲーム (集)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の顔絵を描く力 集団の中の個を認識する力 自分の座席の位置を判断する力 学級集団を認識する力 	5
作り (個) 絵カード (ペア・集)	<ul style="list-style-type: none"> 施設や道具を描く力 物の名称を正しく認識する力 自分のものと他人のもの、共有物を判別する力 何を、いつ、だれが使うか説明する力 位置を正しくつかむ力 	
1 (集)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の学級と他学年他学級の異同を観察し考える力 自分の教室を基準にして他教室へ行く力 	6
くり (個→個) 生 (集)	<ul style="list-style-type: none"> 道具や施設を描く力 校舎や施設、道具を模型で表現する力 施設、道具の使用法を理解する力 	
(個)	<ul style="list-style-type: none"> 担任の仕事を観察して内容を記録し発表する力 具体例から他を類推する力 事象のうらにあるものをつきとめようとする力 	8

<p>人達</p>	<p>学校には、自分たちのために、担任の先生以外にも大切な仕事をしている人たちがいることに気付かせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の仕事による名前あて ・保健の先生の仕事 ・保健室を利用した経験 ・保健室の配置、治療（けがの看護） ・予防（健康診断） ・保健室にあるもの ・家庭常備薬と保健室の薬品との比較観察 ・けがや病気に対する対応や配慮の仕方 ・養護の先生の願い 	<ul style="list-style-type: none"> ・「私はだれでのゲーム ・保健室利用者 ・保健室の見学 ・絵カード
<p>給食をつくる人達</p>	<p>給食センターでは、給食をつくる人々が私達のために仕事をしていることに気付かせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・給食をつくる人と所の観察 ・働いている人の様子 ・働いている人の様子 ・給食センターにあるもの ・施設や道具の使われ方（自分の家庭と違う点） ・給食をつくる人が気をつけていること ・作業前や後片付け ・おいしく ・時間内に ・清潔に ・給食のおばさんの願い 	<ul style="list-style-type: none"> ・イラスト ・給食センター ・給食のおばさん ・作化（個→班） ・給食センターを家の人に説 ・給食センターさんにお手紙

しょう」
(集)
調べ(個)

- ・教職員の姿が想像できるように発表する力
- ・豊小学校の教職員を知り、その仕事について具体的事実を見ようとする力
- ・保健室利用者教・内容を調べる力
- ・を発表する力
- ・過去の経験を想起して発表する力
- ・いくつかの仕事を間的にとらえる力
- ・具体物から使用目的を考える力
- ・視点を変更する力
- ・家庭常備薬ともの異同を考える力
- ・学習経験をまとめて、自分の態度を見直す力

(個)
の見学
の動
→集)
の様子
明(個)

- ・自分の家庭との異同を考える力
- ・観点にそって観察し、自分なりに工夫して表現する力
- ・観察した結果をより効果的に表現する力
- ・観察した結果をわかりやすく説明する力
- ・観察した事実から問題解決する力
- ・人々の活動の背後にある考えを具体的資料を通してとらえる力
- ・学習経験をまとめて、自分の態度を見直す力

4

のおは
を書く
(個)

第2分科会 社会

研究主題 地域の素材を教材化し、自ら学ぶ力と態度をどのように育てるか——6年生「百姓一揆と打ちこわし」で地域の素材『姫路藩の全藩一揆』にとりくんで——

兵庫県姫路市立青山小学校 竹沢 啓之

要旨 これまでの歴史学習において、私自身、教科書に出てくるような歴史事象や事実を知識として習得させることに捉われ、子ども達自身の実生活から出てくる考えを大切にしたり、郷土をみつめ、愛する態度を育てたりしながら学習する過程を、ついおろそかにしてしまうことがあった。しかし、これでは、子どもひとりひとりが自ら生き生きと学ぶ姿は遠のき、徐々に受身的な学習態度がみられるようになってもおかしくはない。

子ども達が本当に生きた歴史を学ぶということはどういうことなのだろう。私はひとりひとりが持つ自らの実生活から出てくる認識をもとに、資料を通して、より身近に具体的に歴史事象や事実にあふれ、自らの体験として客観的認識を持ち、それを仲間とともに深め、広げ、主体的にまとめていく過程だと考えている。

そこで、ひとりひとりが自ら生き生きと学ぶ力と態度を育てるために、本校の研修テーマを土台にしてつぎの3つの柱を立ててみた。

研究内容

I. 本校の研修テーマと3つの柱

ひとりひとりに生き生きとした学校生活をおくらせるために

・人間尊重を基盤とした道徳性を育成する

◎個人差に応じる複線式指導を推進する

(研修部)

(努力目標)

(努力事項)

・生活指導部〈略〉

・保健体育部〈略〉

・**社会科部**

基礎的・基本的事項
の定着をはかる
(小集団学習の推進)

・視聴覚的方法の活用
・教師の発問の工夫
・ノート指導の重視

Ⅱ. 指導にあたって

(1) 児童の実態

青山校区は姫路駅南西 / 0 km 足らずの所で、夢前川の西岸に位置し、新興住宅地として開かれた所と、昔から農業等を営んできた所から成り立っている。しかし、一部研究者を除いて住民の新旧を問わず、われわれも子どもも郷土周辺の歴史についての認識はそれほど深くないといえるだろう。

(2) 教材について

われわれは、歴史学習をしているといいながら、知らず知らずのうちに、郷土を知らない子ども達を育てているのかもしれない。

それゆえに、地域の歴史的素材を精選し、教材化することによって、もっと歴史を身近な親しみやすいものとして 見えさせる必要性が出てくる。

幸い、姫路周辺には、たくさんの歴史的事象。事実が残されている。そして、子ども達が学びやすいよう、郷土史「ひめじ」をはじめ、多くの文献や解説書もつくられている。われわれは、さらにこうしたものを学習の中で生かせるような、教材づくりをすすめなければならないと思った。

今回、「百姓一揆と打ちこわし」の姫路版として、「兵庫の歴史ものがたり」をV.T.R.で映像化して、学習に使ってみることにした。そして、夢前川上流の前之庄（塩田温泉の近く）の百姓、滑原甚兵衛や塩田利兵衛らを中心に農民達の生きざまにふれるうちに、財政難に苦しむ幕藩体制や、さらにひっ迫した藩の状況が一層明確になりその中で生命をかけて悪政とたたかい仲間を守ろうとして立ちあがった勇姿に深い感動をおぼえるとともに、民衆の人間らしく生きる願いすらふみにじる行為に強い憤りを感じた。そして、こうした一揆や打ちこわし等から、幕藩体制が崩壊し、開国へと迫られていくようすを実感としてつかむことができた。

この「姫路藩の全藩一揆」は、地域に学び、より身近に歴史を生きたものとして捉えさせるには、またとない教材であると感じた。

(3) 展開について

身近なところでおこった一揆や打ちこわしを調べていくのに、文書資料（ひめじ。歴史ものがたり等）や統計資料だけでも学習していけるが、視聴覚資料V.T.R.「百姓一揆と甚兵衛」やスライド「甚兵衛。利兵衛の墓碑」等を使い、全員が喜んで深く追求していけるよう意欲づけたり、事実把握を確かなものにしたたりして いきたい。また、一揆の動きや拡がり等、年表や地図に書き込ませて認識を定着させたい。さらに、ノートのを考えを大切にさせその深まりがわかるように指導したい。

(二) 学習課程 第IV次 第2時

目標 身近におこった百姓一帯や打ちこわしの年代や風潮を調べながら、一帯に加わった村人や船期された人たちの願いをつかむ。

展開 第2時分

学習活動	指導上の留意点	備考
1. 百姓一帯や打ちこわしがおこったわけやその時の農民の願いをおもいかへる	・前時の学習をより返らせ、整理させる。	一斉
2. 資料をさがす	・身近な船路でおこった百姓一帯について調べよう。	〈課題〉
3. V.T.R. 「船路の全帯一帯」(百姓一帯と清原兵衛)を視聴し、調べる。	・郷土史「ひめじ」「兵庫の歴史」などの活用にあつかわせる	グループ
・一帯がおこる背景	・自作のV.T.R.をストリップやスローにして、補足説明したり	一斉
・一帯の動きや大きさ	・O.H.P.で拡大したりしながら視聴させる	V.T.R.
・村人たちの願い。	・一帯や打ちこわしの動きや大きさを明確にして視聴させる	O.H.P.
4. 資料(歴史ものがたり)をもとに、年代と動きを地図にかきこむ	・福島の定着化をはかるために船路におこった一帯の地図をみんなで作る。	〈課題〉
5. 一帯に加わった人たちのや、知用された人たちの願いをノートに書く	・次時への課題につなぐ	O.H.P. 一斉
6. 次の時間の問題をつける	一帯や打ちこわしの特色や風潮を考えよう。	個

(一) 学習課程 第IV次 第3時

目標 百姓一帯や打ちこわしの特色や風潮を調べながら、国内の政治が乱れ、幕藩体制がゆるいでいったことをとらえる。

展開 第3時分

学習活動	指導上の留意点	備考
1. スライド「真兵衛」「利兵衛」の絵をみて、船路でおこった一帯をおもいかへる	・前時に書いた感想を発表させ、一帯の大きさは農民たちの願いの大きさであることを伝ふさせる	スライド 一斉
2. 課題について、自分の考えをノートに書く(資料を補みなおす)	高兵衛や利兵衛の絵をつくらせ、高兵衛はなんだったのだろうか	〈課題〉
3. 課題について、自分の考えを出し合う	・当時は幕がつくられず、約50年後に村人たちが手をつくられたことを補足説明する	個
・正しい考えをいられたい	・村人たちは真兵衛の死をどうとらえているのか考えさせる	グループ
・きびしいきまり	・反響の考えを聞き合う中で、個々の考えを深めさせる	一斉
・身分明	一帯をおこした当時の世の中や農民たちの行動について意見を持たせる	一斉
はやく世の中が変わってほしい、武士の政治が辛くなってほしい	4. 話し合いで深まったことを、もう一度ノートに書き、幕府にとつて、一帯や打ちこわしはどんな意味があったのかをまとめよう	〈課題〉
5. 次の時間の課題をつかむ	このほかにもどんなことが武士の政治を替わらせていったのだろうか	黒板 不平等未詳

(5) 授業後の考察と今後の課題

ア. 学習課題の設定のむずかしさ

姫路藩の一揆について残されている事実の中で、最も目で確かめられ、具体的なものは、『甚兵衛・利兵衛の墓碑』である。そこで、この事実から、「この墓はいつ、だれが、どのようにしてつくったのだろう」という課題を設定して、農民達の願いをつかませていくことも一方法である。今回、単刀直入に「身近におこった一揆について調べよう」という課題で事実提示をした。ここで考えなければならない事は、子どもの実態に合い、思考の流れにそうものであるか、目標にせまるために適切かどうかということである。

イ. 身近な地域素材を生かすことの意義

子ども達のノートを見ると、ほとんどの子が、「こんなに大きな一揆が自分達の住む姫路に起こっていたことにおどろいた」という感想を持っている。この事から、地域素材を有効に組み込む事がいかに学習意欲を促すか、また事実認識や社会的意味把握を深めるか、がよくわかる。子ども達は教材と会話できるのである。

また、「実際に前之庄へ行って確かめたい」や「地域のおじいさん達に聞いたり、写真をとったりして報告したい」という意見もみられ、自主的に調査活動をすすめさせることも時間があれば考えていきたい。

ウ. 甚兵衛と一揆の映像化から、感じたこと

- ・子ども達の実態にあった内容か、常に考えて作成する
- ・授業の流れのどこでどのように使うのか（導入で、あるいは検証で。）
明確にして作成しないと、中途半端な教材になってしまう
- ・教師自身が、教材に興味を持ち、十分深く調べ、整理しておかなければ教材化できない。実際の授業までに練り上げる期間がかなりいるので、日常から資料収集や研究を心がけておくことが大切だ
- ・自分で創り出すまでの失敗や迷いなどの苦しさをのりこえ、喜びにしてい
く、つまり努力や工夫を惜しまないことが大切であり、子ども達は、そう
した教師の態度を見抜き、やる気を出し、追求する力や態度がそなわって
いくのだと思った。今後、郷土史「ひめじ」等の資料の活用とともに、で
きるだけ臨場感のあるスライドやV.T.R.をつくり、教材化していきたい。

《おわりに》子どもを知ることで、個性や能力に応じた教育が実現する。そして、地域素材を生かした授業を組織することで、自分達のふるさと姫路を愛する心が育つ。また社会認識が一層深まり、主体的に学ぶ力と態度が育成されていくといえる。

第2分科会 社会

研究主題 地域の社会科的環境の見直しと教材化

兵庫県姫路市立御国野小学校 山本省志郎

1. はじめに

本校区は、社会科学習を行う上で大変めぐまれた地域といえる。社会科学習で重視している観察・見学・調査等の活動の対象となるものが数多くある。しかし、これまでは進度を気にした教科書中心の学習であって、地域素材を十分に活用してこなかった。そのため、社会科はおもしろくないとか、教科書をよく読めばわかるんだというような子をつくってきた。これでは、社会科のおもしろさ、楽しさというものがわからない。そこで、もう一度よく地域を見つめなおし、地域素材を活用した社会科の学習を仕組むことによって意欲的に学習する御国野っ子を育てようという取り組みはじめた。

2. 地域素材活用の例

第2学年と第6学年の地域素材を活用している主な単元の例

(第2学年の例)

単元名	地域素材
みせではたらく 人びと	・御着駅前商店街 ・御着・深志野の魚屋
田やはたけでは たらく人びと	・深志野の水田 ・深志野のビニルハウスいちご

単元名	地域素材
こうばではたら く入びと	・ククポーレ
のりもののしご とをすする人びと	・禰姫バス ・御着駅
ゆうびんのしご とをすする人びと	・御着郵便局

※第2学年の学習は全て地域素材を教材化することによって、目標を達成することができる。

(第6学年の例)

大単元名	地域素材
むかしの日本	・壇場山古墳 ・山ノ越古墳 ・国分寺 ・御着城(御国野支所) ・黒田家廟所 ・(姫路城) ・天川橋 ・山陽道
わたしたちの 生活と政治	・天川改修工事 ・国道二号線

※6学年の学習では、地域素材を一小単元独立して教材化できないが、単元の中へ1～3時間分入れることができる。全体としては単元の導入として扱ったり、発展的なまとめに活用できる。

3. 深志野瓦の概略

- (1) 現在、深志野で瓦の生産をしている会社は6軒である。深志野瓦とは、深志野を中心に、同じ御国野町の国分寺、花田町、四郷町で作られる瓦を総称してそう呼ばれている。現在は淡路瓦におされて製瓦に従事する人も減ってきているが、大正15年に発行された「兵庫県瓦業者名簿」によると、深志野だけでも19の瓦業者があった。その歴史は詳しくはわからないが、お寺の解体、瓦のふきかえ等で古い瓦からその製瓦の年がわかる。今わかっている一番古いのは文政十亥六月吉辰(1827年)の深志野邑仲兵衛の名が記されており、「大庄屋日記」から推測すると200年ほど前から製瓦が行われていたことがわかる。深志野近辺で製瓦が発達したのは、付近に良質の土があり、気候的にはあたたかくて雨が少なく、燃料の薪が得やすかったからである。さらに交通が便利で各地への運搬が容易であったことも瓦作りが栄えた理由と考えられる。また、古くは播磨国分寺、国分尼寺、それよりずっと後には、御着城が近くにあることから、製瓦の遠因は古くから残されていたことも推察される。(播磨の瓦刻名史より)

(2) 深志野瓦の教材化

① 伝統的技術の継承

- ・生産技術(方法)の近代化を進める一方で、伝統的技術の良さをも生かしていること→先人の知恵、生きる努力への着目が可

② 現在的な価値

- ・高い技術を生かした製品→鑑賞用(=うるおいのある生活)
- ・日常生活に欠かせない瓦(=生活との結びつき)
- ・我が国古来の建築様式と瓦

③ 地域性

- ・瓦生産に必要な粘土が地域から産出していること
- ・瀬戸内式気候が瓦の自然乾燥を可能にしてきたこと
- ・瓦の販売先 —— 相生から加古川までの瀬戸内海側

→ 地域理解
↓
御国野の誇り

④ 児童の興味・関心 —— 学習意欲

- ・見学が可能 → 興味・関心を持たせ問題意識を高めやすい。
- ・子どもの興味や関心に訴え、ひとりひとりの子どもに学習意欲を持たせられる。
- ・子ども自身による資料の収集・作成ができる。
- ・児童の生活との結びつきという点では多少弱い。

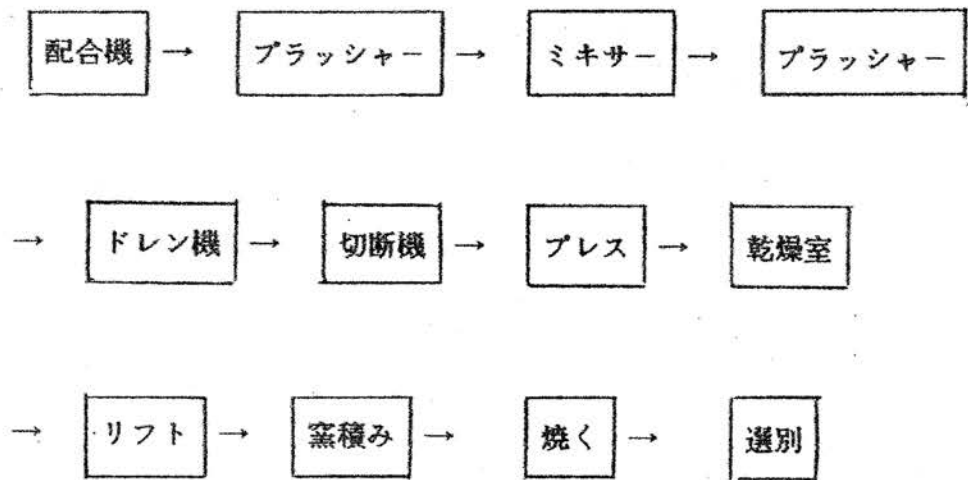
⑤ 工業生産の問題点を内包

- ・後継者不足が深刻な問題になっていくこと。
- ・生産方法の近代化の必要に迫られていること。
- ・資金不足（大手製瓦店におかれている）
- ・土の研究
→ 研究がまだ十分出来ていない。
- ・効率のよい乾燥

⑥ 地域に対する愛着

- ・地域に対する理解を深め、郷土に対する愛着心を増すという効果が期待出来る。

(3) 製瓦工程



(4) 瓦工場を見学して

行く途中、「瓦工場」ってどんな所で、どんなことをして作っているのだろう。と思いながらわくわくして行きました。初めにおじさんが、おっしゃったことは、深志野瓦は、もう200年になるということでした。わたしには200年なんて想像できません。それほど長い間、この深志野瓦は続いているのですね。次に土のある倉庫に行きました。土は「加納原田」というところから取ってくるそうです。そのとなりには、たくさんの機械がならんでいました。土をねる機械やそのねった土を運ぶコンベアー・瓦の形を整える機械がありました。形を整える機械の近くにおじさんがひとりいました。おじさんは、なれた手つきで切れた瓦をひょいととっておきました。最後におじいさんだ、「みがき」という仕事をしていました。へらやこてを使って、はみだした所をけずったりならしたりしていました。そして、たたきでポンポンとたたいていました。やはり手作業もあるのだな、と思いました。

— 中略 — 焼くかまも見せてくださいました。瓦は約2日で焼けるそうです。昔は、3日もかかったそうです。こうして見てくると、昔と今では大変

なちがいがあるのに気がつきます。こんなになった今でも心配はあるそうです。それは、かわらを屋根に上げると、変色してしまうことやこうたくの心配です。「瓦づくりって大変なことなんだなあ。」と思いながら出ました。今度は、手づくりで瓦を作っている家へ行きました。そこは、鬼瓦を作っていました。仕事場に一步入ると勇ましい「わし」がむかえに出ていました。色をぬれば、今にも飛び立ちそうです。「わし」もやはり手作りです。中は空っぽなんだそうです。作っているところに行くと、おじさんが魚の形のうるこの所に線のような物を入れていました。あと二人いましたが、その人たちも何かをいっしょうけんめい作っていました。その人たちを見ながら家を出ました。わたしは、近くに瓦を作っている所があるのは知っていたけれど、こんなに大変で苦勞して仕事をしているとはしりませんでした。(M・K子)

深志野の瓦作りは、今から約200年も前から続けていたそうです。

昔は、瓦を作っている家が15軒ほどあったのに、今では6軒しかない。それは、「若い人たちが、こんな仕事をいやがるので、今では、瓦を作る家が少なくなっている。」と教えていただきました。近ごろは、機械化が進んで、土がまからガスがまへ、手作りから機械化へと進歩しています。機械で瓦を作ると、やはり公害がおこるそうです。機械がしているのを見ると、角がきちんと出来ていなかったのので、後ですみずみをきちんとしていました。 — 後略 — (Y・T子)

※普通見学は一回きりだから、見学の視点は、はっきりさせておく必要がある。2～3回と、何回でも見学可能な所は、だんだん詳しく調べられるが、これとてやはり何を調べるのか目的をはっきりさせておく方がよい。ここでは、教科書の伝統産業の学習をしたあとで、地域の様子を調べたので、見学の視点は、言わなかった。

第3部会 体育

研究主題 固定施設の遊具器具を使って、自ら体力づくりを
どのようにすすめるか。

岐阜県土岐市立泉西小学校 三輪 敏成

1. 研究構想

学校教育目標

美しい心で、進んでよく学ぶ子・仲良く助け合う子・じょうぶでよく働く子

<p>(人間関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> 男子にはリーダー的な子どもはいないが、協力して解決しようとする意識は強い。 女子には、適切な思考・指示のできる子どもがおり、その子たちがクラスをまとめようとしている。しかし、時々中傷や妬みなどがあり、問題になることがある。 全体的には、認め合いや励まし合いは、できるが、教え合いがなかなかできない。 男子と女子の仲は良く、自然に交わることができる。一緒に行動する時は、女子がリードしている。 周辺的な子どもは数名いるが、孤立するような場面はなく、それぞれ参加もできるし、特定の友だちもいる。 人間関係における特別な問題児はいない。 	<p>認め合い 教え合い を通して主体的な体力づくりを</p>	<p>(運動諸能力関係)</p> <p>全国平均(S, 57)と比し、ほとんどのテストでおとっている。</p> <p>特に落ち込みが大きいのは、</p> <ul style="list-style-type: none"> ソフトボール投げ男子29m(34.3) 女子18m(20.2) 連続逆上がり 男子2.7回(4.6) 女子2.7回(4.5) 斜懸垂 男子25回(31.4) 女子15回(25.0) 背筋力 男子59kg(68.5) 上体そらし 男子39cm(47.1) 女子41cm(49.0) <p>などである。()は全国平均 わがクラスも、現代の子どもの運動能力の特徴をよく表わしている。</p>
--	---	--

<教科体育を通して>

- ・憧れにせまるための課題(特に技能)を持ち、練習によって一つ一つ解決していく。
- ・グループごとに課題追求を行い、その記録をとる。
- ・発表を通して成果及び問題点を明確にし、次への課題とする。
- ・グループは、課題や技能によってつくる。
- ・評価は、技能・態度・人間関係の面で行う。

<全校運動を通して>

- ・運動諸能力の伸長及び補強をめざす。
- ・願いによってグループづくりを行い、認めあい・教えあいをしながら体力づくりを行う。
- ・約二週間をめぐりに、新しいグループづくりを上記のように行う。
- ・評価は、体力・人間関係で行う。

2. 全校運動を通じた主体的な体力づくり

教科体育では、「憧れる姿の追求」を核にして授業を進め、「基礎技能習得と仲間づくり」を根底においている。しかし、左記の研究構想で記したような運動能力の劣っている部分を授業の中で補っていくには、どうしても時間が不足している。また、自他の優れている部分、劣っている部分を知り、互いに認め合い、教え合う中で、友達と一緒に進んで伸長・補強できるような場面が必要である。そう考え、体力づくりを全校運動の中に位置づける。

わが校には、固定施設の遊具器具が全部で26種類あり、それぞれに、どんな力がつく遊具なのか説明した板が建ててある。子どもたちは願いによって、それらの遊具の中から、適切と思われる遊具を選んだり組み合わせたりにして、進んで体力づくりが進められると考えた。

3. 実践内容

<意欲付け>

- ・スポーツテストの結果をもとに、自分の記録と全国平均値とを比較し、自分の優れている面、劣っている面を客観的につかませた。
- ・発表をもとに、学級全体の傾向をつかませるとともに、これから体力づくりに励もうとする意欲づけをさせた。

<クルーフアメリ>

- ・つけたい力によって、5~8名のクルーフアメリを行った。クルーフごとで、どの遊具を利用し、どのように測定するのか話し合わせた。

<清動>

- ・全校運動の時間帯(10:25~10:40)に体力づくりを行い、その記録もとらせていった。

<記録のとり方>

- ・記録のとり方を3つに分けた。1つは願いと確かめの方法、1つは測定の結果、もう1つは感想である。

体力づくりの内容と方法

NO	氏名	日	時	分	秒	日
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						

感想

…の力をつけたい、…の方法によって確かめる、などを明確にさせる。

測定の結果を記録していくことによって、自他の体力の向上を客観的にとらえさせ、喜びや成就感を味わわせる。

自分の体力がついていく喜びと自覚を、友達の成長に対する認めと喜びを、教えたり教えられたりすることの喜びを、大切にして話し合わせる。

4. 子どもの姿

(1) 子どもたちが願ったつけたい力と測定方法

<腕の力をつける>

- ・低鉄棒で斜めけんすいを行い、回数を記録する。
- ・低鉄棒で斜めけんすい、腕立て小せを行い回数を数える。
- ・うんていにぶらさがっていき、何秒で行けるか記録をとる。行けない人は、何本まで行けたか記録する。

<ジャンプ力をつける>

- ・ジャンプ板の何番までとびつけるか記録する。

<走る力をつける>

- ・50M走のタイムを測定する。

< 腹筋力をつける >

- ・二本橋を使って腹筋運動の回数を増やしていく。初めは30回から。

< 投げる力をつける >

- ・何m先から投げて投的板に当たるか記録をつける。
- ・バックネットに向かって何m先から投げられるか測定する。

(2) 誓われた感想 (抜粋)

ア. 自分の体力がついていくことに関して

- ・うんていが思つようにいなくなてくやしかった。
- ・うんていが思ったよりできなかった。
- ・斜めけんすいがら回しかできなかったのが残念だった。練習して力をつけていきたい。
- ・低いと思つていた4のジャンプ板にとどかなかった。
- ・もう少し高く投げるともっととぶと思つた。
- ・腹筋運動の30回はきつかった。 ・みんなに追いつきたい。

- ・手のまめがつぶれなくなった分、力もついた気がする。
- ・今日初めてうんていが全部いけて、うれしかった。あしたも頑張りたい。
- ・斜めけんすいが今日10回できた。今度は、15回ができるとうれしい。
- ・3のジャンプ板にまだとどかないのが残念。
- ・筋肉がいたくなくなってきた。
- ・今日35回できた。50回もできるような気がしてきた。

イ. 友だちの成長に関して

- ・Aさんはやり方は上手なのに、3回しかできない。もっと努力するといい。(斜めけんすい)
- ・初めてなのに全員30回できた。とんとん伸ばしたい。(腹筋運動)
- ・8人中3人の人しか全部行けなかった。(うんてい)

- ・女子は男子の半分くらいしか投げられなかった。(ソフトボール投げ)
- ・Bさん1人が20回こせた。(腕立てふせ)

- ・Cさんが37回できなかったのは残念だけど、あとの子はできて良かった。
- ・Aさんが5回に成功した。本当に良かった。
- ・朝、Dさんが練習していた。すごいと思った。
- ・Eさんの記録が少しずつだが増えてきている。このまま頑張ってもらいたい。
- ・みんなの距離が増えている。

ウ. 教え合うことに関して

- ・先生に教えていただいた正しい斜めけんすいのやり方を、みんなで確かめ合った。やり方のおかしい人がいたのだ。
- おなががへこんではいけないことを注意してもらえた。
- ・K君が、投げる時の脚の出し方を教えてくれたのでうれしかった。教えてもらったやり方でたくさん投げられるようになりたいです。
- ・ジャンプの位置がちがうとできる番号もちがうことを教えてもらったので、試してみたらそんな感じでした。
- ・走る時の腕の振り方を教えてもらった。(もっと曲げて速く振ること)

I. その他

- ・測定している時、励ましてくれるのでうれしし、やるぞという気持ちになった。
- ・放課後も練習してみた。やっている人がいたのだ。
- ・声をかけ合って腹筋運動をやると、よくできる。
- ・今日ほめてくれたのでうれしかった。
- ・調子によってやったらまぬがつぶれた。少しずつ増やしてい、た方が良かった。
- ・やるのが速くなってきた。
- ・頑張るぞ。 ・記録を伸ばしたい。

5. まとめ

- ・遊具器具を狭ったサーキットということで、子どもたちには馴染深く、進んで取り組めたようである。体力をつけていくことをねらいにしながらも、同じ目的で集ったグループで、話し合い、認め合い、教え合い、励まし合うことを通して、友だちづくりもできてきたように感じられる。体力づくりと仲間づくりが互いに作用し合って活動できたことは成果である。
- ・願いによってグループづくりをしたことにより、何をどのようによいのか明確になり、諸活動が活発になったと考えられる。しかし、仲良しグループになりがらであったことや友だちの新しい良さの発見が乏しいといった面では、課題が残った。
- ・グループ活動を見て回っていると、運動ということもあり、男子がリーダーシップをとったり、男子が女子に教えたりする場面が多くあった。他の場面でなかなか力が発揮できなかった男子にとって、活躍できる有効な機会であったと思える。また、男子と女子が自然な形で一緒に活動できたことも成果としてあげられる。
- ・記録カードの感想欄に書かれていることを適時発表し合い、学級全体の財産にしたり、次への意欲づけにしたりして活用すれば更に良かったかと思う。

第3分科会 体 育

研究主題 プールの施設・設備・器具を使って自ら体力づくりを
どのようにすすめるか。

兵庫県姫路市立安室東小学校 体育部

はじめに ひとりひとりを大切にし、その能力を伸ばすことは、教育実践
の大きな課題である。

本校が六年生と「2000mの遠泳」という目標と取り組み始
めて6年目になる。今年も六年生219人全員が挑戦して合格し
たが、2000mに挑戦しようという「やる気」がないと挑戦で
きないし、泳力がないことには合格しない。

子どもたちがどのように、自らの力を伸ばしてきたのか、テ
ーマにそって、報告する。

1. 指導時数の確保

プールに入れる時間を確保することが大切である。

1シーズン5週間として、正課体育は15時間。ゆとりの時間を1週に1
～2時間とると、1・2学年で20時間、3・4学年で24時間、5・6学
年で28時間程度は確保できる。

2. 指導方法の検討と協力教授組織の確立

本校は開校して8年目になるが、開校の年はプールの完成に手間どり、
ほとんど指導ができなかった。2年目に入って水泳指導を始めたが、終わ
ってみると、五年生の方が六年生よりよく伸びていることがわかり、どの
ような指導をしたのかが問題になった。学校として、子どもの伸長につな
がる指導法の研究と、協力教授組織の検討が急務となった。

3. 指導目標の検討

1・2学年	いろいろな器具や用具を準備して、水に慣れ親しませ、「浮けること」をねらって楽しく水遊びさせる。
3 学 年	徹底して浮けるようにし、「呼吸のしかた」を身につけさせる。
4 学 年	「ドル平泳法」の指導をし、手足の動きと呼吸の協応ができるようにする。
5・6学年	「楽に泳ぐ」「長く泳ぐ」「速く泳ぐ」ための各種泳法を工夫させ、しっかりと身につけさせる。 子どもに目標を立てさせ、長い距離を泳ぐことに挑戦させる。

4. 指導の実際

1) プールにおける約束ごとの徹底

- すばやい着換え
- プールサイドで
 - ・ しっかり先生や友達の話聞き。
 - ・ 順番を守る。
 - ・ パデイをくんだり、グループで行動するとき、安全に留意して、友達と協力してがんばる。
- 用具・器具は
 - ・ 正しく使用し、きちっと片づける。
- 教室との移動
 - ・ 整列し、けっして走らない。

2) 教師の指導姿勢 特に指導を必要とする子どもとゆったりと

- (1) 教師はプールの中に、すすんで入ろう。
- (2) 教師はプールの中を子どもといっしょに移動しよう。
- (3) 教師は子どもとの距離を大切に考えよう。
 - ・ 目を見合わせて、話しかけられる距離。
- (4) 教師は指導することばをたくさん用意しよう。
 - ・ なんて、しっかり、がんばれ だけでは子どもは泳げるようにならない。
 - ・ しかる、ほめる、励ます、技術的な指示や助言を用意し、子どもの行動に目標を与えよう。
- (5) 指導困難と感じた子どもには、多くの教師の援助を依頼しよう。
- (6) 教師は「ちがいのわかる」眼の養成に努力しよう。

3) 友だちとのかかわり合いを大切に

- 相談する場
- 見合う場
- 教え合う場
- 激励し合う場
- 示範を観る場

4) 目標を自分のものにして努力させる習慣を

- プールサイドでの話し合いは、姿勢を正して。
- プールに入ったら、つとめて目標からはずれないように。
- 少々つらくても、がんばる努力を。
- 小さな進歩、大きな進歩をみんなで見合わせる習慣を。

5) プールにおける指導と評価のしやすい「プール使用形態」について

- 一斉指導と個別指導 : 自分で目標を確認しながら練習を重ね、ひとりでがんばれない時は、マンツーマンの指導を受けさせる。

- 学級別、グループ別、各種技術検定 : 学級全体、あるいはグループの目標にそって練習を重ねたり、目標の到達の度合を検定して、新しい目標を立てさせる。

- 距離に挑戦する(個別に、グループで) : 個別に、あるいは、グループできめた目標距離に挑戦させる。グループの場合は、距離の点検、確認の係と激励の係をおいて、目標の達成に協力させる。

- うずまきを使って : 流水に身をゆだねて、その感触を楽しみながら、伏し浮き、背浮き、だるま浮き、いるかどび、水中宙がえり、もぐりっこなど、様々な目標に挑戦させる。

限られた夏の期間、しかもプールを使つての水泳指導は、時間的に、大きな制約を受ける。生命の危険もとなり合わせにある。

他の固定施設や遊具のように、常時利用できるものところが、プールの使用形態の工夫は、特に大切であると思ふ。

6) 器具・用具を使った目標の設定の工夫



○ 竹のパー

- ・ 友達のひっばってくれる竹につかまってひっばってもらおう。脱力して浮き身。
- ・ 竹の下をくぐる。(脚さをかえて)



○ ゴルフボール

- ・ もぐってとる。
- ・ 目をあけて、指定された色のボールをとる。



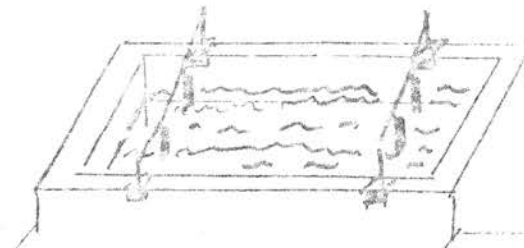
○ リング

- ・ もぐった状態で、てきるかぎり多くとる。
- ・ もぐってくぐる。
- ・ 遠くのリングをくぐる。
- ・ 遊木のリングをくぐる。



○ ホース

- ・ 照から水をかけて、水になれさせる。
- ・ 顔にかけて、呼吸の練習をする。



○ 標柱

- ・ パイプを4か所たらしそのまわりを周回する。

2千メートルの遠泳をめざすとき、本校は25 m プールのため、40回の往復が必要である。この標柱を使用すると、ターンをしないで、2千 m の遠泳が可能になる。

5. 泳力実態 親むけの学校ニュースから

(全校で11人)

結果は (健康上の理由等で学校水泳に不参加の児童は統計から省く。)

1学年：全員浮けるようになりました。十分水慣れしていない児童も数人いますが、来年は個別指導に努力します。楽しみにして下さい。

2学年：昨年浮けなかった7人が全員浮くようになりました。水の恐怖を克服して明るい学校生活をおくれるようになったTさんたちに拍手を送ります。25m泳げる子が男子55%、女子40%。すばらしい。

3学年：呼吸のし方を覚えて、浮いて泳げるようになりました。50m合格者が88%、100m合格者が75%。子供達のがんばりにびっくりです。来年はもちろん、合格しなかった子の個別指導に努力します。昨年50m泳げたのは11%です(2年生の時)から、長足の進歩です。

4学年：176人中175人が500m校定に合格しました。3年生の時は、50mの合格率が64%でしたから、見事ながんばりようです。本人もご両親も、友達も、私達教師も、一時は「今年は無難か？」とちかちかめかけた事情がいくつもありませんでしたが、最後は本人の努力で、大きな感動を味わうことができました。授業に参加することが一番。

5学年：198人中197人はクロールで500m、平泳ぎで1000mが校定に合格しました。あと一人は2学期からの転入生で、しかもプールしか泳げなかったため、かなりのプレッシャーだったと思いますが、ドル平泳法をマスターして、ドル平で1000mに合格しました。

6学年：2学期からの転入生も含めて219人全員が平泳ぎで2000mが校定合格を望みました。伝統をさらに前進させる余裕のある泳ぎをぶりでした。自らの努力によって、大きな「力」をつけたことで自信を持って、さらに伸びてほしいと願います。

6. おわりに 泳げるという自信や見通しのもてた子どものその後の成長はすばらしい。そこまでの援助と、その後の子ども同士の伸ばし合いの環境づくりが、「やる気」をひきだし、自ら(おのずから)体力づくりにも結びつく。

動くことの好きな 体カづくりを 自らや、ていける子の育成

— 業間を有効に使、て —

姫路市立御園野小学校

高田 淑江

1. 研究の基本的方向と取り組みの姿勢

「継続は力なり」を合言葉に、生涯体育を見とおした本校の体カづくりの取り組みも今年で10年を迎える。本校の体カづくりは、「元来遊び好きの子どもたちが、い、たん4階建の校舎に入、てしまうと、休み時間にな、ても外に出てこず、広い運動場が閑散としている。子どもたちが運動をして汗を流す楽しさを知らず、自ら運動不足にな、ている実態から、まず子どもたちを外へ出し、太陽にあてよう。」ということからスタートした。つまり、動くことが好きになり、好きだからこそ続け、続けることが楽しい体カづくりをめざしたのである。

自分から進んで体カづくりに取り組み、心身ともにたくましい気力ある子どもに育てたいと願い「動くことの好きな体カづくりを自らや、ていける子の育成」をテーマに、学校教育活動全体を通して体カづくりを推進している。更に、学校内の体カづくりにとどまらず、家庭の協力を得て、校区・地域ぐるみの体カづくりへ……。そして10年後、20年後の生涯体育へ。いわゆる体カづくりの生活化をねら、たものである。いうまでもなく、正課体育の授業は大事であり基本にすえなければならぬが、週3時間の体育学習だけでは十分な体カづくりは期待しにくい。ここに、ゆとりの時間を設定し、朝のあそび、業間体育、を存分に楽しませ、喜んで自主的に体カづくりを継続していく子どもの育成を図るよう努めてきた。なかでも業間体育では、男女や学年の別なく(いっでも、だれとでも)仲間づくりをめざしてきた。

2. 取り組みの経過

昨年度から 各教科の授業時間を確保するねらいから、それまでの午前中3時間(業間体育を含まず)の時程から、新しく午前4時間(業間体育を含ま

まず)となつた。そのため、業間体育の前後の休憩がそれまでの10分から5分となり、運動内容の精選とスムーズな進行による効率的な業間体育が命題として与えられた。

これまで、体育カード類・健康手帳など種々に分かれていて使いにくかったため昨年「チャレンジノート」として1冊にまとめて全児童に持たせている。

3. 実践の概要

業間体育

教師の指導性を発揮する時間ととらえ、教師は子どもとともにあつて運動のしかた、あそびを知らせていく。

(1)ねらい

ア. 体力づくりの生活化を図る イ. 全体の一員として動き規律を学ぶ
ウ. 施設・用具を上手に使い楽しく遊ぶ エ. 仲間づくりの場とする

(2)方針

全校生が/日光のもと/戸外で/計画性のある運動を/興味を持って/
継続的に行う。

(3)指導者の構え

ア. 子どもと共に動く イ. 平凡なことでも途切れず継続する
ウ. めあてや課題を持って出る エ. 子どもたちに遅れまいとして出る

(4)徹底すべき事項

ア. <動と静のけじめ> 合図、号令、指示をだま、よく聞き素早く動く
イ. <いつでも、どこでも、だれとでも> ○人組で遊べる

(5)部会組織と話し合い

各学年1名の指導者で計7名が月初め第1週の月曜日に部会を持ち詢合。指揮は部員の輪番制とし、次の当番の者は必ず業間体育実施記録を記し前の

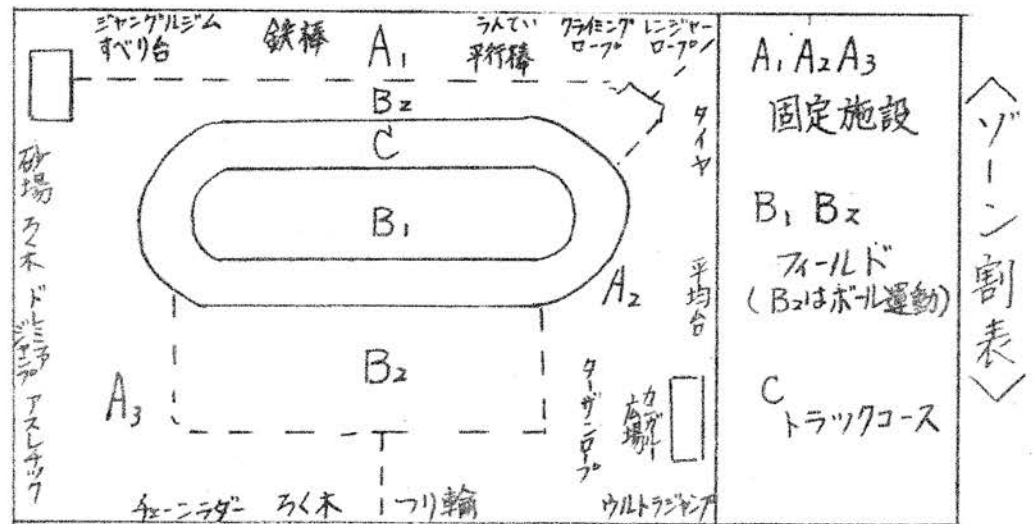
当番の者は、見学者の処置に回る。

(6)年間計画

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	時刻例
内容	ルールを知る	ゾーン型			運動会練習	ボール運動	なわとび運動	なわとび		なわとび		10:25
		体操・ブリッジ・足上げ						ブリッジ・足上げ		ブリッジ・足上げ		10:40
	鬼あそび・伝あそびなど			ブリッジ・足上げ・倒立		倒立		10:45				
	行進			行進		行進		10:50				

ア. ゾーン型について

固定施設やフィールド・トラックを6つのゾーンに分け、それぞれの特性を生かして運動をする。



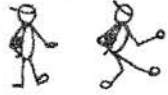
月日	ゾーン	A ₁	A ₂	A ₃	B ₁	B ₂	C	学年ローテーション表
5/4 ~		1年	2年	3年	4年	5年	6年	
5/14 ~		6	1	2	3	4	5	

イ. ボール運動について

ボールの特性(はずむ・ころがる等)をいかした動きを紹介していくこと
 により、子ども達にボールを使った運動に興味をもたせる。

◦ボールを使った楽しい遊び方を紹介する。〈例〉

▶ボール鬼ごっこ

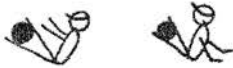


わきにはさんだボールをたいて
 落とし合う落されたら赤帽になる。

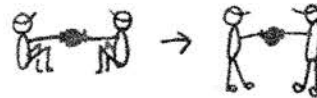
▶おんぶとび



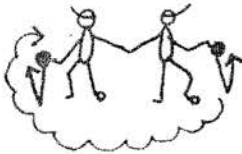
▶ボールV字バランス



▶くっつきボール上げ



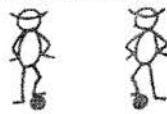
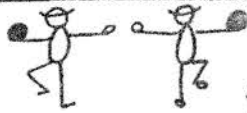
▶手つなぎスキップドリブル(高)


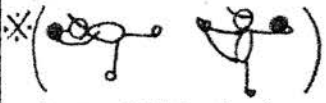
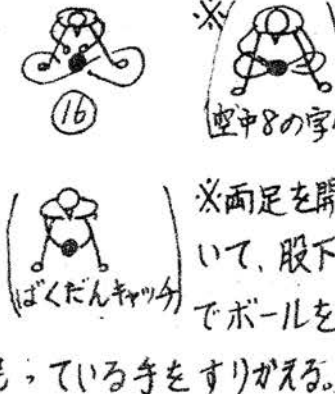
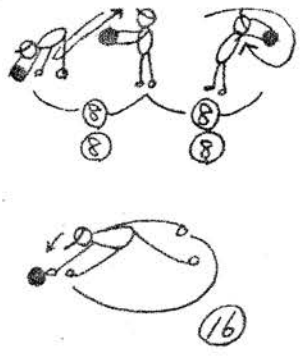


▶ラッコのボール運び



◦ボールセット運動～楽しい曲に合わせて 分間～

	パターン名	図○の数字は拍数	動きの説明
(1)	ボールタッチ 伴奏曲 (とんぼの めがね)	 前⑧+⑫	<ul style="list-style-type: none"> ・前奏の間にボールを地面において準備する。 ・リズムカルに足のうらでボールにタッチする。 ・タッチする回数やリズムを工夫するとよい。
(2)	バランス (かたつむり)	 前⑬	<ul style="list-style-type: none"> ・前奏の間に片足バランスをする。

	パターン名	図 ○の数字は拍数	動きの説明
(2)	ボールつき (かたつむり)		<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなバランスを工夫してみる。 ※ ・右で2回(トントン)ついてもつ、左で2回(トントン)ついてもつ ボールをつきながら、右回り、左回りをする
(3)	8の字まわし (ぶんぶんぶん)		<ul style="list-style-type: none"> ・両足をひらき、ボールを8の字にころがす。 ※慣れてきたら、後半の8呼間に「空中8の字」や「ばくだんキャッチ」を入れる。
(4)	前屈・後屈 (くつみがこう) ⑩ (間奏) ⑧ すわって前屈 ⑩		<ul style="list-style-type: none"> ・(F)前(F)前と2回前屈そのあと体を十分後ろにそらす以上を2回繰り返す。 ・間奏の間に足を開いてすわる。 ・(右)左(右)左と前屈のあと体のまわりでボールをころがす

。やくそくごと



[気をつけ]



[腰をおろして休め]

2. 運動場へ出るまではボールを
つかない。

ウ. 冬季の業間体育

寒さで動きが制約され、固定施設も使いにくいので、暖をとったり、抵抗力をつける意味においてなわとび、耐寒かけ足を中心にした業間体育を行っている。皮膚を鍛えるため、ほとんどの子どもが半そで半ズボンで頑張っている。

エ. 雨天の業間体育

放送により、全校一斉に静的な運動を行うことにより、心身の緊張をほぐし気分転換を図るとともに、体カつくりの生活化が途切れないようにしている。

3. 問題点と今後の課題

昨年度から本年度にかけての一年間をふりかえってみて、正課体育としては本校の泳力実態とその運動特性の良さから皆泳をめざして水泳指導に力を入れてきた。そのため一応の成果は上がったと思う。しかし、他の運動についての取り組み研究は心もとなかった。業間体育では、昨年セット運動として組んだボール運動やなわとび運動は、曲に合わせてリズムカルにできるので子ども達は楽しくできたようだ。それは他の休み時間にボールを使って遊ぶ子どもの姿が、ずい分目につくようになったことからいえる。今年4月に全学級に長なわを2本ずつ配り、業間体育でも予定を変更して1ヵ月程学級集団つくりと体カつくりの一石二鳥をねらって長なわ運動を実施した。これも子どもたちは喜んでやっていた。

継続してきた体カつくりから、子ども達が興味を持ち、挑戦しつづける運動やあそびを工夫することの大切さいいかえるなら、「やらされる」から「やってみたい」に近づける手だての大切さが今さらのように考えさせられる。

第4分科会 国語

研究主題

確かで豊かな表現力・読み取りの力をつける指導をどのようにするか
—— 朗読指導を通して ——

兵庫県 姫路市立白鳥小学校 珂尾 邦子

要旨

“一人ひとりが生き生きと学び、豊かで確かな学力をつけることを目指して、”という研究課題のもとに、私たち教師集団が、懸命に取り組もうとスタートした本年度。そのためには、支え合う中で、自らの思いや考えをのびのびと表現できる子を育てなければならない。それにはまず、朗読によって読解力をつけることが大切と、朗読指導に取り組んでいる。

本校の取り組み

(1) 研究内容

—— 白鳥の子供の持つ地域性をみつめながら ——

- ・ 学習の仕方を身につけ、基礎基本の学力を求めて、意欲的に取り組む子供づくりを進める。
- ・ 自らの思いや考えを発想豊かにのびのびと表現できる子供づくりを進める。
- ・ 支持的風土に満ちた学級づくりを通して、温い人間性にあふれる子供づくりを進める。

(2) 方法

- ・ 大切な語句や文にかかわって、内容を確かに豊かに読み取る力を養う国語科の学習指導法を研究する。
- ・ 子供の発達段階に即した、共同思考や発表の系統的訓練法を研究する。
- ・ 本読みや意見発表会等、発表力 表現力を高めるための日常継続活

物の活発化をはかる。

- 人権認識を中心に据えた学級づくりの実践をする。

上記のような取り組みの中で、何より大切なことは、上手な朗読ができるということである。

登場人物になりきって読むためには、くり返し内容が把握できるまで読みこなし必要がある。また、上手な朗読ができないと、話の筋がつかめないという基礎的な観点から、日常の継続活動として朗読に全校で取り組んできて2年目になる。

朝の10分を『白鳥タイム』と名づけ、全校級で朗読に力を入れている。その取り組み方は学級によって、自由であり、工夫がこらされたものである。

まだ、始めて日も浅いが、子供達の朗読は日増しに上達し、次のような、良い面も見られるようになった。

- どの子も、以前にくらべて、大きな声で堂々と読めるようになった。
- 消極的な子も、音読ならばずかしがらずできるという自信がついた。
- 音読みから、感情を含めて読む読み方に変わり、登場人物の気持ちがよくつかめるようになった。
- 課題として、家庭での朗読練習もしているので、読む回数が増え、書けなくても、読めない漢字はないといえる児童が増えた。
- 家庭内音読を通して、親子のふれ合いの場ができた。

この他、週1回の朝会の時、エクラスずつ朝礼台に上がり朗読したり、給食時間にビデオ放送で朗読を流したり、隣接学年による朗読集会を行ったり、マンネリ化しないよう、また興味をもって朗読に取り組めるよう種々工夫をこらしている。

そこで、低学年(1年生)と高学年(5年)の実践例を述べながら、私の朗読指導の一端を発表したい。

低学年(1年生)の本読み指導

教科書に文字がでてくるのは、入学後、1ヶ月近くもたつてのころであるが、2~3名を除いて、ほとんどの児童は、ひらがなの読み書きできる状態である。

— 1学期 —

入学当初の児童には、文字の理解度に個人差があり、一斉に、同じレベルで本読み指導は困難である。

そこで、『は』 『し』 『れ』 と、1字1字指でおさえながら、言葉というより、文字を読む練習を大きな声ではっきりさせた。このようにして、文字指導をした後で、はさみ読みで音読させた。

はさみ読みとは、親指とひとさし指で1語をはさみ、文字の1字1字でなく言葉として読む方法である。

はさみ読みを取り入れているので、指名して読ませる時もすわったまま、はさみながら言葉としてひとまとまりで読む方法を徹底して指導した。一方、聞く時も同じく、はさみながら聞くのである。

すらすら読める児童も何人がある中で、しつこくはさみ読みをさせた。それがしかりできないと、全く、本も見ないで丸暗記してしまっていて読んでいるということにもなりかねない。事実、簡単な文なので、そんな児童もかなりあった。

本読みとは……どうしなければならぬかということが、まだ、はっきりつかめていなかった。横を向いていても、本を開けていなくてもすらすら読んでいるのであった。

そこで、より徹底をはかるため、学級通信を通して、はさみ読みを家庭でもさせてもらうよう協力を呼びかけた。

- その他、
- ① 一斉読みに重点を置く
 - ② 毎日、本読みの宿題
 - ③ 句読点に注意して読む
- 以上に留意して取り組んだ。

— 2学期 —

2学期は、次のような2つの目標を決めた。

- | |
|-------------------------------------|
| ア) 朝の本読みゲームを続けよう
イ) 大きな声でなりきって読む |
|-------------------------------------|

はさみ読みは、1学期で終えた。読む時は、立って読み、聞くのも、本を立てて持ち、目で追いながら聞くという形に変えた。

ア) 本読みゲーム

毎朝、朝の会のあと、日審が司会役をつとめ、ゲームをすすめていく。曜日によって、読み始める列を決めておき、前から順にひとりずつ音読していくのである。つまり、まちがえて読んだら次の読み手と交代する。まちがえず、長く読むのを競い合うゲームである。つまったところで交代するので、聞き手もうっかり聞いていたのでは、自分の番になっても、どこから読んでいいのかわからない。そうすると、せっかく読む番が回ってきても、読めないというルールになっていた。聞き手も真剣になれた。

ある程度、興味づけはできたが、毎日、続けることになるとマンネリ化してしまい、今一歩の工夫が足りなかったことを反省している。

イ) 大きな声でなりきって読む

この目標は、大変個人差があり、上手に会話文の読める子、感情をこめ、抑揚をつけて読める子もいれば、相変わらず、小さい声で、つまりながら読む子もいた。この指導として、朗読テープを聞かせたり、教師の範読、一斉読みで朗読を模倣させることを行った。

低学年は、案外、すなおに、まねられるので、なりきって読むことができた。

— 3学期 —

例) 本読みカード

- 本読みカード
- 本読みシール
- エンバス

} の3つを実践

日	よんだところ	おうちの人から	先生の

・ 本読みカードは、家庭で聞いてもらって感想をひとこと書いてもらうのである。毎朝、カードを提出させ、ひとりひとりみんなの前で読みあげ、児童の励ましの場にした。また、時には、2人バスでひとこと感想も書き合った。

・ 本読みシールは全校で一斉に取り組んだ。5日読めば、シール1個はり、回数を競い合った。

・ 2人バスを取り入れ、席の隣り合った2人で、1文ずつ読み合い、上手だったところ、気をつけたら、もっとよくなると思われるところを見つけて話し合う。昨日とちがったいいところを見つける工夫も大切にした。

高学年（5年生）の朗読指導

低学年とは違って、本読みと言わず、あえて、朗読という言葉を使って、高学年になった自覚を持たせ、朗読にやる気を起こさせる1つの手段とした。

朗読とは、『声高らかに本を読みあげること』と辞書に書かれている。しかし、5年生ぐらいになると、大きな声を出すことに抵抗を感じる児童も少なくないので、大きな声で読むことも大切に指導した。

1) 大きな声で読む

2) 他人に聞かせる読み方をする

またまだ、気をつけるべき点はいくつかあるが、この2点を十分徹底して読ませた。そのための方法として、――

- ◎ 早口になりすぎたり、つまって読むとか意味がとりにくくてはいけないので、これぐらいの時間で読めればよいという一定の時間を決めておく。早すぎないよう、遅すぎないよう気をつけて読む
- ◎ 全文暗誦。それほど、何回もくり返して読む
- ◎ 一文読み。文が短いので、神経を集中して大きな声で読める
- ◎ グループで読み合い、目標に到達できたかどうか、話し合う。
(バス)

その他、シールをはった表、ビデオ放送、朗読会などは、全般的に、続けて励ましにしている。そして、教科書だけにこだわらず、時には読書指導とも合わせて、好きな本をみんなの前で読むことも試みている。1週間に1冊は読むという目標も決め、読書の楽しさを求めている。

毎朝、グループで読み合い、友達の上手な読み方を見つけ合う。グループ全員が上手だと認めた場合、赤シールを与える。また、練習の前に、各グループでどんなふうに読むか目標を話し合っで決め、お互いに、それが到達できるよう朗読を工夫している。

また、月に1回、グループの中から代表を出し、学級朗読会も行っている。

シールの数がどの子も増えるよう、グループ内での励ましを大切にしている。

＝ 朗読の練習をして ＝

*わたしは本読みがへただけど、うまい子のまねをして読みました。1学期の間に赤シールをもらいたいなと思ったけど少し声が小さくてだめだったから2学期、赤シールをもらえるように頑張ります。

*ぼくは、朗読がへたくそでした。みんなのを聞いてみると、ぼくも読みたいうまくなりたいと思い、毎日、朗読の練習をしたけど、なかなかうまくならないのでやめてしまいました。でも、自分から見ると、すこしうまくなったと思います。

*はじめのころより、たいかん上手になりました。私は国語係で朗読をみんなにさせているけど、へたな子でも毎日、練習すると上手になれると思います。

私は練習していると朗読がすきになりました。これからし、もっと練習して朗読会にも出れるようになりたいです。

*ぼくは、グループのみんなで本読みをするのが楽しいです。上手に読めると赤シールと高めてくれるので、うれしいです。悪いところも、みんなが注意しあうのでよくわかります。朗読会でクラス中が、上手になるといいなと思います。

第4分科会 国語

研究主題 確かで豊かな表現力、読みとりの力をつける指導を
どのようにするか。

兵庫県姫路市立網干小学校 小林ひとみ

○はじめに

授業中、出された1人の発言を受けて周囲の者が賛成したり、反論したりする。その話し合いの中で、今まで気づかなかったことに気づき、質の高い読みが生まれていく。こんな授業を目指したいものである。そうすることは、確かで豊かな表現力や読みとりの力をつけることに他ならないのである。

表現力の中では、話す力、聞く力(話す力と表裏一体をなすもの)について、読みとりの力の中では、書きこみの指導について実践の一端を述べてみたい。

○研究内容

1. 学習(学級)集団作り

支え合い励まし合うことの出来る学級。話したがり屋、聞きたがり屋でいっぱい。学級。男女の仲が良く、開放された学級。そんな学級が、学習や生活すべての基礎になる。

学級編成されたばかりの頃、教師の問いかけに対して応答するのは、一部の活発な者だけだった。他の者はじっと、そのやりとりを聞いているだけである。「先生は、何でも言える楽しいクラスにしていきたい。でも、友達の間を傷つけたりするときびしく叱るよ。」と宣言した。しかし、友達が間違っていると「そんなんも、わからへんのん。」との声が聞こえたり、バカにした笑いが起こったりした。そんな時、すぐに「間違うから学校で勉強するんだ。学級は間違いをみんなが考えていく所。」今の笑いは、人をバカにした笑いだ。せ、かく発表しても笑われるとこれから言えなくなる。

そんな笑いは許さない、ときびしく指摘したのである。まず、学級で何でも言えるという雰囲気作りから出発していた。

児童は教師の言動をよく見ている。だからこそ、教師がどんなつまらない発言でも大事にし、価値を認めていくことが肝要になってくる。学級内の弱い立場の者ほど大事にし、その子の良い面やちょっとした変化でも、それを取り上げてほめていった。教師の態度は、恐ろしいほど、子供達に影響を与えるものである。

2. 話す力を育てるために

心理的に解放されたからといって、すぐ話せるようになる訳ではない。並行して話す力をつけるための手立てを講じていった。

(ア) 声のものさし

聞きとれない様な声で話す者に、もっと大きな声で呼びかけると一時的には大きくはなっても、すぐ元に戻ってしまう。どうして小さな声なのかと考えると、まず思いつくのは、心理的な不安である。これは根気強く取り除いて行かねばならない。それと、児童は自分の声の大きさについての意識がないのではないかと考え、声のものさし(5, 4, 3, 2, 1, 0)を作った。小さな声の子には、「今のは、2の声だったね。4の声で言ってごらん。」と声の大きさを具体的に示していった。又、「この問題を4の声で読んでごらん。今度は2の声で読んでごらん。」というような意識づけもしていった。

(イ) 文意識をつけるために

児童の発言を聞いていると「海へ行って、お父さんと泳いで、大きな波に、おぼれそうになって、水をたくさん飲んで、苦しかって、それから、ボートに乗りました。」とダラダラ終わりまで句点のない語が続くことが多い。それをダラダラ文と名付け、なくそうと呼びかけた。

- 二人バス ← 一分間、時間を与え、隣同士で昨日あったことの話させ
る。白点があると聞いている者に指を折らせ、その数を教えさせた。
短く文に切った方が数が多くなるわけで、その数を多くしようと
していくうちに短い文で話せるようになっていった。(録音テープ)
- お話マラソン ← 6人ほどのグループで1人が1文を話し、それに続く
ように文を次々と話していくのである。これは、文意識だけでなく、
一まとまりの話をする力をつけるのにも役立った。また、聞いている
者は、どんな話になって行くかと熱心に耳を傾けた。(録音テープ)

(ウ) 飛言の方法

話す力が徐々につき、自分の考えを長く言おうとする者が出はじめた。それをより高めるために、飛言の指導を「こうすれば、もっとわかり易く話せるようになるよ。」と入れていった。

- 飛言信号 ← 友達同士で意見を出し合い、考えを深めていく。そんな話
し合いを促すために、挙手の際、「A君につけ加えて」、「ちがって、
「くわしく」、「他に」などの言葉を言わせるのである。今から自分
はこんなことを飛言したいと言うことを挙手と同時に出させる。こ
れは、話し合いを進める時の焦点化にもなる。
- 前置き言葉 ← 「〇〇について言います。」「A君とはちがいます。」「
わけを言います。」「Bさんと同じです。」など 飛言する時 最初に
前置きを言わせる。聞いている者も内容を聞きとりやすいし、話す
者も初めに言うことを限定している為、まとめ易い。
- ゆうれい退治 ← 飛言の語尾が小さくなり何を言っているかわらなくな
ることがよくある。最後まで、はっきり言いなさいと言って鬼
童の心にはひびかないらしく、良くならない。そこで、そのような
飛言を「ゆうれい飛言」と名付けゆうれい退治をしようと意識化し

たのである。

- ・結論を先に←前置き言葉とも関係するが「賛成です。わけは……」
「反対です。わけは……」と言いたい結論を先に言わせる。

(エ) 読書カード

本好きは、国語好きだし、語いも豊かで読みとる力も優れていると言
えるのではないだろうか。一冊読むと一枚のカードに記入するのである。
1000ページ突破を目標に取りくませ、一学期に平均2000ページ、最高
の者は8000ページ読んだ。

3. 聞く力を育てるために

人の話などそ、ちのけで自分の意見ばかり言いたがる子がいる。そんな
子は、話す力があるとは言えない。話をよく聞きとった上で、自分の意見
が言える子こそ育てなければならぬものである。

(ア) 教師の喋り方

なるべく文を短くすること、一度きりで繰り返さないこと、指示は一
つずつすることを心掛けている。

(イ) 聞かざるをえなくなる様に

全員、立たせて発言すれば座らせる。友達や教師の話をもう一度、言
わせたりする。聞かなければならないことを意識させるためである。

(ウ) 連絡をメモで

宿題や準備物などを連絡する時、口頭で行うのである。それを聞いて、
大事なことだけ、短くメモをとらせる。続けていくと、聞きながら要点
をまとめる力がついてくる。

(エ) ショート話の再現

短い話を読み聞かせ、その後、あらすじを書かせる。

(オ) 読み聞かせ

4. 読みとりの力をつけるために

共同の教材研究で深い教材解釈をし疑問を精選して授業にのそんでも、児童がついてこないことがある。いろいろ原因は考えられるだろうが、その一つに児童が自ら学ぼうという主体的な姿勢に欠けていることがあげられると思う。それゆえ、独力で文章を読みとらせる手だてとして書きこみをやらせたのである。

「とびこめ」(4年 光村出版)における書きこみについて述べる。

- (ア) 学習の手びき ← 言葉のイメージを浮かべたり、登場人物の心の中を想像する書きこみを行わせるため、「とびこめの一人勉強をしよう」という手引きを作った。それには、書きこむことを8項目に分けて、挙げた。…こみ内容を分類させるのが目的でなく、多様な書きこみをねらった訳である。(別紙)
- (イ) 全体に説明 ← 一時間目は、一文について「『その船』というところから、どんな事が頭の中のテレビに映るか」とみんなイメージを出し合い、書きこませていった。
- (ウ) 個別指導 ← 要領がつかめたところで、個人の書きこみに入った。その時、一人一人机間巡視し、良く書きこめている所に赤ペンで丸をつけて励ました。特に、○うかんた情景のイメージ ○登場人物の心の中を思いうかべたこと ○読んで自分が思ったこと の書きこみが出来ている箇所には、五重丸をつけた。これが大変、児童の励みになった様である。書きこめないでいる者には、具体的に「おだやかな天気」という所で、どんな空を思いうかべる? と導いていった。
- (エ) OHPで拡大提示 ← 良い書きこみを全員に広げるため、TPシートに複写してOHPで投影した。見ている者は、まず書きこみの量に

圧倒され、くい入るように音読し、「心の中や思ったことって、あんなふうには書くんやなあ」と、理解していった。(OHP)

(オ). 書きこみ例 ← 船長が息子に鉄砲を向けた場面の書きこみでM児(読みの力が弱い児童)が「㊦ 一かしか、むすこをたすけるんだ。㊧ もう手がすくんでいる。」と書きこむようになった。S児(読みの力が優れている児童)は、「㊦ 船長は助かる方法はこれしかないと思って、このこと(一)にかけた。生か死かのどちらかにかけた。少年を助けたいと強く思ってる。」と書きこんでいる。

(カ). 成果 ← 複写したN児は、大変読みとりの能力が高く、よい感性を持っているにもかかわらず、決して自分から挙手しようとはしなかった。今まで何度も励ましもし、呼びかけもしたが、殻に閉じこもったままだった。それが、この一件以来、積極的に挙手し、はっきりした声で自分の意見を堂々と言い出したのである。

読みながらイメージをうかべたり、登場人物の心の中を想像したりする読みの力は、伸びたと言える。そして、一斉授業においては、各自の読みとりが出来ているため、意見を言いたいとの意欲が強く、活発に発言した。また、自分とちがう読みとりをしている友達の見解も真剣に聞き、意見をたたかわせもした。(録音テープ)

○おわりに

児童が初めて文章に接した時、主体的に読もうとする態度は育ってきた。この事は、新しい教材に入るとすぐ「質問」と挙手をする児童が出てきていることにも表われている。話し合いも活発になった。しかし、主題とは関係ないようなささいなことが児童間の争点となり、肝心の主題追求がうすれてしまう傾向がある。質の高い読みとりには至らないのである。特に、私の教材解釈が弱い時に顕著であるように思う。反省するところである。今後、主題に接近していく読みの力をつけていくよう努力を続けたい。

第5分科会 理科

研究主題 「課題意識を持たせ、自ら探究する意欲を高める指導をどのようにすすめるか。」

長崎県平戸市立堤小学校 道原秀徳

本校は主題を「楽しい理科学習を求めて」、副主題を「自然に親しみ自ら学ぶ力を育てる。」として、今年度から研究指定校となり、研究に取り組んでいる。研究の目標としては、「学習指導の各過程で精選された発問、助言をすることによって、児童に多様な思考活動を促し、一人ひとりの児童が楽しい中に、自ら学ぶ力を身につけ、進んで学習する指導方法を追求する。」を掲げて、特に、授業の導入時に重点を置いて研究している。授業の最初の段階において、児童が興味を示す資料等を提示することにより、児童の活動意欲も高まり、自ら探究していく姿勢が生まれてくると思う。そこで、本校では、導入時の資料、発問、発言の条件として、次の3つを考えている。

1. 先行経験、生活経験との間に差異が生じるもの。
2. 身近に感じ、活動の多様化がはかれるもの。
3. ねらいが明確であるもの。

以上のことを踏まえて、実践例を述べてみたいと思う。

5年「酸素と二酸化炭素」の「二酸化炭素は空気より重いことを理解させる。」

過程	学習活動	予想される児童の反応	指導上の留意点と評価
課題把握	・学習課題をとらえる。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 二酸化炭素は一体、空気より、重いのだろうか、軽いのだろうか。 </div>	・物には、重さがありある物を基準として「重い」「軽い」とを表現していることを理解させ、二酸化炭素は空気より重いか軽いか考えさせる。
予想	・実験の方法を考える。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> どちらが重いか調べる方法を考えてみよう。 </div>	
		・重い ・軽い ・同じ ・わからない ・てんびんを使って量る	・重さはあっても、普通の物より、非常に軽いことを押さえる。

過程	学習活動	予想される児童の反応	指導上の留意点と評価
一 検 証 計 画 一 検 証 一 結 果 考 察	<ul style="list-style-type: none"> 他の班と話し合い、自分たちの班の方法について再検討する。 実験を行う 結果をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 重いなら下へ、軽いなら上へいくので、ろうそくの炎を持っていく。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 他の班の考え方を聞いてみよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> 条件がそろっていない。 その方法では、どちらが重いかわからない。 二酸化炭素の入った容器の方が下がったので空気より重い。 すぐ火が消えたので、二酸化炭素は空気より重い。 	<ul style="list-style-type: none"> 実験する前の条件を同一にすることも留意する。 *実験方法を考えることができたか。 疑問に思ったことは、何でも発表させ、よりよい方法を導くためのヒントにさせる。 *実験方法の矛盾点を指摘できたか。 時間がかかる方法をとった班には助言していく。 *二酸化炭素の重さについて、実験結果をまとめることができたか。

前時の活動において、児童は二酸化炭素などの気体は、軽くて、上のへいくと考え、また、「重い」「軽い」というのも、あるものを基準にしていることをとらえていないことがわかったので、それを導入に使ってみた。ポリスチレンは水に浮き、空気中では落ちる現象で、「重い」「軽い」と表現するときには基準になるものがあることに着目させ、次に二酸化炭素を水中と空気中に放出して、空気中の予想をさせてみた。全員が水の中と同じように上の方へいくと予想したので、「空気より軽い」という事かと念を押したら、今度は全員が空気と同じくらいと答えた。つまり、気体というものは全て、同じようなものであるという概念があったためだと思う。そこで、空気と二酸化炭素のどちらが重いか考えてみることにした。

まず、実験方法を個人で考えさせ、次にグループによる話し合いをさせてみた。学級の9名が考えた方法は次のようなものである。

- 実験方法を図等に表現できなかったもの ----- 3名
- てんびんを使って実験しようとしたもの ----- 2名
- 自動上皿ばかりを使って実験しようとしたもの ----- 2名
- 気体が上がるか、下がるか等を手の感触で実験しようとしたもの ----- 1名
- 重さ比べの実験でない方法でしようとしたもの ----- 1名

このことを各班で話し合い、決めた方法は、

1班 ○ 同じ重さの集気びんに二酸化炭素と空気をそれぞれつめて、台秤で量る。

2班 ○ 同じ重さの集気びんに二酸化炭素と空気をそれぞれつめて、てんびんに乗せ、その傾きをみる。

○ ナイロン袋に二酸化炭素と空気をそれぞれつめて、てんびんに乗せ、その傾きをみる。

2班については、集気びんを使うか、ナイロン袋を使うか意見がまとまっていなかったのので、1班にたずねてみることにした。次は、その授業の記録です。

T 1班にたずねてみましょう。では、C₁君発表してください。

C₁ はじめ、てんびんに、同じ重さのびんに空気と二酸化炭素を入れて、もれないようにふたをして、それを一緒において、どちらかに傾けば、重いか、同じか、軽いかがわかる。----でも、びんだとあまり重すぎではかられない-----。

[つぶやき C₂ はかられない-----。(自分はそんな風に言っていないという表情をして)]

T. なるほど、そういう考えですか。もうひとつは、-----

C₁ もうひとつは、ナイロン袋で、中に空気と二酸化炭素を入れてはかる。

C₃, C₄ はい、はい。

[つぶやき C₂ はかられない-----]

C₃ C₁さんは、びんではあまり重すぎではかられないと言ったけど、同じびんではかるのなら、つり合うのではかるんじゃないですか。

T C₂さんどうですか。その考えはC₂さんの考えだったのでしょうか。

Q₂ びんが重かったら、二酸化炭素とか、軽いかもしれないので、あんまりわかりにくい。

G₃ C₄ はい。

C₄ びんがだめなら、試験管でしてみたら、いいんじゃないですか。

G₃ どうやってたてるの。

C₄ 立てんで、ねかせれば---

G₃ ねかせたら、こぼれるじゃないの。

C₄ ふたせれば----

G₃ びんでも、重さが変わらないのならいいじゃないですか。フリ合うから

C₄ ---; いったんですが、---重いからだめって。

G₃ フリ合うから、いいと思います。

T ジャ、ナイロンの場合はどうですか。

Q₂ ナイロンのことですか。

G₃ はい。

G₃ ナイロンの場合は、つめたとしても、結ぶときに、大きさが違ってきたりするから、ひとつはこんぐらいに結んだとして、もうひとつは、少し大き目に結んだりしたら悪いので、ナイロンは不便だと思います。

C₄ 同じです。

T G₃さん、どうですか。

G₃ (沈黙)

T やはり、ナイロンの場合は、今、G₃さんが言ったように、比較実験の場合、同じ条件にできないですね。同じ大きさにするというのは、

C₄ むずかしい。

T びんの場合は形が決まっているから、同じ量だけとれますが、ナイロンはむずかしいね。(ここで、両方の考えを含む容器がないか、助言すべきだった。G₂の考えを殺してしまった。)

結局、びんで補集することになったが、補集する段階において、班でどのような方法で補集するのか話し合っていなかったため、水上置換をするとき、びんに水がつくことがわかり、同じ条件に出来ないということになり、実験が進行していかなかった。

そこで、もっと簡単な方法があることを示唆し、びんを逆さにすると空気より重いものは落ち、軽いものは上がることをヒントとして与えた。すると、

C₄ ポンとふたをあけて、火で試してみても、燃えたら軽いから上がっている。

(酸素の場合と感違いをしていたので、補則する。)

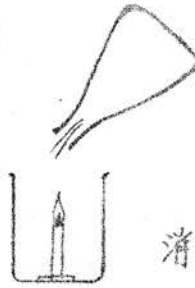
(1班は「軽い」と2班は「重い」と考えた場合の実験をすることにした。

1班)



消えない

2班)



消えた。

C₃ 重かった。二酸化炭素が空気より

C₄ それなら、この中にまだある。(1班の児童)

(2班と同じ実験を行う。)(消えた)

T ということは-----

C₁ 重い。

この後、2班と同じように、教師実験を行い、量が少ないと消えず、量が多いと消えた。

考察： 9名のもものが同じと思っていたので、「びっくりした。」「すごかった。」「またしてみたい。」「予想が当たると思った。」「量が少ないと消えないとは思わなかった。」「二酸化炭素が空気より重いとは思わなかった。」「先生がした時消えなかったもので、どうしてかなと思ったが、量が少ないとわかったのよかったです。」「水の中では上がったのに、重いのでびっくりした。」以上のような感想であった。班対班の話し合いで発言したのは、結局4名で、他の5名は発言するチャンスがなかった。全員に発表の場を与えようと思うが、時間に余裕がな

く、いつも発表力のある児童が中心になってしまう。しかし、実験の方法を同等に表現することができなかった児童も、いづらか班内の話し合いには参加していた。でも、班内の話し合いの方法が「ミニ一斉授業」的な面があり、直接班で指名されることがなかった。遅進児の発表の場を作り出していくことが、バズ学習のひとつの方法でもあるので、もう少し、班内での話し合いの方法、発表の方法を工夫してみたい。

本校は全校児童57名の小規模校で、5年生も9名と少なく、地域でも、学校でも家族的な雰囲気や活動している。本学級の場合も9名が1つのグループみたく、ある程度、一人ひとりに目が届き、バズ学習を取り入れる必要もないのではないかと思っていたが、やはり、児童というものは不思議なもので、対教師のときは発表しないでも、児童同士になると、口数の少ない児童でも口を開くようになる。この自由に自分の意見が言える学級づくりを基盤に多方面にわたっての人間関係の改善に努めたい。

バズ学習は周知のように、4~6名の小グループを作って、話し合い活動をさせることが重要なポイントとなっているが、本校のように、各学級が9~14名(2,3年は複式)ぐらいの規模の場合、能力差が著しく、リーダーとしての素質を持っている児童が少ないので、班作りに困難なところがあり、班を作ったとしても、単なる集団という面が強く、複式を含む小規模校でのバズ学習の望ましいあり方について助言して欲しいと思います。

※ 今後の課題

- ・ 話し合い学習の訓練が足りないために、自分たちの発表した内容をまとめることができない。
- ・ 自分の方針に固執し、他の意見を参考にし、更に、それ以上の思考を練る相互交流に乏しい
- ・ 個人 → グループ → グループ間の過程をとる場合の時間配分がむずかしい。

第5分科会 理科

研究主題 課題意識をもたせ、自ら探究する意欲を高める授業をどのように
すすめるか 1年「きんぎょ」の学習をとおして

愛知県春日井市立東高森台小学校 富田 彪

1. はじめに

1年生の理科の授業や調査をとおして気づくことは、直覚的全体的なとらえ方をする子どもが多く、これは低学年としての特徴をよくあらわしてはいるが、経験もせまく、事実や現象に対してもそのとらえ方が浅くてすじのとった考え方ができないことである。

そこで、この直覚のはたらきを主とした観察活動を高めていくことにより見方、考え方、扱い方を効果的に育てていくことができるものとする。また、このことが結果的には課題意識をもたせ、自ら探究する意欲を高めることにもつながっていくのではないかと思う。

この報告は観察指導とその評価活動を中心とした実践の一端である。

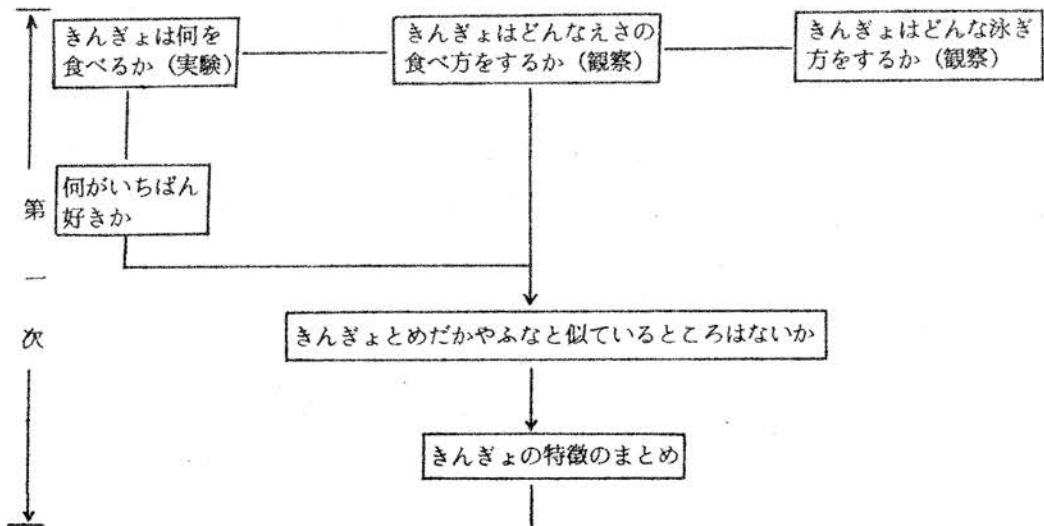
2. 実践のねらいと方法

目標にせまるため、1年生における観察のさせ方、観察したことの表現のさせ方等、目標を行動目標化して具体的にとらえていこうとした。即ち、指導目標をその学習の結果として学習者に何をなすことができるかという行動目標に分析すれば、何を指導し、何を評価するかということが同時にプランニングできるのではないかと考えた。次にこのような方法で実践することにした。

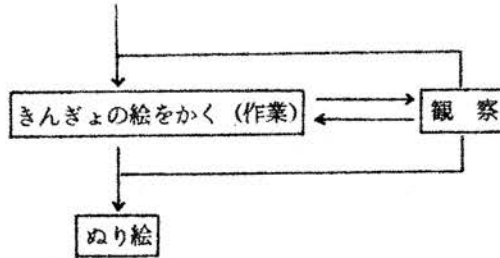
- (1) 単元「きんぎょ」について単元構成をし、指導計画をねる。
- (2) 単元の指導目標をたて、行動目標に分析して評価計画をたてる。
- (3) 行動目標をもとに観察指導法、評価法を考え、学習課題を設定して授業をする。
- (4) 評価の結果に対する分析をし、指導法、課題の適否並びに評価法についての考察をする。

3. 指導の実際

- 単元構成 「きんぎょ」(2時間完了)



↑
第二次
↓



○ 総括目標

きんぎょなどの動きかたや形には魚としての特徴があり、うさぎや鳥などと比べて食べものや、食べ方に違いがあることをきんぎょやふななどを細かく観察することによって理解する。

○ 行動目標及び下位行動目標

(1) 水槽の中のきんぎょを観察し、きんぎょの特徴を説明することができる。

ア きんぎょにいろいろなえさを与え、好むえさが何であるか確かめることができる。

イ きんぎょのえさの食べ方を自分の口を動かしてまねすることができる。

ウ きんぎょの泳ぎ方を次の観点で身体表現できる。

・速く泳ぐとき ・ゆっくり泳ぐとき ・方向をかえるとき

エ きんぎょ、めだか、ふなを水槽の中で観察して魚としての共通点を形態や泳ぎなどから見出すことができる。

オ 話し合いのルールを守り、グループで協力して楽しい学習をすすめることができる。

(2) 水槽の中のきんぎょを観察し、特徴を細かくとらえて絵にかくことができる。

ア 胴体だけの基本図に次のものを位置や形などを分析的にとらえながら絵にかくことができる。

・目 ・えらぶた ・腹びれ ・胸びれ ・しりびれ

イ からだの各部位の色の違いに気づいてきんぎょの絵に色をぬることができる。

ウ 学習のきまりを守り、仲よく楽しい学習をすることができる。

単元「きんぎょ」を指導するに先だって実施した子どもの実態調査によれば、きんぎょはこれまでの観察の機会や、知識理解も豊富なものと思われたが実態は、動き方、形、食べものなどについての認識が浅く、「きんぎょは赤いものだ」という直感的な観念が強いようである。

また、めだか、ふななどの差異については割合よくとらえられていても類似点、つまり魚という類としての認識はまだできていないことがわかる。

きんぎょの動き方や、えさのとり方の観察においては、低学年児童の特性を考え、できるだけ動作化をとり入れながら観察事項を表現させたり、評価を容易にできるようにした。

設定した下位行動目標を観点とした評価事例を次に示す。以下評価の観点としての下位行動目標は、その番号で示すことにする。

まず、(1)アについてはチェックリストによる評価を行なった。行動観察は○△×の3段階で行なった。

(1)アの評価基準と結果

○	えさを少しずつ与えて好むえさが何であるか確かめ説明できる	54%
△	えさを与えて調べるがやや分析的ではない	34%
×	人のやるのを見ているだけである	12%

結果をみると到達できた者54%、おおむね到達が34%、到達できなかった者が12%であった。到達度が今少しかんばしくない結果に終わったので調べ方についての指導をし直した。

(1)イ・ウについては授業中学習事項の定着化をはかる意味で班ごとに相互評価をさせた。さらに授業後動作化によるテストを行なった。

(1)イの評価基準と結果

○	えさのとり方が身体表現できる	76%
△	えさのとり方について身体表現できるが口の動かし方が不十分	20%
×	えさのとり方が身体表現できない	4%

(1)ウの評価基準と結果

○	三つの観点で大体全部身体表現できる	66%
△	三つの観点でその違いを身体表現で示すことがあいまいである	27%
×	三つの観点ともほとんど身体表現できない	7%

(1)エについてはプリテスト・ポストテストによって子どもの変容の度合いを調べた。

うろこがある、からだが似ている、しっぽがある など、プリテストにはでてこなかった表現での解答が増えているところから、とらえ方が細かくなってきたこと、そして、きんぎょ、ふな、めだかをひとつの類として認識できるようになったことが推定できる。

きんぎょ、めだか、ふなのにしているところはどこでしょう。 知っているだけかきなさい。(対象児童41名)			
プリテスト		ポストテスト	
くち	31名	うろこがある	25名
め	29	ひれがある	23
かたち	3	かたちがにている	23
うろこ	3	しっぽがある	19
ひれ	2	かお	5
しっぽ	2	からだ	3
ひれのうごきかた	2	め	6
いろ	1	くち	7
かお	1		
からだ	1		
わからない	6	わからない	1

(2)ア・イについてはチェックリストによる評価をした。

(2)アの評価基準と結果

○	目、えらぶた、各々のひれが位置や形などまちがえずにかけている	56%
△	目、えらぶた、各々のひれがかけてはいるが位置や形が不正確	39%
×	位置も形にもかなりのまちがいがある	5%

到達できた者はかなり少ない。これを分析してみると位置についての誤りはほとんどみられないかわりに、形が不正確であるのが目だった。

(2)イの評価基準と結果

○	からだの各部位の色のちがいに気づいてじょうずにぬることができる	68%
△	じょうずに色ぬりはできているが各部位の色の違いが正しく表現できていない	28%
×	色わけ、色ぬりともほとんどできていない	4%

4. 考察

観察した事を記録させたり評価したりする場合、言葉だけによる表現や文字だけによる表現では一年生の表現力、書写能力からみて、かなりあいまいで、うまく言えなかったり、書けなかったりすることが多い。特に観察事項を正確に記録することは大変むずかしい。

そこで、観察を深め評価をより確かなものにするために、身体表現をできるだけとり入れるようにした。このことは、わかったかわからないかが教師のみならず子どもどうしても判定しやすく、児童の相互評価や教師の即時評価をするうえで役だった。

単元や課題の違いによって、いつもこのような方法がとれるわけではないが、評価にかぎらず学習内容の定着化をはかるという面でも記録指導（からだで記録—動作化）の上でも、また授業を楽しく意欲的に参加させることができるという点でも効果があったように思う。

一方、態度評価をする場合、行動目標に分析しにくく、したがって評価そのものがかなりあいまいになるきらいがある。(1)オや、(2)ウの場合は挙手による評価しかできなかったが、評価結果の信頼性には今一歩欠ける面がある。

以下、評価事例を考察しての成果や問題点をまとめてみる。

- (1) 少しずつではあるが「注意深くみる」という習慣形成がなされつつある。
- (2) 観察結果を正確に記録するという事は一年生の段階ではかなりむずかしい。
- (3) したがって、からだで記録（動作化）させたり具体物に作りかえたり、絵記号による表現をさせることによって記録ということに対する補いを試みた。その結果、観察をより確かなものに近づけることができた。
- (4) また、そのために活動を中心に楽しく興味をもって学習に参加する児童が多かった。
- (5) 学習の目標を行動目標に分析すれば、授業の計画が焦点化され、しかも学習内要と学習評価の観点を同時に決定することができるという利点がある。
- (6) さらに、評価の観点は目標の行動を対象とすればよく即時評価をすることも容易である。
- (7) 態度目標を行動目標に分析する際、態度が身についたという行動を表すには困難な面がある。

5. おわりに

バズによる、学習形態で低学年における観察指導、評価活動を中心とした実践を試みた。しかし、これらの試みはまだほんの断片的なものにすぎない。これまでに実践してきたことをさらに深める意味で次の課題にも目をむけていきたい。

- (1) 目標・課題・評価の関連をさらに追求すること
- (2) 課題に対して児童一人ひとりがどのように反応し、どう思考が深められていくかをきめ細かにとらえていくこと
- (3) いろいろな評価活動の方法を実践のなかからもっとみつけていくこと

1. 単元 きんぎょ

2. 目標 (1)キンギョなどの動きかたや形には 特徴があり、ウサギや鳥などと比べて 食べものや食べかたに ちがいがあることを理解させる。
(2)細かく観察する能力や、かわいくなって飼育する態度を養う。

3. 学習計画 (2時間完了)

- 第1時 キンギョなどの魚の形、動きかた、えさの食べかたの観察をしよう。(本時)
第2時 飼育作業を通して、キンギョを細かく観察しよう。

4. 本時の学習

- (1) 目標 (1)水そうの中のキンギョを観察し、からだの形や動きかた、えさやえさの食べかたなどキンギョの特徴をとらえさせる。
(2)キンギョをメダカ、フナなどと比較し、キンギョの特徴をとらえさせ、魚としての初歩的な一般化をはかる。
(3)学習のきまりを守り、ゆよく楽しい学習のできる態度を身につけさせる。

- (2) 準備 要領：メダカ、フナ各数匹はいった角形水そう。QHP。
児童：キンギョが2～3匹はいった角形水そう。
各養のえさ(班単位で)

(3) 学習過程

過程	学習活動	留意点	評価
準備過程	<ul style="list-style-type: none"> ○ QHPのキンギョとフナの絵を贈る。 ○ キンギョを飼った経験を述べさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生活経験から興味を喚起させる。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の学習内容を知る。 ○ キンギョや他の魚について調べることを話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ キンギョについて知っていることを発表しなさい。 ○ 班で話し合って発表させる。(輪番法) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 目標を意図的にとらえたか。(観察)

	<ul style="list-style-type: none"> ◦ キンギョは餌を食べるか予想をたてる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 予想書をよく観察し、2.3の段階に発表させる。 	
中 心	キンギョは餌を食べるか聞けなさい。		
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ いろいろ石えさを少しずつ水そうに落とす。 ◦ あかむし ・パン粉 ・ふこ ◦ こはん粒 など。 ◦ 何かいちばん好きなのかを確かめる。 ◦ 好んで食べるもの ぜんぜん食べないものなどをみつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ キンギョは2~3日前からえさをやらないで空腹にさせておいたものを使う。 ◦ いろいろ多量のえさを与えたいように注意させる。 ◦ ウラチキやニフトリとの食べ物の違いに目を向けさせる。 ◦ 養にも注意させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ キンギョはどんなえさを食べるかわかたか。(対人法)
週 報	キンギョは、どんなえさの食べかたをするのか よく観察しなさい。		
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ えさの食べかたを観察する。 ◦ えさを食べたときのキンギョの動き。 ◦ えさを食べるときの口のようす。 ◦ キンギョのえさの食べかたをまねする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ ニフトリやウラチキの食べかたと比較し日から観察させる。 ◦ いちどにパッとのみこむことや けき出すのちいることに注目させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ キンギョの食べかたの特徴がつかえたか。(対人法、動作化)
観 望	キンギョは どこを動かして泳いでいるか調べなさい。		
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 前、うしろ、上下を右から観察する。 ◦ 遅く泳ぐときと、ゆっくり泳ぐときのひれの使い方のちがいを観察し採集する。 ◦ 方向を変えるときの様子を観る。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 泳ごうと上、横方向から見たあと、OHPで下方向からのシルエットを観察させる。 ◦ ひれの名称にまでは深入りしない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 運動と「ひれ」を関連づけることかできたか。(対人法、動作化)
観 望	キンギョとメダカやフナとにているところを発表しなさい。		
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ キンギョの木そうへ メダカフナを入れて観察する。 ◦ 形が似ている。 ◦ クラコがある。 ◦ ひれがある。 ◦ OHPの絵を見て確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 全体から部分へと見ていくようにさせる。 ◦ 差異点にもらめる。 ◦ 類としての見方ができるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 魚としての一般的な形をくらえながらキンギョの特徴をつかめたか。(対人法)
観 望	<ul style="list-style-type: none"> ◦ キンギョの特徴をまとめる。 ◦ OHPの絵を見て確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ メダカやフナと比較しながらまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 本時の学習内容が理解できたか。(対人法)
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 次時予告を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 色インボツを持ってくることを指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 今日の定魂は仲よく楽しくできたか(等身)

研究主題 課題意識をもたせ、自ら探究する意欲を高める指導を
どのようにすすめるか

兵庫県姫路市立城巽小学校 小河紀人

1. 一斉学習における個性化 (個とグループについて)

(1) 個を育てるためのグループ

(個を創る)

われわれがめざす授業は、個を生かし、個性を尊重するための問題解決型の探究活動でありたい。いかなる学習形態であっても、結局は一人ひとりの問題解決の活動に帰結しなければならないと考えるからである。

ここに、個とグループについての考えが生じてくる。いくら一人ひとりに課題を持たせ、その問題解決に向けて努力させようとしても、個が発想から構想へ、さらには結論へと考えを拡げ深めることは容易なことではない。教師の適切な助言が必要なことはもちろんだが、なによりもグループを組んで協力し合い意見を交換し合う集団の支えや励ましが重要となる。

しかし、グループを組みさえすれば学習効果が上がると考えるのは禁物だ。形式的な小集団では個をグループに埋没させ、教師の考えをむやみに押しつけることになりかねないからだ。個を生かすためのグループとは、そのグループ自体に問題解決の方向性がなければならないだろう。

(2) 心理的発達を考慮したグループ

(個を生かす)

グループには、2種類の考え方ができる。1つは、移動のない固定化されたグループを指す。学校生活の基礎グループが学習場面においても協力し合う場合である。他の1つは、同一目的グループが上げられる。これは、個が課題を追究する場面で同じ課題を持つ者同士が同一グループを組んで活動を展開する事を言う。このどちらを学習に使うかは、児童の心理的発達を考慮して決めな

ければならない。

・低学年においては、一人ひとりに十分な活動をさせ経験をさせることを主眼にしたい。それには、まず時間と活動の自由を保障しなければならない。そうでなければ自分の考えに従って活動することの楽しさを体験し、自然の事物・現象に目を向ける子どもには育たない。その活動の中で、一人よりも何人かで共同した方がより効果の上がる場合には、随意にグループを編成して活動を深めることを指導する。そうすれば、低学年であっても個の活動とグループとの活動とをうまく組み合わせて学習できるだろう。「手伝い合うグループ」とでも呼べそうな内容である。

・中学年になる頃から、自分の考えを友だちに認めてもらいたいと思う意識が強く働き始める。根拠をもって予想を話し合うことができるようになってくる。しかし、活動の範囲はまだ自己中心であるから、同じ考えの者が集まって、実験・観察を行うという同一目的グループ、すなわち「認め合うグループ」が、児童には好んで受け入れられるようだ。

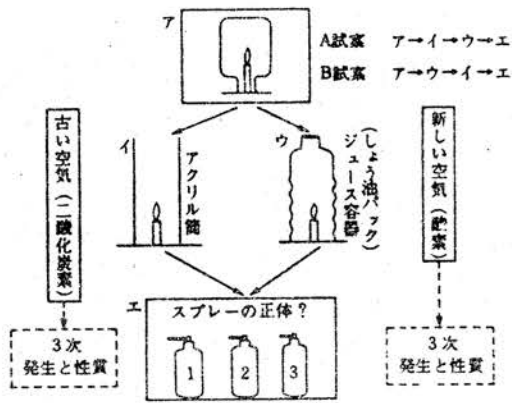
・高学年になると、共同で構想を練り、問題解決にあたることができるようになり、特にグループごとに競って実験方法等を発案する意欲が強くなってくる。ここに「鍛え合うグループ」が組織できるのである。

(3) 探究し続ける児童の姿 (自己実現を伴う個の一人立ち)

特に高学年においては、各グループごとに課題追究の場が多くなるが、まずグループの成員たる個々を一人立ちさせなければならない。他に甘え、頼る子どもがいては、そのグループの活動は停滞する。創造力を伸ばし、模倣を排する個の育成をめざすためには、常に各層の子どもを対象として教師が研究し続けなければならない。

(4) 思考の流れの順序性

単元構成で示した通り、1次から2次にかけての展開は2つの学習の流れを含んでいる。



前述(2)での「なぜ火を消えるのか」の追究が主流になる過程がA試案であり、「もっと燃やし続ける工夫をしよう」の追究がB試案になっている。どちらの追究結果も、空気の成分を三種類の気体スプレー（酸素・二酸化炭素・窒素）を使って確かめることになる点で一致する。特に空気の成分を考察する学習では、気体スプレーを使ったことで気体の名称の押しつけを防ぐことができた。

(5) 二酸化炭素の存在に気づく追究過程



- T このつつをろうそくの火にかぶせると、どうなるだろう
- C いつまでも燃え続ける
- C 消えないで燃える
- C つつの上があいているから、空気はいくらでも入ってくる

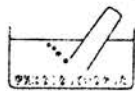
(なぜ、結果の分かり切ったものを先生は持ち出してきたのだろうという顔が多く見られる)

- T どうなるか、やってみよう
- C あれっ!
- C だんだんはのおが小さくなってきた
- C スーと消えた、びんの時と同じだ
- C おかしいなあ
- C もう一度、やってみよう

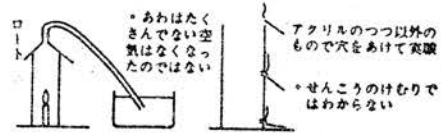
—現象に対する児童の考え—

(同一目的グループによる思考活動)

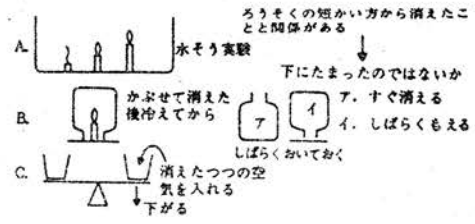
①燃えるのに空気が使われたので空気がなくなった



②中の空気が外に押し出されたので、空気がなくなって消えた



③消えるもともが、つつの中いっぱいになったから消えた



つつやびんの中の空気がなくなったのではなく別のものに変化したと考えられる

上記のような探究活動を、もしも、教師側からの一方的な課題解決学習にしたとすれば、児童の意欲も同一目的グループに分けた効果も半減する。実験順序を決め、一斉に順次こなしていく過程をとらなくても、発表し合い、互いのグループの良さを認めて実験をくり返すうちに、教師のねらいに十分到達できるだろう。もちろん結論が得られるまでには、かなりの苦労や思考の変容が求められるだろうが、その活動こそ子どもが自己実現に向かう過程だと考えられる。

(6) 考察

児童の発想を生かすとは、児童を遊ばせ、児童の言いなりにさせるといふ放任では決してない。探究型学習をめざす以上、何を探究するのかという目的、つまり課題の設定が何より大切になる。それを発想に基づく個々の活動の中から見つけ出そうとしているのである。その時には、個々の課題が異なる場合も考えられる。これらの問題点を解決するには、

① 課題や問題意識は共通だが、検証方法など探究方法が異なる活動

② 一人ひとりが違った課題や問題意識をもって探究する活動

すなわち多岐的な探究活動を、今後更に追究していかなければならないと考えている。

3. 活発なグループ活動を生む条件

探究し続ける児童とは、たくましく活動をくり返す子どものイメージである。自ら問題が設定でき、その問題解決に向けて努力できる子どもこそ我々のめざす児童の姿である。以下に、そうした児童の育成をめざして気をつけていることを述べたい。

(1) コロンブスを育てる (一人立ちをめざす教育)

考えたことは、何でも実験や観察ができる自由な雰囲気を作り、独創的な考えや先行経験を生かした考え方を尊重する。相言葉は「コロンブスの卵」

(2) 単元の導入をたいせつにする (自由な試行活動の重視)

単元全体を見通し、個の課題が生まれるような、自然の事物・現象と出会わせ十分な試行時間を与える。これは、個人差の確認と共に全員に意欲を持たせて学習のスタートラインに立たせる大切な時間にもなる。

(3) 結果よりも過程を重視する (教えることより気づかせる学習)

学習の結果得られる知識よりも、学習中に身につける活動態度を重視する。そのためには、OHPの活用や児童の板書を活発にしたり、「小先生」と呼ばれる児童同志の相互学習の機会を多く計画する。

(4) 実験のためのガラクタ類を常に用意しておく (リサイクルルーム)

児童の考えを予想して実験道具を準備するにも限度がある。危険を伴う場合や基礎的操作を習熟させる場合を除いては、できるだけグループや個人の考えが生かされるための小物類やガラクタ類を理科室に用意しておく。

(5) 教科書の使い方に気をつける

教科書は資料などの副読本と考え、授業では、あくまでも児童の思考が切れないように単元構成に気を配る。この姿勢を貫けば、教科書に頼る考えは児童からなくなり、教科書以外の実験方法を考えることに興味を持ち活動の喜びを知ることになる。

(6) グループの人間関係の浄化に心がける

(同一目的グループの
有効活用)

学習時だけのグループ編成はまれで、生活全般にわたって一期間同じ構成員でグループを編成することが多い。それ故に、常にグループの人間関係の正常化に気を配る必要がある。分担は固定しないで、輪番制とし、固定観念を持たせない工夫がいる。強者を鍛え、弱者を育てるグループ学習に徹する。

(7) 記録(ノート)の整理を考える

(記録の重視)

記録は思考の軌跡が残るものを工夫する。学習後の感想はもちろん、課題においても、個々の納得できる表現を求めさせる。「楽しかったこと、もっと調べてみたいこと」を書かせることにより、興味や関心の範囲を知ることができて次時の計画を立てやすくなる。

(8) 文集作り

単元の終了では、満足感を味わえるまとめにしたい。そのためには、学習の感想を文集にするとよい。文集作りは、単なる知識の整理だけでなく、児童自らが学ぶ意識を高揚させる確認の場としても、大きな役割を果たしてくれる。

(9) 知識の定着と意欲継続の確認

(生活ノートの活用)

「教えこむ」のではなく「気づかせる」ことに徹すれば、自らの力で問題解決にあたる子どもがふえてくる。学習が、精神的にも学習内容においても充実した時間であれば、自然に子どもの生活は理科の知識と結びついてくる。既習の概念で生活を見直すことも多くなるし、生活経験が豊かな発想を与えてくれる。そのための日記類には、教師は毎日目を通す必要がある。

第5分科会 理科

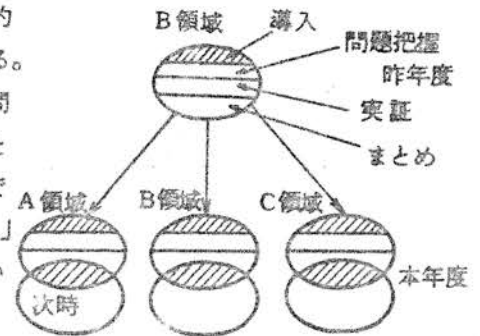
研究主題 課題意識を持たせ 自ら探求する意欲を高める指導をどのようにするか。
兵庫県姫路市立増位小学校 大原 若菜

1、増位小の理科教育（自ら探求する意欲を高める理科教育）

昭和58年度新設された本校は、後ろに広峰山・増位山を背負い、前に弁天池を眺め、教室の窓からは姫路城をはじめ、はるか海岸まで、姫路市一円を見おろせる、とても環境のよい、自然に恵まれた学校である。

本校の児童の実態は、与えられたことはきちんとできるが、やや主体性に欠け受け身の傾向にある。そこで、この恵まれた美しい自然に親しみ、自然を愛し、自然の驚異・自然の神秘さに眼をみはるそんな心と目を育て、それを自らの手で生かしていけるような力を持った人間性豊から児童に育てていきたいと願い、「自ら考え、探究する意欲を高める理科教育」という主題を設定した。

自ら考え探究する意欲を高めるために、理科学習においては、児童が教材に対し、強い興味と関心を持ち、意欲的に取り組み、自ら考えを推し進めていく姿勢が必要である。つまり、児童自らが「ふしぎだ」「なぜだろう」という問題意識を持ち「もっと調べてみよう」「考えてみよう」という解決へ向かって「やる気」をおこさせることが大切である。そのために、昨年度は教材との最初の出会「導入」を「学習意欲の育成の場」と考え、主にB領域についていかに問題意識を持たせるかについての研究を進めてきた。本年度はそれを、A、C領域へと広げ、更に学習の終わりに次時の導入についても考えている。



2、問題意識を持たせるために

(1) 初期事象の工夫

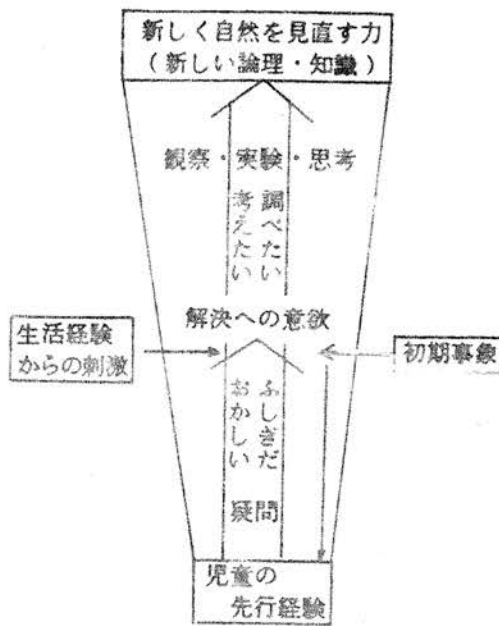
子どもの意欲的な問題解決行動は、自然発生的に生まれるものではなく、活動を誘発するような自然との出会い、すなわち教師がある教材を提示する（事象提示）方法を工夫することによって、呼び起こされてくると考えている。この現象を本校では「初期事象」と呼んでいる。

例えば、教師がある教材を提示する。児童はそれを見て自分たちの今までの先行経験との間にずれを感じて、「おや、おかしい」「こうなるはずだ」「何かわけがあるのではないか」「このようにして確かめてみたい」など疑問を持つ。

それらの、ずれの大きさが大きい程、児童の持つ問題意識も強烈となり、その解明に対するエネルギーも大きくなるのではないだろうか。

そこで、導入段階における動機づけとして、より疑問や矛盾を子どもに感知させる事象を提示することが子どもの問題意識を高め、問題解決に向かって、意欲的に取り組ませる要素であると考えている。

しかし、低学年においては、はじめに教師が示す教材を一目見るだけで、「はやく作りたい」「さがしてみたい」「集めてみたい」という強い意欲がわき、教材に飛びつくような方法も考えねばならない。



また、導入には、単元全体としての導入と、単位授業における導入と2つの場合があり、何のための実験か何を考えさせる実験か、何を理解させるためのものか、明確にして行わなければならない。

以上のような重要な役目をする導入における提示教材については、できるだけ児童の身近にあるもので、よく目にふれ親しみのあるものが望ましい。そして、児童が考えたり作ったり出来る範囲のものでなければならない。児童に課題解決の方向がわかり、できそうだという見通しが立ってはいじめてやる気が出てくるものである。

(2) 発問について

研究を進めていくうちに、児童の心情や思考は、発問によって変わってくるのがわかった。よく似ているのだが、ちょっとした語尾のちがいなどにより考える視点が別の方向にむいてしまう事があった。

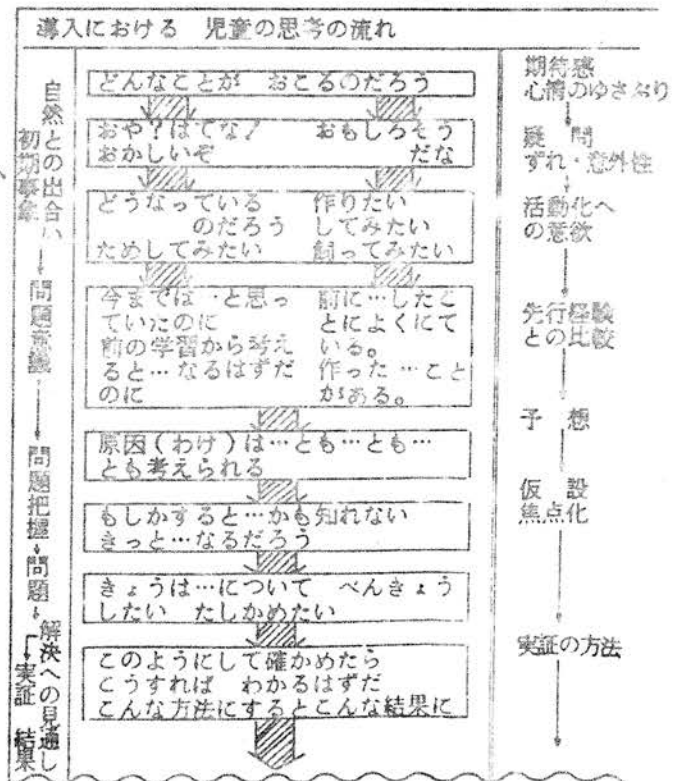
思考の筋道(事象との出会い—問題把握—解決への見通し)

そこで発問を大切にし、児童の思考をさまたげたり、中断するような発問をきびしく点検していき中心発問を考えていった。

特に導入については、教材を提示する時、教師はできるだけしゃべらず、じっくりと事象を見せたり聞かせたり、触れさせたりして意識を高める手だてと考えていくことにした。

(3) 児童自らが考える課題

そして、出来れば本時の課題についても教師が出すのではなく、児童自らが「～を試してみよう」「～を考えたい」というように主体的に学習を進めていく事ができれば解決した時の喜びも一段と大きく、本物であり、ひいては次の学習へのエネルギーとして連なっていくのではないだろうかと考えている。

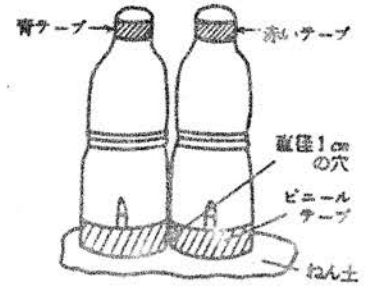


3、実践例 5年（火と空気）

前時の学習で閉じ込められた容器（広口びん）の中でのろうそく（太さ、長さの同じもの）の火の燃え方①広口びんの大小によって燃える時間がちがう。②同じ大きさの場合ほぼ同時に消える等）について学習している。

この導入は、このような子どもの学習経験に基づく予想をくつがえし、「あれ!!」という気持ちを起こさせ、「どうしてだろう」「こうかもしれない」等、問題意識を持たせ、その解明への意欲を起こさせることをねらったものである。

提示事象




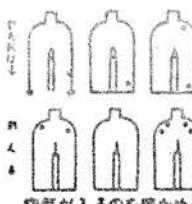
○予想される児童の反応

子どもの予想（思考）
 ○火はやがて消えるだろう。
 ○両方とも消える
 ○同時に消えるのではないかな

意外性（ずれ）
 ○青は1分で消えた
 ○赤は燃え続ける

—子どもの驚き・疑問・探求心—
 ○おかしい、「おや!!」青い方は消え、赤い方が燃え続けるのはどうしてだろう。
 ○もうすぐ赤い方が消えるはずだ。いや、まだ燃えている。なにか……？
 ○何かしかけがあるのでは一調べてみたい。

(1) 指導過程

学習活動	指導上の留意点	備 考
1. 提示実験を見る。 	○見えにくい児童は、側の方に移動させて見させる。 ○燃え続けていることに疑問を持たせ、水筒照鏡へ結び付ける。	ジュースの空パック ろうそく
2. 課題について話し合う ・予想 ・実験方法を話し合う。 燃やし続けるために空気を入れる	○ジュースやパックを使って燃やし続ける方法を考えさせる。 ○いろいろな方法を考えさせたい。 ○朝一紙一筆委員会へと話し合いを広めさせる。	電 OHP TFP
3. 実験をする。  空気が入るのを確かめる。	○ポリエチレンは引火性が強いので、慎重に実験させる。 ○消えたり、燃え続けたりするのを見て、違いに気付かせる。 ○ろうそくが燃え続けるためには、新しい空気が必要なことを理解させる。 ○空気が入るのを知る方法として、蜂の巣の膜を用いることを知らせる。 ○実験操作をさせながら、空気の流れと火の燃え方を視覚的にとらえさせる。	旗 紙 香
4. わかったことを発表する。 5. まとめ 物が燃え続けるには、新しい空気が必要である。	○ノートにまとめさせる。 ○結果をまとめさせる。	

中心疑問

- このパックでふたをするとどうなるだろう
- どうしたら、このように燃やし続けられるだろう
 穴を明け、空気を入ると燃え続ける
- 自分たちの考える方法でやってみよう
- 空気が入っているのを見る方法はないだろうか
- 今日の学習でどんなことがわかりましたか

(2) 第1授業者 事象提示部分 プロトコル

教師のはたらきかけ	教師側					児童側				児童の反応 (心の動き)	
	その他	K	操作	心	思考	時間	思考	心	操作		その他
①先生がちょっと見せてあげるから前まで来なさい。	①										(静かにする)
②いいですか	②										(興味ありそうに見る)
③さて何が出るでしょう (ろうそく2本に火をつける)											消える(きのうの実験から考えると消えるはずだ) (じっと見つめている。)
④このバケツでふたをします どうなるだろう											(どうなるかな)
⑤消えるかな											消えていく(もうすぐ消える)
⑥見ていてよ											あっ消えた(やっぱり消えた)
⑦消えへんやん											背の方が消えた
⑧消えたん											
⑨賢い方消えたね											
⑩もうすぐ消えるか											
⑪消えそう											
⑫消えへんねえ											まだ消えへん(おかしい味が消えないのはどうしてだろう)
⑬今で2分											長いわ(でももう消えるだろう)
⑭こっちは消えたが、こっちは消えなかったね											(おかしい、何かしなげがあるんだらうか)
⑮みんなもやし続けられるかな											穴があいと(う)っ(穴があいと)

(3) 第2授業者 事象提示部分 プロトコル

教師のはたらきかけ	教師側					児童側				児童の反応 (心の動き)	
	その他	K	操作	心	思考	時間	思考	心	操作		その他
①ろうそくを二本用意しました	①										
②ろうそくに火をつけてもらいます	②										(児童が前に出て火をつける)
③さあつけてもらいますよ。どうなるかな											火がついた
④今日はこの物器を用意しました(空気をかぶせる様子をして)	④										
⑤どうなると思いますか											火がちょっとしてから消えると思う (もうすぐ消えると思うよ)

①よろしいいいますよ ①さあ～ (笑臉を見る)		(のり出して見る)(どうなるだろう) ええ (賢だぞ) あれ (おかしい) えっ (なんで)
②どうですか (笑臉を見る)		ええ、まだもえてる(おかしい) (なぜだろう)
③先生同じようにふた をしたのに こっちの方は こっちは なぜなの ④おかしい		朝えた まだついで (まだついで) (何かしなげがある のだろうか)
2		1 3 5 5 7

(4) 考察

(i) カテゴリー集計表
第1授業者

	教 師					児 童					
	数	RR	照	心	照	計	照	心	照	値	計
初級事象	4	0	5	4	3	16	2	5	2	0	9
課題事象	42	0	20	2	6	70	16	2	4	0	22
事象	5	0	13	1	2	25	2	0	6	0	8
まとめ	17	0	5	0	0	20	0	0	0	0	0
計	9	0	6	0	4	21	0	1	2	1	4
まとめ	6	0	0	1	11	18	7	0	0	1	7
計	8	0	56	8	46	193	36	8	14	1	59

第2授業者

	教 師					児 童					
	数	RR	照	心	照	計	照	心	照	値	計
初級事象	4	0	2	5	7	18	4	3	2	1	9
課題事象	7	0	7	0	2	16	11	0	2	0	14
事象	2	0	4	0	1	7	0	0	3	0	3
まとめ	11	0	0	1	4	16	11	1	11	0	23
計	3	0	6	1	4	15	3	0	5	0	8
まとめ	1	0	3	0	5	9	4	0	1	0	5
計	31	0	24	4	23	62	33	4	24	1	62

(iii) 第1授業者反省点

- 児童の(心情、思考)をうながしている発問は、やはり中心発問である。
- 教師の発言が多い(193回)精選して、大切なことだけしかしゃべらないようにする。特に初級事象の時は、だまって見せて、心情を高めることが大切である。
- 授業のはじめ、児童の気分をほぐすために「はいります」というような流行語を使うと、どうなるだろうか。

事象提示については、かなり児童が疑問を持って最後まで考えているので、この方法でよい。

びんの上の穴を児童に意識させる発問を考えたい。

予想をはっきりと立てることが必要である。

改良指導案

(iv) 第2授業者反省点

- 「どう」「なぜか」というような発問のくり返しになったが活動は活発であった。
- 課題や、本時のまとめは、児童が発表した児童のことばでまとめたい。
- 事象提示のビンの後に黒い紙を置くと、よく見えてよいのではないか。

(5) 抽出見による分析

※4人グループの中で対称的な2人がいる班を選び2人の様子の記録をとり、理科学習に於ける小集団活動のあり方や個を生かすてだてを考察する。

- A・・・理科学習を特に得意とする児童
- B・・・理科学習を不得意とする児童

(i) 抽出見 (A, B) カテゴリー集計表

児童名	思考		心情		操作		その他		計	
	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A
初期専攻	0	1	3	4	2	2	0	1	5	9
問題把握	1	11	4	0	10	10	0	10	15	31
実験	1	2	3	0	6	1	0	0	10	3
まとめ	1	3	1	0	1	0	0	5	3	8
まとめ	0	1	1	0	8	6	1	2	10	9
まとめ	0	2	1	0	8	0	0	3	9	5
計	3	20	13	4	35	20	1	21	52	65

(ii) 具体的記録

	問題把握	実験	まとめ
A	自分の考えをしっかりと持っている。 ノートに自分の考えを書く。 考えをグループ内の他の子に書かせてあげる。 シートの絵を少し訂正し書きなおす。	他の子に作業をさせて自分は見ている。 たりないところをおぎなっている。	まとめる、自分の考えが高まっている。 ノートにまとめて発表する。
B	自分の考えが持てない。 となりの子のノートを見てかく。 となりの子のノートを見てかき直す。 シートに書いている隣の子に注意をつける。	作業をする。 器具をさわったりしながら思ったことをつぶやく。 マッチをすって火をつける。	自分の考えを持つことが出来る。 ノートを書く 友達の発表を聞いて書き添ったす。 発表の用具を手伝って前まで持っていく。

(iii) 考察

- ・思考面や点検役をAが、操作面をBが受け持って、それぞれ授業に参加して、態度目標を高めている。
- ・意の中で、A, B, 他の児童も共に、問題把握—実験—まとめの段階をふむことによりよく考え、新しい考えを持つことができ、認知目標を高めている。
- ・実験を中心とするグループ活動であるためか、Aは昔と違う自分の考えを説明しないで、自分が訂正をしている。今後はグループ内で役割り分担だけでなく、話し合いの方法を指導して、言葉により互いの向上をはかり認知目標と態度目標の同時達成をねらいたい。
- ・抽出見の記録を中心に評価を行ったけれどもこれで学級全体の評価とはなり得ない。今後は個人個人のペーパー記入による調査方法を取り入れたい。

分科会主題 励まし合い認め合う学級集団づくりをどのようにすすめるか（いじめの問題点とその対策）

新潟県新潟市立南中野山小学校 井上 哲郎

1. はじめに

学級は複数の人間の集団である。個々の子ども達が、学級に於いてそれぞれに楽しく活動でき、その活動に満足感を味わえるような集団をつくるには、互いに理解し心が触れ合うという事が出発点であるように思う。

今の6年生38名を5年生の時に受け持った時、自分が言わないと困る事でさえ言わない子や、先生や友人の意見を聞いて考えることのできない子が沢山いて驚いた。

私は子ども一人ひとりが自分の考えをしっかりと言い合い、他人の考えを聞いて理解し合えるようにしたい。そこで、お互いに理解し心が触れ合う様なコミュニケーションをどう成り立たせるかという事を課題として取り組んできた。

2. 研究主題 その1

【励まし合い認め合う学級づくり】

～自分を表現し相手に伝えられる子どもを求めて～

【1】実感

本校に赴任し、初めて生の子どものに接して以来、彼らの様々な行動の中に、何かおかしいことがあるのを感じていた。例えば、次の様な場面があった。

A 廊下を歩いていて、前の児童のポケットからハンカチが落ちたが本人は一向に気がつかない。そこへちょうど後ろから近づいてきた二人連れの子は、全く声をかけてやらなかった。

B 4年生の児童が、持っていた紙をくしゃくしゃに丸めて廊下に投げ捨てた。それを見ていた教員の児童の反応は、“見たのに取り合わない（無視）”又は“とっさに目をそむける（見て見ぬ振り）”であった。

C算数の時間、教師から質問されたBさんは、一言も話さずに黙
り尽くしていた。その時他の児童は、Bさんと同じように下を
向いていたり、あるいはまったくBさんの姿を見ていなかった
りというような状態だった。

さて、ここでBを取り上げて考えてみると、無視した子や見て見
ぬふりをした子の心の中には、「いいことじゃない」あるいは「拾
うべきだ」という気持ちがあったはずなのに、なぜ表現されないま
まになってしまったのだろうか。

【2】原因 ～実態A～Cに於いて、表現の障害になっていたと考
えられる主な心理状況。～

実態A はずかしい

実態B 余計な事を言って嫌がられるのは損だ。

実態C 答えが違っていたら、みんなに笑れるかもしれない。

以上の様に考えられる。私は、これらの障害を取り除いて、自分の
考えを素直に表現し、他人に伝えることができるようにするため、
次の様な実践を行った。

【3】実践例 ～実態C Bさんの場合への取り組み

日頃算数の苦手なBさんが、班バズ司会のA君の勧めで、課題と
した図形がひし形であることを班代表として発表した。長い説明が
終わると、Bさんのいる6班から拍手が起き、続いて学級全体から
の大拍手。Bさんは素晴らしく明るい表情でニヤッと笑って着席し
た。私はここで6班の班長C君に、「日頃発言の少ない人ができた
時は必ず発表ゆるする」そして「発表ができたなら思い切り拍手するこ
と」の2点を指示していた。

【4】考察 ～Bさんの例からわかったこと～

Bさんが発表を終えるまでの間、学級の児童は心の中でどの様に
関わり合っていたのか推測してみると、下の様になる。

	1班バズ	⇨	2発表時	⇨	3C君の拍手	⇨	4全員の拍手
Bさん	不安だ		はずかしい		きまり悪い		うれしい
C君	がんばれ		もう少しだ		やったぞ		うれしい
6班残り	一応がんばれ		大丈夫か		やっとできた		よくやったぞ
6班以外	誰が言うの？		正しいの？		やっとできた		よくやったな

この表で注目したいのは、場面1でBさんは不安な気持ちだった
のが、場面4では、うれしい気持ちに変わっているということ。

先生の言葉を聞いて
 常習の力、本人の
 意図

感情の共有化
 → 20分入るまで
 15分間

そして、6班以外の児童は場面2で「正しいの?」、場面3では、「やっとできた」という様にBさんの発表を始めはあまり高く評価していなかったのが最後の場面4で「よくやったな」というBさんなりに情一杯できたんだという評価に変わっている点である。

先にも述べたが、私がまだ一斉授業を中心に学習を展開していた頃、もともとおとなしいBさんは苦手な算数で当てられると、一言も話す事ができずに立ち尽くしていた。Bさんの言葉を、のどもとで堰止めていたものは、「もし間違ったらどうしよう。みんなに笑われてしまう。こんな問題もわからないのかと思われてしまう。」という不安だったのだろう。この時には、Bさんにとって他の級友は全員、自分と向かいあい自分を試している相手であり、いわば自分を苦しめる敵でさえあったわけだ。結局Bさんは一言もしやべれぬまま席に着き、その事で自信を失い、他の級友に対して心を閉ざすことにもなってしまった。

このBさんが、始めは一斉授業の時と同じく不安であったのに、なぜ自分の言葉で考え発表することができたのかという点、それは発表に際して、Bさんには自分と同じ立場から発表を聞いてくれる同班の仲間がいたからである。後ろに退いてしまおうとする弱い自分を、前へ前へと押し出してくれる仲間の力があつたからである。この力に支えられたBさんが勇気を持って発表してみると、今度はまた同班の仲間が拍手によってそれを迎えてくれた。他班の級友はこの拍手を聞いた時、これまで何も言えなかったBさんが、今まさに最後まで発表できたのだということにハッと気づき、「よくやったなあ」という思いから、拍手に加わったのである。

小6. 2. B君
Shinichi
日記

バズ学習によってBさんは、

1. 発表の場(きっかけ)を得た。
2. 同班の励ましによって、発表する勇気(原動力)を得た。
3. 発表できた事により、自分に対する自信が生まれた。
4. 励まされ、更に拍手によって認められたことで、級友に対する安心感(又は信頼感)を得た。

また学級集団全体として、Bさん一人の発表を通して、発表者以外にも学級の児童全員の間にも励まし合ったり認め合ったりという心の交流が生まれ、この学級集団の学習活動を喜びのある、満足できるものに作り変えていくことが可能であった。

3. 研究主題 その2

【いじめの問題とその対策】

～他人を知る（聞いて理解する）子どもを求めて～

【1】A君の実態とその変化

5年生の2学期にA君は転校してきた。彼はクラスで一番体が大きく、驚く程礼儀正しかった。転入の挨拶をした時、あまりの立派さに、私はもちろんみんなが驚いてしまった。

しかし次の日には理科の学習で「答えは1～3のうちどれか」と尋ねると、「はい、答えはBなのであります。」と、礼儀正しく大きな声で答えが返ってくるのであった。A君は、相手の言った事を理解する能力が極端に欠けているので、この様な全くちんぷんかんぷんな発言が多だけでなく、文字による情報についても同様に、正しく受けいれる事ができないので、時間表通り用意できずに忘れ物を連発したり、黒板に示した連絡は一応ノートに写していても、決して頭の中のノートには刻まれていなかった。そんなA君は、当然班活動にも大きくブレーキをかけることになった。A君の入った班では、誰もが彼に何らかの要求を出すのだが、ことごとく理解されず、最後にはA君を嫌がるようになってしまうのだった。

最初はあきれていたクラスメイトも、だんだん面白がるようになり、やがてその面白さが彼をからかう原因となり、そしていじめが発生した。休み時間になると、頭をこずかれたり、背中に紙を貼られたりする。だが、A君はその事を担任である私に報告する時でさえ、本当はB、C、Dという3人がやった事なのに「BとCとFとGがやった」などと誤ってしまうのである。FとGは、何もしていないのに、ということで、事態は限りなくからみ合ってしまう。A君が正しく理解して話す事ができない事を知って、自分のクラスはもとより、他のクラスの児童までが彼をいじめるようになった。

6年生になり、そんな状態がようやく沈静化してきた頃、A君に変化が起こってきた。彼は家で秘かに練習してきた、ある人気マンガのコミカルな動作を大変うまくやってみせ、みんなを笑わせた。それまで授業中も休み時間もみんなからあまり相手にされなかった彼が、突如注目の的となり、彼に対する周りの空気もなごやかになってきた。A君はやっと人に認められる事ができたのである。

【2】考察 ～A君の問題点と私の課題～

A君はその実態からわかるように、人の話を聞けないばかりか相手を無視した自分勝手な話し方をする。

いじめの対象となる子どもは、A君と似たような要素を持っている場合が多い。いじめられるという事は、学級集団に於いて、他の仲間から認められていないばかりか、排斥作用を受けているのだ。

なぜ学級の大多数の児童がA君を排斥しようとするのかというとA君が居ると気分が悪くなるからである。相手になっている児童は常に、自分の意志をA君に伝えたいという願いが打ちのめされ、反対にA君からわけもわからぬ表現を押しつけられるのだから、コミュニケーションが成り立たず、不満・不快が蓄積してしまうのである。A君の方も、常に自分が他人に認められないので不満になる。

伝達の糸

【自分】伝達 ⇄ (意志) ⇄ 理解【相手】

理解 ⇄ (意志) ⇄ 伝達

理解の糸

上の図のように、コミュニケーションは互いに伝達し、理解し合う事で初めて成り立つものである。これまで、A君にとっては伝達の糸も理解の糸も両方不通であったが、最近人気マンガのコミカルな動作のまねをすることによって、ようやく伝達の糸が開かれ、今までとは違った級友との交流が生まれてきた。

A君の場合、理解の糸が著しく劣っているが、表現したり認められたりする事への願望はとても強い。これからの課題は、A君が算数の計算分野が得意な事などを利用して、学習面でもA君が他人に認められるような場面をどう切り開いていき、認められる喜びから理解する喜びをも引き出し得るようなきっかけをつくるかである。

4. おわりに

～第20回全国バズ学習研究集会・研究主題

【個性化をめざす教育の創造—人間関係を基盤として—】

についての考え

私は常々、学校での活動は楽しくなくてはならないと考えているが、その楽しさとは、集団の中の一人ひとりが自分の相手に対して

何らかの要求を持ち、その要求を確かに伝え合い、ぶつかり合いながらも実現し得た時の満足感からくる楽しさである。

個々の子どもたちはそれぞれ内に秘めた素晴らしい個性の芽を持ちながら、様々な現実には縛られ何らかのカラーに閉じこめられているので、この個性の芽を伸ばせないでいる。子どもたちが自分のカラーを自ら破り、心に動めいている欲求に向かって行動し、より高いレベルに自分自身を変えていく事の基盤は、子どもの内なる部分で“もっとこうなりたい！もっとこうしたい！もっとこうなってほしい！”という強烈な願いであろう。これこそ、仲間集団での様々な活動に参加する事によってはじめて一人ひとりの子どもたちの心に湧きあがる事のできる自己変革へのエネルギーである。

バズ学習では、学級集団に於ける個人対全体という冷やかな関係を結果的に併し、どんな場面にあっても、個人はいつも他の仲間との暖かな相互のつながりを持つ事ができる。バズ学習に於ける仲間の相互作用は、一人ではどうしても破れなかった自分のカラーを、自らの願いによって破る事を可能にできるのである。

しかし、この様な児童の自己変革を可能にする力を持つバズ学習の効力も、形態そのものだけで効力を発揮する事は限界があるのだと思う。Bさんの発表によって全員が新しい仲間関係を創り出せた背景には、私から班長C君に示した助言があったのだし、又今まだ適切な取り組みをしていないA君にあっては、バズ学習に参加する事自体が困難な現状である。

バズという多大な効力を利用し、学級づくりの実質を生み出すためには、やはり自分の学級に合った活用の仕方や、個々の児童の問題に適した場面の設定を、教師自信が意図的かつ積極的に行う必要性がある。

更にA君のようなバズ学習に参加すること自体が困難であるような子どもの問題を考えてみると、それは単に彼の性格等に由来しているだけでなく、そこには明らかに国語の基礎的能力である表現し理解するという学力の貧困さが伺える。従って我れわれ教師の仕事としては、バズ学習の中で子どもたちの自主的な活動を助長するとともに、学習活動に於いては確かな学力を子どもたち一人ひとりが獲得できるような教材への取り組みが必要であると思う。

バズ学習の基盤としての学級づくり

—参加度の高まった授業をめざして—

愛知県春日井市立松山小学校 田川正樹

1、地域・児童の実態

(1) 地域の実態

春日井市は、名古屋のベッドタウンとして、近年人口が急増し25万人を数える。本校区においても、転入者が増え地つきの人との融和が問題となっている。保護者の職業をみると、サラリーマンが半数を占め、自営業（下うけ工場）も多い。本校区の東隣に名古屋空港がある。

(2) 児童の実態

児童数636名、1学年3学級でこじんまりした学校である。児童は極めて人なつこく純朴である。が、学習意欲・学力とも今一步である。「忘れ物が多いなど基本的な生活習慣が身についていない」と指摘する教師も多い。

2、本校現職教育テーマ

わたし達の学校では、本年度から

参加度を高める授業法の研究

を学校教育の柱にすえ、教室における子ども達全員を、真の学習主体として授業にたちむかわせるべく、いろいろな角度からきりこんで研究を深めている。

3、実践・研究の仮説

「教師が、子どもの中にとけこみ、ひとりひとりの子どもに接して高めていく」そのことも大事であるが、子ども達同士が高めあっていくという取り組みの方がもっと大事ではなかろうか。（小集団を使って学級づくり）

当面、生活班による学級づくりに力を入れ、そこで養われてくる自主性、協調性、発表力などを学習班育成の基盤に持ちこみ、両者の有機的な関連のもとに学習集団づくり（バズ学習）をおし進めていくことが効果的でなかろうか。

（学級づくりから学習集団づくりへ）

4、実践（3年 男子18名、女子16名）

クラスの中に明るくやる気にみちた前進的なトーンをなるべく早い機会にうちたてる中で、

- ・チャイムとともに行動する
- ・しっかり聞き、はっきり話す

- ・ひとりひとりが係活動を意欲的に取り組む
- ・班長として自覚された行動がすこしでもとれる

ノ学期における学級づくりの到達目標にかかげ出発した。

(1) 班編成をステップとして

<第1次班> 4月4日(学級開き)

ア、班づくりの方法

名簿順、男女混合、4人班……7 6人班……ノ (8班編成)

机に、カード **資料ノ** をはって、担任の期待を知らせるとともに班編成。

イ、第1次班で何を教えるか

- ・クラス全員の名前を覚え、早く仲良しになる
- ・朝、帰りの会のスタイルを教える **資料2**
- ・班長のやる気をひきだし、仕事の分担の仕方を教える
- ・係活動のあり方を教える(ひとつの班……ひとつの係)
- ・初歩的な学習規律を確立する

ウ、経過

「やる気」のある人こそ班長をやってほしいと話し、班長を班内互選。

話し合いで決めた班……7 じゃんけんで決めた班……ノ

「班長がやる気があると、班までよくなる」とことあるごとにけしかけ、清掃・給食当番の分担の仕方などを教えるとともに、班の先頭に立つことを求めた。

係活動は、当面必要な

号令係……「起立！これから○時間目の授業を始めます」(係)

「ハイ」(全)

朝・帰りの会司会

歌係……朝・帰りの会での歌

2つの係を教師がやってみせた後、「やってくれる班はありませんか」と呼びかけ、立候補した班に練習日を与え翌日競い合わせ決定した。なお3週間目にすべての班にひとつの係を担当させた。

学習規律の確立として、「チャイムが鳴ったらノ分以内に席につく」ことを日直に点検させた。

帰りの会などで、班対抗のゲームをして遊びながら班意識を高めることをねらった。

<第2次班> 5月7日

ア、班づくりの方法

やりたい、やってほしい人の中から班長選出。

ソシメトリック調査などをもとに、教師が班編成。問題児はめんどうの

みれる班長につける。

座席は班で話し合い決定

イ、第2次班で何をねらったか

- ・係活動の活発化をはかる(能)
 - ・しっかり聞き、はっきりす。そのために「ハンドサイン」をとりいれ
- また、発言が横につながるように、発言の仕方を教える。

ウ、経過

1次班で段階的に係活動を取りいれ
そのスタイルを教えだが、より一層工夫した係活動を作りあげていくために
8つの係を2つまで担当してもよいことに(したがって係のない班もできる)
立候補した班に方針を言わせ決めた。

発言のしかた

ぼくは〇〇だと思います。 みなさんはどうですか? ぼくは〇〇と思います。 それは〇〇だからです。

結果的には、ひとつの班が係をとれず、5月末給食係を新設し担当させた。

ある班長から、「A君は、そうじはさぼるし話も聞いてくれない。私ではとてもめんどろがみれないから、B君の班にひきとってほしい」と申し出てきた。このことで、はじめて班長会をひらきどうしたらよいか話し合わせた。A君をB班長の班にひきとってもらうことになったのだが、班長2人に学級会で提案させた。その後数回同じようなことが起きた。

「無言清掃」(学校週目標)を学級で点検させる。班長が班員に指示したのと、無駄口と混同して点検したため、日直班総スカンをくった。それ以来とげとげしくなり、班のいがみあいが続いた。

<第3次班> 6月17日

ア、班づくりの方法

第2次班の班長、係活動が良かったかどうか項目ごとに評価した後、第3次班班長選出。班長が引き抜き班編成。引き抜く人が重なった時、話し合い(じゃんけん)で決めた。

男女混合班……6 男子4人班……/ 女子4人班……/

座席は班で話し合いで決めさせた。

イ、第3次班で何をねらったか

- ・班ノート、班長ノートをとりいれること
- ・1日全員発言をめざす(ひとりひとりを学習にとり組ませる)
- ・少しずつバズ学習を取りいれていく
- ・学習規律の強化(席につき+用具の準備、学習にとりかかる)

ウ、経過

班編成の方法は、「過去2回、先生が作ったが、そろそろ君達の手で作っ

班長会
話し合い
じゃんけん
無言清掃
無駄口
混同
点検
総スカン
とげとげしく
いがみあい

てみないか」に答えて、この方法を決めた。第2次班で班をかきまわし他班へひきとられたA君、M君、それに孤立気味のOさんなど最後まで余らされ、ひきとり手が無いのではと心配したが、A君はノ巡目に、Oさんは2巡目に、M君は「ふざけたり、いたづらをしない」を条件に、いずれも女子班長にひきとられた。後に、A君をひきとった班長に「よくノ番先にとってくれたね。どうして？」ときくと、「A君は生き物がとっても好きで、し育係をやるのにいいから」と言う。第3次班におけるA君は、アリの卵をとってきては、「みなさん！かんさつしてください」イモリを持ってきて、「これは何か知っていますか」などと生き生きした行動をしめした。

— 班長ノート・班ノートより —

わたしは、歌係をとろうと思って、しきのじょうずなO君、O君、声の大きいOさんを取りたいです。 (N子班長ノート)

わたしは、しっかりしたY班長にとってもらってうれしいです。
(7班班ノートより)

ノ日全員発言をめざし、発言カード 資料3 を机にはる。

— 発言カードの記入の仕方 —

挙手した時……○

発表した時……●

挙手の印○が5つにつき……●にかわる

主に、国語、算数、社会で使った。目にみえて、挙手する児童は増えた。(アンケート調査によれば、34人中30人は○・●印をつけようがんばったと答えている。)

しかし、発言内容をみると、質の低い発言、同じ発言、似た発言のくり返しで学習が停滞する時もあった。

バズ学習をとりいれたといっても、底辺の児童にみんなでとりくむ全員参加というねらいから、簡単な計算技能の理解や練習、漢字練習などの教材においてである。班長の司会もその都度指示した。指名する時は「○班は全員手があがっているから、○班」「○班はいっしょうけんめいやっていたから、○班」などと、態度的な面を評価した。にもかかわらず、姿勢が悪くなったり、他事をしたり、取り組みが甘くなるので、反応器を班にノ個与えて、競争をあおった。

5、まとめと今後の課題

学級の中に、「やる気に満ちた明るいトーンをきづく」をノ学期の目標として班をつかって学級づくりをすすめてきた。足の悪いY子さんが、鉄棒ではじめてさかあがりのできた時のみんなの拍手、Oさんに筆算をわからせようとして班で授業後勉強会をしたことなど、担任としてうれしいことが何度もあった。

係活動は、歌係・学習係・新聞部など、創造的文化的な面でも意欲的な展開ができた。この明るいトーンは、間違いをおそれないふんい気を作り、少なからず、参加度の高まった授業ができる基盤になったように思う。

この基盤の上に、またこの基盤をみなおしつつ、バズ学習づくりをおしすすめている昨今である。

二学期になって

- ・発言の質を高めること
- ・発言が横につながるようにすること
- ・バズ学習を多くとりいれていくこと

上記のことをねらって「発言のしかた」に次の項をつけ加え、その徹底をはかっている。

人間関係を大切にした学級づくりであったのだが、点検がただ管理的であったためか、班競争の弊害か、班のいがみあいをはきおこしたにすぎない点もあり、班ノートのこまめな利用などをはかって実践をすすめていきたいと思う。

—発言のしかた—

ぼくは、〇さんにさんせい（反対）です。そのわけは…だからです。

〇さんにききます。どうして…ですか。

〇さんの…はいいのですが、…は反対です。そのわけは…だからです。

資料1 第1次班を作った時のメッセージ

3年2組 9番
 名前 丹下 綾子
 先生からひとこと
 ピアノがとてもしょう
 ずなんだって! 一度き
 がせて下さい。

資料2

- | | |
|----------|-------------|
| 朝の会 | 帰りの会 |
| ・あいさつ | ・係から |
| ・朝の歌 | ・係へ |
| ・けんこうしらべ | ・よかった
こと |
| ・係から | ・帰りの歌 |
| ・先生から | ・先生から |

資料3 発言カード

発表カード

名前 濱脇 輝喜

時	1	2	3	4	5
17日 月	国	算	字	社	理
18日 火	音	国	体	休	算
19日 水	国	道	音	社	理
20日 木	社	社	国	国	国
21日 金	体	算	書	国	学
22日 土	算	理	国		

研究主題

励まし合い認め合う学級集団づくりをどのようにすすめるか

兵庫県姫路市立船津小学校 井 口 盾

要 旨

子供は、あらゆる可能性をいっぱい持っている。伸びる芽を持っている。40人が40の芽を持っており、それをあらゆる方法で引き出させてやるのが教師の務めであると思う。だれもが夢を持っており、目標に向かって頑張ろうとしている。その頑張りに対して、どれだけクラスの仲間が励まし合い、認め合えるかによって、その伸びも大きく、また感激も大きいものとなる。

そうすることによって、子供に思う存分自分の力を発揮させることができるのである。

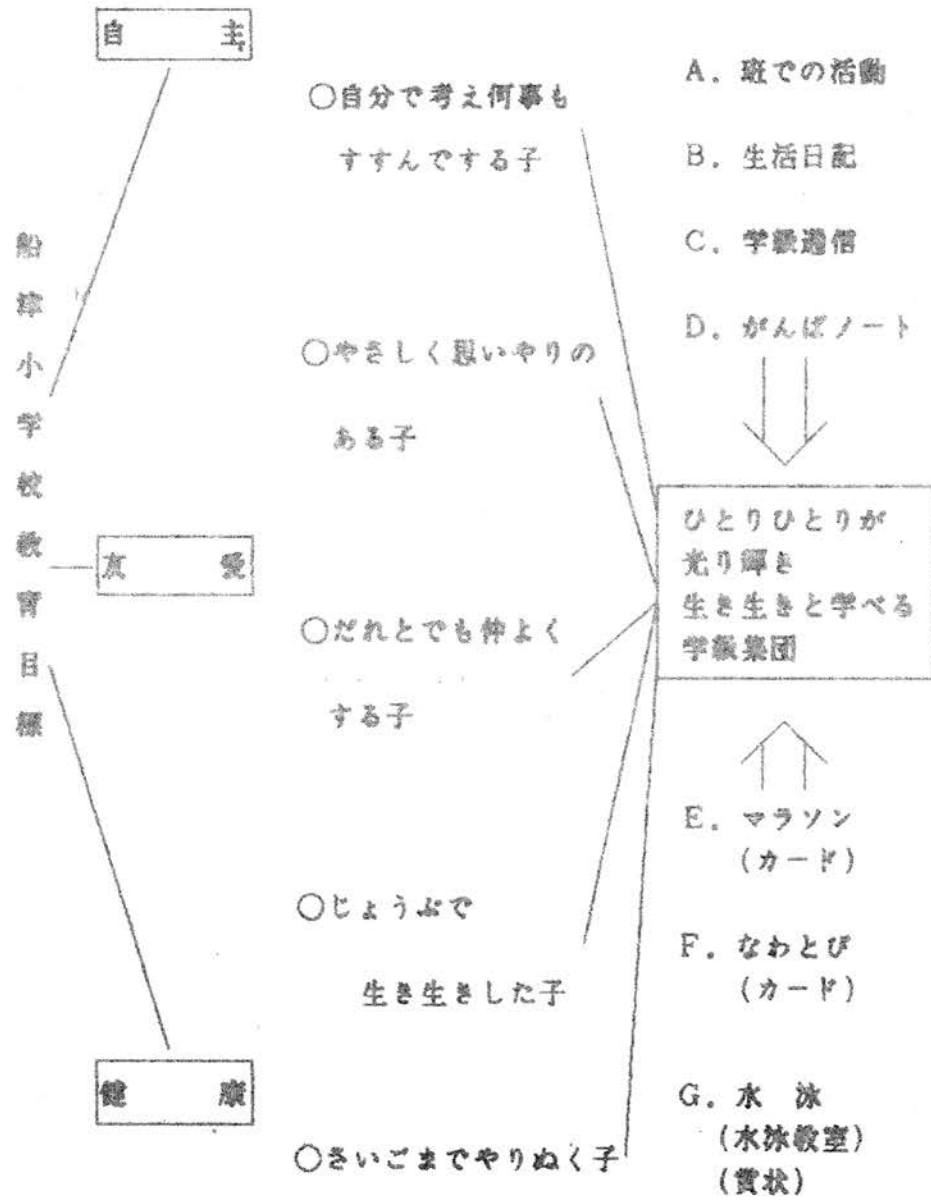
そこで、グループ学習によってお互いに励ましあい、認め合って共に伸びていこうとする学級づくりをめざしている。

研究内容

- ア. 生活日記……1人2冊、毎日提出し教師が返事を書く。
- イ. 学級通信……ザ・ゴリラを毎日発行する。
- ウ. がんばノート…児童の自主学習・毎日点検。
- エ. マラソン……めざせ42.195キロメートルのカード。
- オ. 縄とび……10段階にわけて挑戦、長縄40人でジャンプ。
- カ. 水泳……全員25メートル完泳をめざして。
- キ. 忘れ物カード…個人でチェック。
- ク. グループ新聞…各班で1週間に1回発行。

1. 実践の内容

グループの活動を中心にして



2. 実践例

A. 班での活動

(1)組織づくり——グループ編成 4人の混合グループ

(2)グループに名前をつける

(3)各グループのきまりを決める

(1つは学習の目標 もう1つは生活の目標)

副用紙にかいて掲示する

班 の 名 前		-----ア
メ	学習の目標	-----イ
ン	生活の目標	-----ウ
バ	がんば賞	-----エ
ー		

ア. グループの4人が名前を決める。

イ. 教科の係を決める。

ウ. 生活面で、これだけは守ろうというきまりを考え
学校全体、あるいは学級の中へ目を向け、助け合い
ということがその根本となるような目標であるよ
うにと掲示をする。

エ. グループのきまりが、全員によって達成できた時や
全員発表・助けあい・励まし合って学習ができた
時などにがんば賞としてシールを与える。

B. 生活日記

C. 学級通信 ザ・ゴリラ

○毎日全員の子供が日記を書いている。その内容は学級通信ザ・ゴリラによって紹介し、みんなに広げていく。また、テーマを決めて書かせたりしている。学級通信には、子供から募集したイラストや、生活日記の中で問題とされた事件などもとりあげ、話し合いの材料としている。

○どの子がどんな悩みを持ち、どんなことに困っているか、クラスの中でじっと耐えて心で泣いている子はいないか。この日記を通して、真実をつかみ1対1の意見交換をし、助言や励ましの言葉をできるだけたくさん与えている。みんなに聞いてもらったり、知ってほしいことがあれば、即、次の日の学級通信にのせて、学級会や学級指導の時間で話し合いをしている。

D. がんばノート

○いわゆる家庭学習ノートである。その内容は予習であったり、復習であったりする。自分の力に合わせて、自由にすることをたて前としている。

(例)

- ・その日の授業中にどうしても解けなかった問題
- ・なぜそうなるのか わからない問題
- ・練習問題
- ・新出漢字の練習
- ・テスト調べ
- ・お料理教室
- ・新聞の切り抜き

E. マラソン

F. なわとび

- 1人1人が自分にあった目標を立て、それに向かって頑張る。くじけそうになったときなどお互いに励ましあって全体の体力向上をめざす。
- なわとびは高度な技術を持った子供が、その班のリーダーとなり、他の子に跳びかたを教える。班全体のレベルアップをめざす。
- 終わりの会で、その日の記録の報告をしあい、励ましあったり、誉めあったりする。

G. 水 泳

- 全員が25メートルをめざして、プール開きの日よりがんばった。毎日水泳時間の最後にその日の泳力検定を行う。その際にプールサイドからは励ましの声援と拍手を送る。はじめて25メートル泳げた子には全員で喜びをわかちあう。
- 夏休みに25メートル未満の子供を対象に水泳教室を行い、全員25メートル達成した。

3. 今後の課題

相手を認め励ましあっていくことによって、1人1人は意欲を持って学習に臨み、グループの一員としての責任を果たすことによって、学級全体の向上にむけての成果があらわれてきたようである。しかし、約束事や決まりがどうしても守れない場合において、励ましだけでは解決できないことがある。

第6分科会 学級づくり

生き生きとした 心のかよう学級集団づくりをめざして

兵庫県姫路市立城北小学校

柳 内 翠

24

要 旨

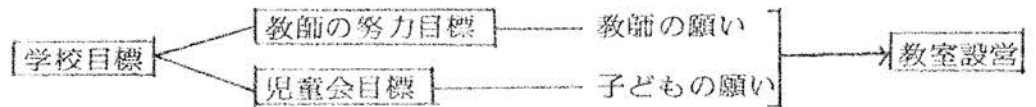
学級の子どもたちみんなが、生き生きとして学習し、友だちと助け合いながら
係活動に励み、校門を出るとき「楽しかった！」と、満足して帰っていく。
そんな学級でありたい。

最近の子どもたちのようすを見ると、自己中心的な考えや、衝動的な行動が増え、言葉づかいも礼儀作法も乱れてきている。この原因は家庭や社会の影響も大きいですが、学校での人間関係が影響しているようにも思える。高学年になるにつれ学習結果にこだわったり、生活基盤が「競争」意識につながって おのずと友だち関係がくずされていくような気がする。

学級内の人間関係を望ましいものに育てるには、子どもと子ども、子どもと教師の心のふれ合いを大切にして、学級集団を計画的に協力し合える組織にしなければならぬ。

研究内容

- 1 望ましい学級集団をつくるために だれもが目標をもつこと。



学校目標

知・徳・体の調和ある発達をめざして

- 1 きまりを守り、正しく判断して行動する子の育成 (道徳教育の深化)
- 2 自ら考え、根気よく学習する子の育成 (基礎学力の充実)
- 3 助け合い 支え合い 協力して実践する子の育成 (望ましい集団づくり)
- 4 健康で気力を持ち、最後までがんばる子の育成 (健康教育の推進)

教師の努力目標

1 学級経営と生徒指導の重視

- ・連帯感を持ち、協力し合う集団づくりに努める。
- ・基本的な生活習慣や集団生活の規律を身につけさせる。

2 学習指導の充実と基礎学力の定着

- ・学習指導法の改善に努め、基本的・基礎的な事項を習得させる。

3 人権尊重の教育

- ・人権尊重の視点に立った学習指導をする。

4 教育環境の整備と情操教育の推進

- ・美しい環境の中で、豊かな情操を育成する。

5 体力・気力の養成と安全教育の徹底

- ・自ら進んで体力づくりをはかり、心身の健康を保持増進し、危険から身を守る能力や態度を育てる。

児童会目標

城北っ子 5つの約束

- 1 ごみのない 美しい学校にします。
- 2 友だちに やさしくします。
- 3 笑顔で あいさつをします。
- 4 悪いことは ぜったいしません
- 5 どんなことにでも 力いっぱいがんばります。

◎児童会キャンペーン活動を展開し、児童会を中心に委員会活動を通じて集団生活の規律を身につけるよう呼びかけていく。

教室設営目標

◎児童は大部分の生活を教室で送る。

- 1 教室環境は常に整理され、美しい教室であること。
- 2 教室は担任の個性・感覚・教育観を生かす場である。
 - ・固定したものを少なくする。
 - ・変化や動き、積み重ねのあるものを掲示する。
 - ・見えるものを 見えるところに置く。
 - ・見たいものを 見られるように配置する。

- 3 座席づくりは、人間関係を高める大切な役割を果すので慎重に編成していく。

子どもと共に計画的に設営して創りあげていかねばならない。

2 認め合う集団づくりのための手だて

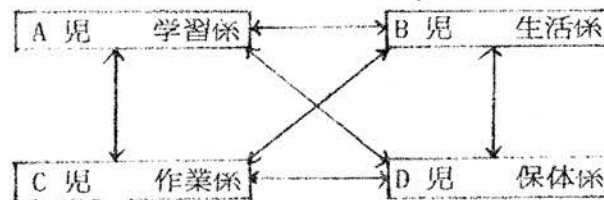
できる子もできない子も、能力の高い子も低い子も、健康な子も病弱な子も障害をもつ子も みんな仲間として高まっていくために小集団を構成し、バズ・セッションを用いて 学力を伸ばすことと、人間的なぬくもりのある人づくりをしていく。

しくみづくり

1 グループの編成

- ・個人が活かされると同時に、集団そのものが活かされるよう配慮する。
- ・グループの編成法を考え、固定しないで、目的に応じた編成をして お互いの持ち味を生かしあう。
- ・同じテーマ 同じ考えの者が臨時にグループをつくり、話し合ったり作業をしたりする場合もつくる。
- ・同じ内容を各グループで検討する場合もあれば、グループ単位で分担して違う内容を検討する場合もある。

◎ 4人グループの場合



リーダーを配分した等質グループであるが、主従関係にならぬよう一人一役を話し合いの中で決定していく。

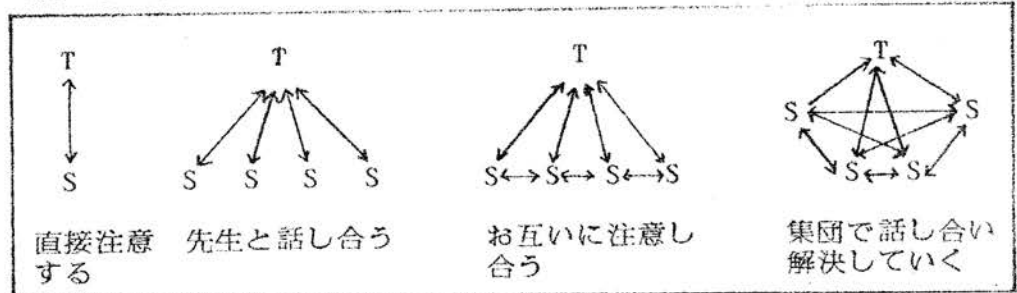
構成人員 2人 4人 6人 8人

- ・能力別に編成する。 (体育学習など到達度の確認)
- ・好きな友だちと希望して編成する。 (遠足等)
- ・偶然となり合わせになった人と (学期始めの友だちを知らない時)
- ・ソシオメトリックを活用して (アンケート ケス・フーテスト 日記等よりきらいの感情などかくれた集団構造をとらえていく)
- ・教師の意図で (児童を理解するために、充分観察し等質グループをつくる)

よりどころづくり

- 1 お互いが支持し合い 認め合っているようコミュニケーション出来る場づくりをする。

例 忘れ物の多い子や係の仕事をなまける子を変えていくために



- ・自分の分担に責任をもち、相手に負担をかけない子を育てる。
 - ・お互が自分のまちがいを修正しあい、謙虚に自己変革をしていくようすすめる。
- 2 全員が自発的に学習に参加するような指導形態をとる。
 - ・グループ学習の約束 しつけは 学習の中でつくり上げていく。話し方、聞き方、発表のしかたは相手の立場を考えて、対人法 輪番法をとる。
 - ・学級のひとりひとりのつぶやきを大切にする。個々の子の意欲を高めて、さまざまな本音を出し合って 協力しあって学習していく。相手も自分も生かされる学習を・・・。
(情操的教材で協同的表現をさせる、協同的創作をさせる)
 - ・子どもの中から生まれてきたものは子ども同士で解決させていく。生活経験のない者は手順を知らないのだから子どもと共に相互に学びとらせてつくりあげ、話し合いのルールをきめていく。
 - ・発言は表情豊かに、他のグループの良さを学ばせる。

グループ活動に期待すること

- 1 小人数で活動すると、発言の機会も多く 当事者としての責任を感じるようになる。
- 2 他の考えを聞くことにより 自分の考えが意識化され自分が話すことで組織化される。
- 3 自分を大切にすることが どういうことか体得されてくる。
- 4 学習効果をあげるだけでなく 無だ口や依頼心がなくなる。

3 実践と問題点

6年生は体も大きく、話すことも大人並みになって全校生の世話もよくするし、校外では子ども会や通学班の班長として指揮したりして小さな青年という感じがする。しかし、大人の干渉をきらったり、わかっているつもり、考えて行動しているつもりが 規則を破ったり、相手を傷つける行為や責任のがれの行動をとったりすることがある。

「友だちを大切にしよう。」「思いやりの心を持って行動しよう。」と、一生けんめい培ってきたはずなのに、いつのまにか教師と子どもたちとの歯車がかみ合わなくなって、今までうまくいっていたはずのそれらのことが単に形式だけの組織になってしまっていてがっかりすることがある。子どもの点検活動のあまみや力量不足に悩まされる毎日である。

生活の場で起った問題点

- 1 H 子の帽子だとわかっているのに拾ってあげようとしない F 子
- 2 重い机を一人で運んでいるのに 責任箇所の掃除がすんだので手伝うこともせず ぼんやりそれを見ている T 男
- 3 T 子と仲よしになったおとなしい性格の S 子が T 子がたびたび I 子の悪口を言うので つい自分も一緒になって言ってしまった。I 子と仲よくしていたのに 今は気まずくなってやりきれないと日記で訴えている。
- 4 K 児・ M 児は読書好きで暇さえあれば本を読んでいる。作業班のグループ編成をすすめる時 みんな互いに自分と相手の気持ちを確かめ合いながら班編成をしていくが、彼らは それを全くやろうとしないで人数不足の班へもぐりこんでしまう。だから 結局、仲間と協力して行動することが少なく 浮きこぼしになってしまう。

学習の場で起った問題点

- 1 話し合いに参加せず、自分だけ先にやろうとする Y 君
- 2 知恵が遅れて 参加がむずかしい I 君
- 3 話し合いを ひとり占めにする F 君

- 4 自分で考えたり やろうとしない H子
 - 5 すぐに他の話にそれていってしまう E君
 - 6 人のまちがいや 失敗を笑う A君
- 数えあげればきりが無い。

すべての班を同時に指導することが不可能なので、作業班などの活動は各班の構成員の活動にまかせる時間もかなりある。

そのため、構成員のいかんによっては作業効果にも差が出来てくる。

これらは、学習以前の子どもたちのかけにかくれた内面的なものが表面化したものであるから 人間教育（人づくり）を考えて 自分自身の指導力を高めていかねばならないと反省している。

4 おわりに

ひとりひとりの子どものもっとの姿を知ることは容易でない。

彼らの悩みや 問題のほりおこしをするために 彼らに生活ノートを持たせ児童理解につとめている。1日5行の日記であるが毎日書き続けるとうそは書けなくなる。

集団の中で厳しく接しすぎた時「いやみばかり言う先生だ」と批判的な文章をよこす。そんな時は、自分も謙虚に 朱書きでわびを入れていく。百の説法より 生活日記を通して交わす一言の方が子どもたちの心が開いていくように思える。

「教師は児童の鏡である」ことを心にとめて 今後も43人の子どもたちがそれぞれに自己実現できる場を設け、個からグループへ グループから全体へと適応できるよう願って より一層の精進をしていきたい。

個を認め個を生かした学級づくりをどのようにすすめるか

兵庫県 姫路市立書写中学校 佐野正和 22

1. はじめに

本校は、姫路の市街地北西部、西国第27番目の札所、書写山円教寺のふもと旧曾左小学校の校舎を使って姫路市27番目に開校した学校で、本年3年目を迎える。学級数は、1学年9学級(399名)、2学年9学級(401名)、3学年9学級(366名)、計1166名、教職員47名である。

開校以来3年間、どのような計画・実践で学校づくりをするかが最大の問題であったが、漢詩の起・承・転・結・構成を頭に計画実践して、それぞれを1年くぎりとして4年をかけて書写中学校づくりに望んでいる。

すなわち、「起」は、ことのおこしで、書写中学校開校/年目の基礎・基本がためとし、古くて新しい学校づくりの基本は、生徒の生活の実態・地域社会の特色をはやく知り、生徒の心に食い入るカウンセリング技法を持って共感を得、書写中学校生徒があゆむ大道をつくることであり、教育の根幹を生かした教育目標塔を生徒の心にかにうちたてるかを課題とした。「承」は、起を受けて2年目の歩みにおいて、人づくりの体験学習と教育目標の生活化を目指し、木・根を生徒にたとえ、教師はよい土壌となり、よい肥料(生身の模範)となれることを約束ごととした。つまり、「成長を欲するものはまず根を確におろさなくてはならぬ 上にのびることのみ欲するな まず下に食い入る事を努めよ」、「根のためには できるならば地の質をえらばなくてはならぬ 果実のためには できるならば根を培う肥料をえらばなくてはならぬ」という書写中学校教育の根幹のもとに、土づくりは人づくり・自分づくりの生きた体験学習であることを、徹底して、正確に、くりかえして実践、生身の模範をもって感じとらせ、明るい人間関係の樹立のための教育目標の生活化をはかり、教師の内面へのきりこみのきびしさを課題とした。「転」は、3年目を歩む書写中学校の教師に課せられたものは、きめ細かい観察力とそれを生かすやさしさの中に、よりきびしさを加え、教師が先頭に立って模範を示しつつ昨年以上に子どもたちの心を変えることに全力を出した。

開校当時より、各教師がそれぞれに学習効果をより向上させるべく前任校での技術と経験をもとにスタートし、現在「個人学習と集団学習」、「個人の発達と集団の発達」、個人差に応じた基礎学力を一時間の中で、どこで定着をはかるのかの研究にとりくんでいる。また、開校当時から4、5名の教師が、全国バス学習研究集會に参加したり、先進校を視察し研究を積み重ねている。その結果、今では朝学活、終学活においては、生徒たちが会を進め、学習も相互に影響しあい、支えあって、自己点検や自学自習が行えるようになりつつある。

2. 本校のとりのくみ

—— 心のある人づくりにかける ——

(1) 基本的生活習慣の確立を目指した「三づくり」

(i) けじめづくり

無気力・表裏がある、友だちのよくない言動を見て見ぬふりをさせないけじめ、つまり、教師と生徒との関係を図り、集団生活としてのけじめをつける。

(ア) 目的目標を追求する能力・態度の育成。(何をさせるか、何をしがっているか)

(イ) じっくりと目的目標にとりくむ資質の育成。(結果より過程重視)

(ウ) 目的目標にとりくんでいる自分を客観視できる資質を育成。(相互協力・相互作用)

(ii) 学級づくり

個々の生徒が認められ、役割が十分に生かされているか。また、クラスの成員が学級としてまと

まっているか。道徳観、価値観が正しく育っているかを点検・育成する。

(ア) 認め合い、支え合い励まし合う。

(イ) 教師と生徒間の好ましい人間関係の育成。

③ 授業づくり

生徒の心をくみとる努力、授業をどのようにかえていくかを研究して落伍者をつくらぬ教育をすすめる。すなわち、学習過程をとおして学習訓練を行い、たすけ合う学習・自主性を育てる学習・過程を大切にする学習をつくる。

次に書写中学校教育の根幹を受け、人づくりのたとえとしての「土づくり運動」(体験学習)を行っている。

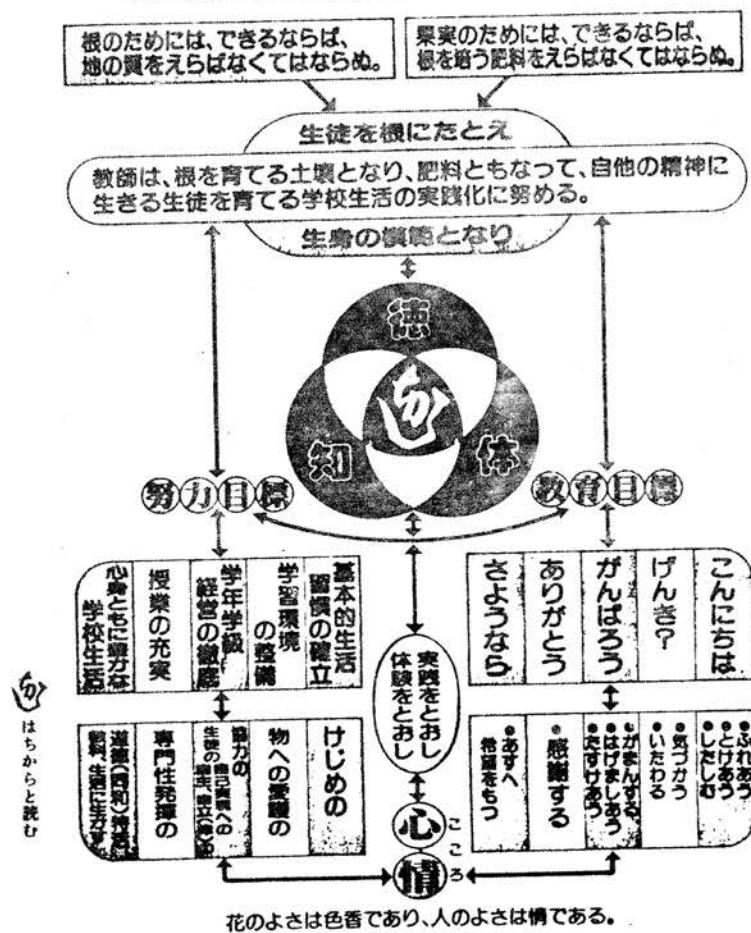
※花づくりは立派な土づくりが基本である

※土づくりは立派な花づくりである

※上づくりは伝統ある学校づくりにつながる

※土づくりは人づくりである

和辻哲郎博士著書(偶像再興)樹の根のこぼ



(2) 本校の校訓

「自律」「創造」「実践」

21世紀に生き21世紀の指導者として活動してくれる今の生徒たちにこの機会を生かし、立派な人間像をかねそなえてもらうために心のこもった、内容のあるものへ、味のあるものへと変えていきたい。

- ① 創造性（独創性）豊かな人づくり
 - ② 専門性をもった特色のある人づくり
 - ③ 心あたたかい人の気持ちのわかる思いやりのある人づくり
- (ア)心のこもった内容のあるものへ、味のあるものへと変えていきたい。
 (イ)形からはいり、あたたかい心が加わった新しい教育目標たらしめたい。
 (ウ)いつの時代にも欠かすことのできない基本を身につけ、愛される人づくりにかけたい。

(3) 学習指導法

わかりやすい授業、たのしい授業、きびしい授業、先生ありがたのびる声が聞える授業の実現をはかりたい。それがため、基礎・基本となる学級生徒個々の長短、その特色をよく理解し、心豊かな人間関係が生まれ育つ学級経営を心がけなければならない。

「教師が教え、生徒が学ぶ」という原点より、学び、学ぶ側からみた授業の展開、つまり、バズ学習が大切である。また、生きがいを感じる授業、目標、役割を考えさせる授業の展開を確実にくりかえし徹底して、心にかけて、声にかけて、手塩にかけて（三かけ運動）機会あることに指導しなければならない。

生徒たちが活発に自己の考えや意見を出し合い、はっきり言え、そして、価値葛藤し、わからないところを教え合い、協力して課題の解決にあたる。

- ① 他人に教えるということは、自分にとってこの上もない効果的な復習の機会となる。
- ② 学級全体のレベルが向上しなければ、自分のレベルもほんとうに向上したことになる。

3. 学年としてのとりくみ

生徒たちがどのような社会に出て立派に生きていくための体力・精神力・学力（「ち」）を培いたい。そのためには、自分の体・知・徳の「ち」を十分に発揮し、耐える「ち」が必要になる。そこで、毎週学年の目標を定め（資料/参照）「0からの出発」を合い言葉として行い、生徒は家の宝であり、地域の財産であり、学校の顔であることを自覚させ、「自律」、「創造」、「実践」が自ら実体験できるための方途を共に工夫し指導したい。

(1) 学年の教育目標

望ましい学習集団の形成（学級経営）

- ① こまめな触れ合い、温かい血のかような心の触れ合い、丹念な会話による個別指導の徹底。
- ② 係活動、班活動、清掃活動をとおして、自らのやる気、学び方の習得、価値判断の育成を教師の生身の模範（モデル）、すなわち共感共汗から導くことと集団の一員としての役割、責任、共に語り、共に汗して、共に協力することを体得させる集団指導の徹底。

本校の教育目標「さあかけっこ」〇んにちは、①んき、②んぼろう、③りがどう、④ようならを受け、学年の目標を「ごおあしす運動」とした。

〇くろうさまです	〇めんなさい
①はようございます	②ねがいます
③りがどうございます	
④つれいします	⑤つれいしました
⑥みません	

つまり、素直な心をもった生徒を育てるための努力をはらいたい。また、生活面においても「ちりひとつない教室」をめざして、

「土づくりは学級づくり

花づくりは学年づくり」とした。

学習面においては、終学活の際に「も学習」のシートを各学級の委員長が配り、生徒は各自家庭で問題を解き、翌日の午前8:15~8:25の学活の前に委員長によって解答が配られ各自で点検、確認をしてファイルしている。この「も学習」は、教師が見まわって指導することなく、疑問やわからないところについては、遅々たるものであるが各班で解決できるようになってきている。そして、生徒たちがわかりにくいところについては、各教科担当の教師が授業中、あるいは放課後に質問時間を設け指導にあっている。「も学習」は、本校独自のもので、生徒自らが自発的に学習にとりくむためのひとつの手法として導入した。

この「も学習」の特徴は、終学活において、その日の解説シートを各クラスの委員長を中心に配布し、まず、解説シートのうち生徒個人がわからないところ、わかりにくいところを班活動（学習バス）においてそれぞれに点検し、問題シートと解説シートを家庭に持ち帰り各自の課題とするのである。翌日、午前8:15~8:40の間に生活バスを含め各個人で、または班で解答をし、自己点検票に自分自身のできた度合いを記入している。この学習活動により、今までできない、わからないといった生徒が非常に真剣に学習にとりくむ姿勢が芽ばえ、学業も伸びてきたのではないかと考える。

ここまで指導・定着させるためには、各クラスの委員長や班長の責任ある行動が非常に大切であり、教師との一致した指導方針が重要なウエイトを占める。今後は、「も学習」を続けて行く中で、学習する喜び、楽しみとともにつらさ、きびしさを実体験させながら学ぶ尊さを育てるように努めたい。

4. 学級としてのとりくみ

「も学習」を通しての学習バスにより、自学自習の習慣をつけるとともに「も」ある生徒を育てるためには学習面だけでは片手落ちとなる。そして、「人間としてよき人」といわれる者は、自己の損得だけを考えるのではなく、奉仕する心（+αの精神）が大切である。すなわち「21世紀に生きる生徒」を育てるためには、学習バスを通して生活力に優れた生徒を育てなくてはならない。

（1）昨年度（7年4組）のとりくみ（昭和59年度）

「21世紀に生きる生徒」を育てるための合い言葉として、「マルゴメみそより、ひと味がうたケヤみそになろう」ということをい続けた。すなわち、学校生活に「他の人よりも自分はこういところをがんばっている」という誇りをもち、今それが表面に現われなくても2年後、あるいは年々「タケヤみそ」になれるように努力していくというものである。

次に、「タケヤみそ」になるためには、まず自分の意見を持ち、友だちの意見をしっかりと聞く必要がある。そして、いくら立派な意見であっても、みんなに聞いてもらえ、考えてもらわなければ何にもならない。そこで、「発言の約束」、「聞き方の約束」を決めた。

— 発言の約束 —

「ゆっくり、はっきり、最後まで」

1. 意見があるなら手をあげて

2. ゆっくりと、みんなの方を向いて

3. 結論を先に、理由をあとに

4. 同じ意見でもくり返して

5. 話の終りには、「～です。」「～と思います。」「どうですか。」

6. 反応があったら指名する

7. ふだんの発言の少ない人を指名しよう

— 聞き方の約束 —

「だまって、メモして、考えて」

1. 話し手の方を向こう

2. 気づいたことは、だまってメモしよう

3. しっかり聞いて話題をつかもう

4. 相手の意見を尊重しながら自分の立場を明らかにしよう

5. 意見には必ず反応しよう

「～に質問します」「～につけたして」

「～の意見について」「まとめると～だと思

います」「話し合わせてください」

しかし、集中力がなく、落ち着いたところも見られないため、2か月あまり達っても徹底しなかった。5月に転校して来たT男は、「先生、そんなに急にできへん」といったりした。しかし、/学期末には立派に発言ができるようになり、聞けるようにもなった。

次に、背面黒板の上の壁面の活用。幅35cmの鉄板を4枚貼りマグネットで取り付ける 掲示板を自作した。これは、美術係や国語係などの依頼によって掲示係が作品を掲示した。そして、必ず全員の作品を掲示するという約束を決め、自分の作品と他の人の作品を比較する場とし励みとするとともに、自分の作品を掲示してもらった満足感・充実感を与えるものであったが、積極的に作品が提出できるようになった。また、自作掲示板を壁面に取りつける時も、取りはずす時も「僕もやらせて」と数名の者が申し出るほどになった。

以上は、生活パスとして実施し、基本的な生活習慣が自分たちの手で、班で確立するきざしを見せた。学習パスについては、生徒個々人のAAI (Academic Adjustment Inventory 教研式新学習適応検査)、PUPIL (Prediction and Understanding of Pupil's Inner Life 教研式) などを使用し、個々の生徒のもっている不適応状況を知る手がかりとして、それぞれの班の中で、それぞれの任務、責任が果たされるようにした。

(2) 本年度(2年5組)のとりくみ(昭和60年度)

「うれしいな」、「よかったな」、「いい気分だな」と思ったり喜んだり充実した気持ちになるのはどういう状態におかれたときか。それは、自分の力を思いっきり出し、受け入れられ、認められた時である。つまり、生徒一人ひとりが主体的・意欲的に学習にとりくむためには、学習集団そのものの基盤の確立が何よりも大切になってくる。わからないことがあれば、それを「わからない」とはっきりいえ、その疑問をみんなのものとしてとらえ、みんなで解決していく過程でこそ個人が集団と結びつき一人ひとりが進んで学習に参加できるようになる。すなわち、学級内において自分の意見をしっかりともち、その上で他の者の意見や考えから学びとろうとする姿勢やつまずきを教えあえ、励ましあえる人間関係からこそ望ましい自己実現が行えるのである。

一方、学級集団は、親和—反発の感情により多様な人間関係により成立している。また、集団の構成員が互いに影響を及ぼしあって学級特有の雰囲気や芽ばえてくる。つまり、「類は友を呼ぶ」とか、「似たもの同士」といわれるように、生徒たちは自分と似た特性(性格、能力、態度、趣味、性など)をもつ他者に対して、好意的態度を抱き友人として選択したり、依存性の強い生徒や支配性の強い生徒が自分と同じような仲間を友人とするよりも、反対の特性をもった生徒を仲間にしていくことが多い。

そこで、生徒間の親和—反発関係を調べるために、ソシオメトリック・テスト(資料2参照)を行い班編成を行った。

— 方法 —

- ① 班の規模は5名の9班とする。(教室の広さ、生徒数による)
- ② 男女混合の異質集団とする。
- ③ 各班ともおおむね等質集団とする。

— 手順 —

- ① ソシオメトリック・テスト(友だち調べ、資料2参照)によるソシオマトリックス(資料3参照)の作成。
- ② 学業成績を中心としたリーダーとなるべき生徒の配置。
- ③ 問題生徒に対し、気の合う生徒(サポーター)の配置。
- ④ AAI・PUPILによる学習適応性と生徒の内面生活状態などを考慮しての配置。
- ⑤ 男女のバランスをとる。
- ⑥ 学級集団の構成(構造)の分析。

以上のソシオマトリックスに示されているのは、集団の個々の成員間の人間関係、集団への適応状態、集団内での社会的地位が推察できる。つまり、男子生徒においては、女子生徒に比べて集団としての結びつきが弱く、排斥される人数が多い。今後、よりまとまった集団(学級)づくりに取りくみたい。

次に、生徒会委員・学級の係の希望をとり(資料4参照)、委員会活動や係活動を意欲的に行わせた。しかし、希望通りの役に着かせると負担が大きい生徒ができてくるが、この点においては、教師の指導や班員の援助を行いできるかぎり生徒の望む委員や係の内容と方法をとらせた。その結果、集団のために働いているという誇りがもて、生徒個々人が意欲的に活動している。

また、清掃活動においては、「清掃活動の約束」を決め各班ごとに清掃活動担当票(毎日の目標と反省)も班長がつけ、それを美化委員が終学活で全体の反省を行い、「できるかぎり学校が美しく、清潔に、そして、気持ちよく学習できる環境を自分たちの「夢」でつくろう・・・」と細かく役割を分担して行っている。

5. まとめ

生徒個々人楽しく意欲的に学習させるためには、生徒たちに安心感と自由感を持たせ、はきはきと話せる学級をつくることこそ学級全体がのび、ひいては個々人がのびる方法なのである。(望ましい個人は望ましい集団から)

すなわち、教師が強引に生徒を引きずりまわすのではなく、生徒の自主性・意欲を尊重して活動させることが大切である。そのためには、多少の約束ごとやルールが必要になってくるが、その中で、黙視・黙聴・黙考・黙書・黙読して自分の意見を持たせることが大切である。つまり、きびしさを内に求め、自己を磨き、自己をしつたしつ精進しなければならない。より一層、外への充実をはかりながら内に向けて深化・充実をはかりたい。

6. 今後の課題

学級集団における生徒一人ひとりが意欲的に学習に取り組み、係活動を行いつつある中で、生徒たちが自主的に話し合ったことが確実に定着するためには、どのような点に気をつけ、指導すればよいのか。そして、生活バズにより、人間関係がどのように変化し、変化する可能性をもっているのかについて引き続き研究して行きたい。

第7分科会 学級経営

研究主題 個を認め個を生かした学級づくりをどのようにすすめるか。

兵庫県姫路市立白鷺中学校 松盛 清泰

1. 本校のとりにくみ

教育にとってもっとも大切なものは、自分自身をよりよく成長させようとする力を育てることである。学校は、自分を大切にし、他人を敬愛し、人間を大切にする教育の場でなくてはならない。

本校では、昭和53年度からバズ学習を取り入れた授業をすすめてきた。特に、基本的な生活習慣が乱れ、非行の嵐が吹き荒れる中で、昭和58年度からは生活バズを中心としたバズタイムを根本からふたたび見なおし、その反省から学校生活における具体的努力目標をかかげた。すなわち、①自分を大切に ②友人を大切に ③ものを大切に の3つの柱である。自己を高めるために毎日の生活の中で何をしなければならないかが常に確認でき、学年としての目標——学級目標——班目標——個人の目標へと一環性が生まれてきた。生活バズにおいて、目標が明確になり、共通のより高い価値に向けて話し合いがもたれるようになり、充実感の得られる実践活動へと導いていけるようになった。以下に示すのは、58年度から60年度2学期までの学校努力目標である。

58 年 度	自分を大切に ↓ 進んで学習	友人を大切に ↓ 進んであいさつ	ものを大切に ↓ 進んで清掃
59 年 度	心から学習 ↓ チャムの合図で学習 開始 ↓ チャムの合図で自ら 学習	心からあいさつ ↓ あいさつ返事は大き な声で ↓ 明るく会釈大きい声で	心から清掃 ↓ スミズミまでも美しく ↓ 時間いっぱい力いっぱい 美しく
60	自ら学習一歩前進 ↓	あいさつはまず自分から ↓	時間いっぱい心をこめて ↓

活動をとよして学校の努力目標も進歩をとげ、生徒もまた活動をとよして、自己反省と向上への努力を相互の注意・支えあいを柱に、他者からの規制から自己規制のできる生徒へと成長しつつある。

2. 生活バスから得たもの

バスは目標ではない。バスという方法によって目標にせまろうというものである。卒業生が進学後、学習方法でさまざまな困難な場面に出会うと聞くが、その多くが教師のバスに対する認識の浅さであったり、むしろ学級の問題を話し合った生活バスへの羨望であったりする。

ここでは実践上の問題点よりも、本校7年の実践が残した良い面をしるしたい。

(1) 一日の反省ができる

教師側から見ると“自他をみつめる場が与えられる”ということか。形式から始め、それほど進歩したとは認めがたいが毎日のくり返しが定着し生徒は一日をふり返り安定した心になる。半数近い生徒が必要性を感じている事項である。

(2) 生徒相互の理解がかなり深い。

(3) 男女の人間関係が良い。

男子2名、女子2名が対角線に位置する班編成で男女間の話し合いも、とてもスムーズである。体育大会のフォークダンスで全校生がなんのためらいもなく手をつなぐのに驚いた、とは転任されてきた先生の弁。あらゆる場で男女が協力できる。

(4) 学級の問題を話しあえる。

(5) 各人の係としての役割を果たさないと、級友に迷惑のかかることが実感としてわかる。

一人に一つの役割があり、その仕事を果たすことは、一人の人間として

認められ正しく愛されることにつながる。日番の逆定法（日番の反省と同時に、他の級友には事ぶりを評価してもらう）はうまくできている。

(6) リーダーの養成が行える。

一人一役、班の中では必ず責任者となって活動している。

3. 学級の中で本音を出し合えるために

生活バスの型式が定着しはじめると、きまったように問題点がグチのようにささやかれ始める。私語が多い、同じ反省が毎日くり返され進歩がない、本音が出ない等である。相互参観による研修（教師と代表生徒）がもたれても、型式ばかりに目をうばわれ、「バス的心」にふれる話し合いがなされなかったと思う。では何が足りなかったのか、私の反省と課題も含めて考えてみた。

(1) 学級は本音の出し合える守られた空間でなければならない。

教師と生徒との人間関係とよく言われるが、教師は生徒に信頼感を与え、安心感を与えるために生徒の中にはいつつながりをつくる。遠くから生徒を見つめ理解すると同時に、理くつぬきの強さ、大きさ（やっぱり先生やなあ、すごいなあ）を与えてやる必要がある。目標となる価値観がしっかりしており、正しい判断力と行動力のともなう教師が求められる。なれ合いや妥協によって生徒の心をつかむことはできない。

(2) 話の聞ける生徒をつくる。

はじめは、姿勢を正しくし発表者の方を注目するという外見的なところからはいつていくが、級友の苦しさやいたみがわかり、受けとめられる生徒をつくらなければならない。言って良かった、聞いてもらったという満足感がなければ本音は出し合えない。

(3) 根気強く話し合い、解決するための体験をつくっていく。

毎日、同じ反省が出され、同じあやまちが繰り返えされても、そのあやまちをより良くしていこうとする毎日の取り組みを教師とともに積み

重なるべくことが大切である。

- (4) 問題解決のためには、時間にとらわれずきびしい姿勢で取り組むことも必要である。

我々はややもすると問題があっても言わない生徒をせめがちであるが、言えるような人間関係をつくっていないところに問題がある。許せない、ほおっておけない問題を見きわめる教師のきびしい目と生徒の願いにふれる努力が望まれる。

ひつこく問い正したり、全員の意見が出るまで待ったり、時には関係生徒と十分な話し合いをもつこともある。

- (5) '良い班'をつくることが目的ではない。

異質なものがふれ合い、話しあい、考えをたがかわせることによって、お互いの考えが深まり正しい判断のできる個人に成長していくのである。

- (6) 個人の反省を十分におこなわせる。

教師や友だちの目はごまかせても、自分自身はごまかせない。と同時に自分自身は適当にやりすごせても、友だちの目はごまかせない、とも言える。目標をしっかりと持ち、客観的に自己を見つめていかないと、バスタイムは消えていく。評価は〇×式ではなく文章で書かせていく。本校ではバズノートを使用し、各自の反省文をもとに生活バズにはいっていく。

第7分科会

研究主題 全校ぐるみで取りくむ「見つけ、生かし、育てあう」学級づくり

兵庫県姫路市立安室中学校 山本 雅 楽 子

1. バズの歩み

26

昭55 開校 荒れる学校

昭56 変則50分授業 7校時設定 バズ学習の導入 (非行を生み出さない土壌作り)

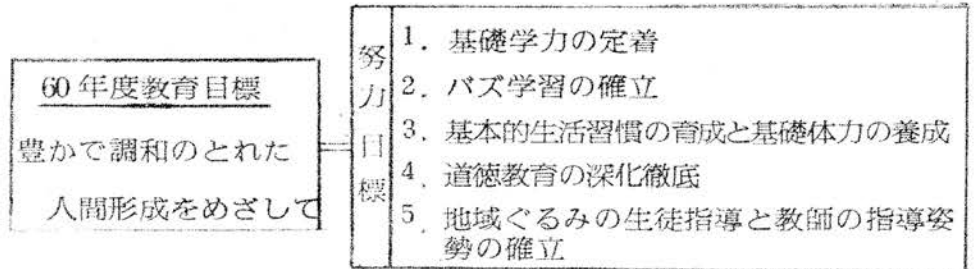
昭57 6校時・終バズと名付け、本格的歩みを始める。

昭58 ◦ 内的追求と外的追求の二面追求 (集団の中における個の確立、集団行動における自己のあり方の追求) --- 図1

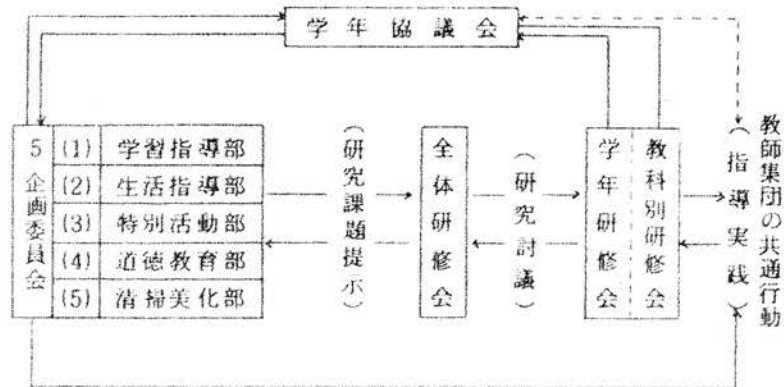
◦ 生徒活動の活性化 (生徒の手による自主運営) --- 図2

◦ 流れの確立 「朝バズ→各教科→終バズ→家庭学習→朝バズ」
「学業日→長期休業日→学業日」 --- 図3

昭59 } ◦ 教科バズの充実 {
昭60 } {
 • 聞く態度の養成
 • 全員役割・全員活動
 • 自主性・自分からやろうとする意欲



2. 研究組織と研修テーマ



昭 56 「バス学習の理論と実際」「学級経営」を読んで

昭 57 「教育は死なず」を読んで

昭 58 一日研修の問題点より

1. リーダー養成の工夫
2. 話し方・聞き方の訓練の工夫
3. 清掃バスのやり方の工夫
4. バス内容を深めるためにどう取りくむか
5. 日目標のたて方の指導について
6. 教科系の活動のさせ方の工夫

昭 59(60) 教科バスの運用について

59. 研 修 レ ポ ー ト よ り 問 題 点	
心 が ま え	◦ リーダーとは ◦ 聞く心とは-----問題意識→探求心→聞く ◦ グループ活動とは-----人間関係向上の場
訓 練	◦ 話し方-----話しあい 発表 ◦ 聞き方-----聞く態度・机の配置
研 修	◦ 興味づけ ・話し合いの中味の深め方 ・課題の与え方の工夫 ◦ 意欲化 ・即時評価のくみ入れ方 ・解ったか否か ・指導過程の研究(本質に迫る段階でのつまずき) ◦ 仲間作り ・支持的風土作り ・班内の能力差、班の等質とリーダー ・個性の伸長とバス学習 ◦ 指導者のリーダーシップ

み	<ul style="list-style-type: none"> ・美化……トイレのスリッパ完全着用 ・美化……トイレルの美化 ・生活……生徒の手による生活点検 ・美化……奉仕活動、無言清掃等 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活……生徒の手による生活点検 ・美化……奉仕活動、無言清掃等
	保護者への啓蒙、町別懇談会、学年総会、反省ノートの活用	
	終バス参観と懇談	

今後の課題	<p>一人一人に自覚を持たせるには</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝バス——家庭学習の確認 ・終バス——学習ポイントを的確に把握 ・明日に生かす点検活動 <p style="text-align: center;">一人一役の徹底</p>	<p>目的意識を持ち活動する生徒の育成をめざして</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明日に生かされない点検活動 ・日目標決定の周期化 ・学習バスノート使用の形骸化 ・委員会活動における時間不足(行事その他) <p>机上添付の一人一目標の活性化</p>	<p>創意工夫を生かし活動する個の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全員が活動する委員会活動 ・班の中の係まで活動させる手だて ・点検のみに終わらせない工夫
-------	---	--	---

★——生徒の反省から——

交流学習会	<p>けじめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・配布のしかた ・机上の整理 ・発表者の方を見て聞く ・司会者の位置 ・手をあけて発言 	<p>内容の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動から活動へ移る時 ・時間配分 ・個人と班の使いわけ ・個人→班→全体の流れ 	<p>学級討議</p>
			<p>1. バスの効果を高めるには</p> <ul style="list-style-type: none"> ・協力 ・はじめ ・皆んなが活動 ・自分にきびしく、相手にやさしく ・反省は細かく <p>2. 話し合いをより有効にするには</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞くことの大切さ(うなずく、笑わない) ・発表しない人には問いかける <p>3. 意義は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教えあう ・集中力 ・クラスのまとまり ・意欲がわく

図1

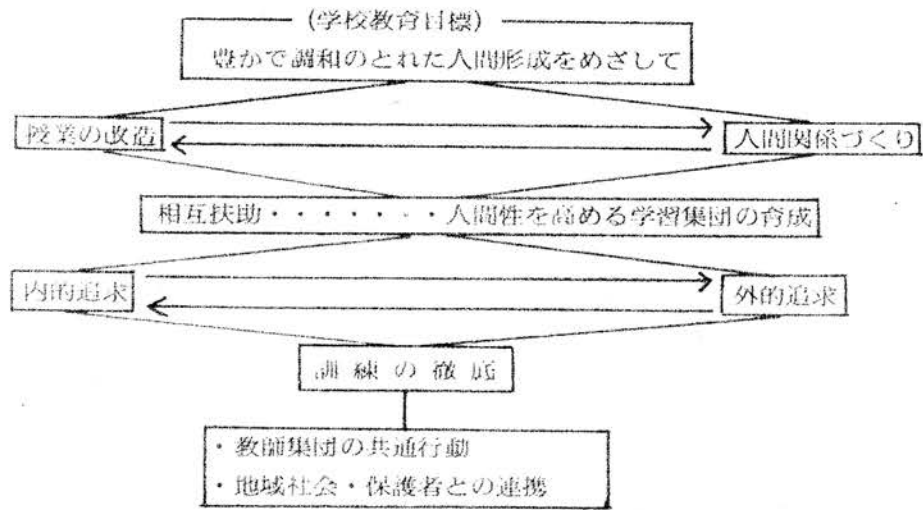


図2

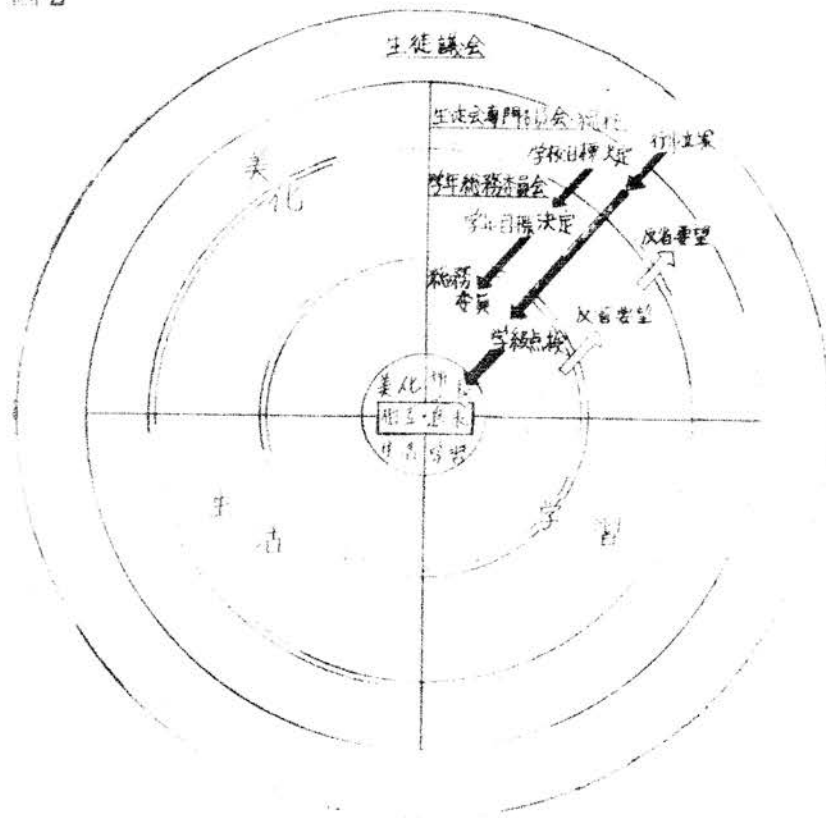


図3

朝 バ ス	
8:15	予鈴・登校・首席
8:17	黙想(音楽) 誓いの言葉など
8:20	朝バス開始(出欠の確認)
	(学 習 バ ス)
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 家庭学習の確認 ◦ 学習課題追求 --- 今日の教科学習のポイントの確認
	(生 活 バ ス)
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 日目標の決定 ◦ 忘れ物調べ ◦ 風紀検査 ◦ 各係からの連絡 ◦ 日目標の確認
8:35	◦ 先生からの連絡(移動)
8:40	第一校時開始

終 バ ス (第六校時)	
2:30	清掃終了・移動音楽
2:35	終バス開始
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 黙想 --- 清掃後、各教室で音楽を聞きながら心を静めて/日の反省をする。 ◦ 黙書 --- あらかじめ背面黒板に書いてある連絡や問目の予定、黙想時に反省したこと等を個人ノートに記入
2:42	(学 習 バ ス)
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ バス教科決定 --- /か2教科を大切なものから選ぶ ◦ 個人追求 --- 学習内容のポイントを整理しながら、理解のあいまいなところを抽出する。 ◦ 相互追求 --- バスリーダーの司会で班単位で質疑応答をする。 ◦ 全体討議 --- 班内で解決できなかったことを学級全体で検討する。 ◦ 家庭学習のプランニング --- 課題確認と計画
3:05	(生 活 バ ス)
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ /日の生活反省をする ◦ 班ノート記入 ◦ 班ノート発表、反省(日目標、清掃、日番勤務など) ◦ まとめ ◦ 話し合いたいこと --- 学級全体への提案、討議 ◦ 各係からの連絡 ◦ 日番の反省 ◦ 明日の朝バスの課題 ◦ 先生からの連絡と指導
3:25	短学活
3:30	帰りのあいさつ、戸締り、下校

研究主題

自主的協力的な学び方を育成し、個に応じた指導をどのように進めるか。

生徒の見方・考え方を広げ深める社会科指導のあり方
— 歴史的分野・自由民権運動の学習を通して —

岐阜県土岐市立泉中学校 磯村 義 幸

1 今、社会科学習が問われているところ

25

最近の生徒を見ていてしばしば思ふことは、概念的で、感動し心ふるわせていくことが少なく、また短絡的にことを判断しがちな生徒が多くなっている。おそらく、それは、私どもの学校だけではあるまい。わりきり易く、立ち止まることなく崩れていき易い生徒を前に、今、各々の教科はいかにかかわらねはならないのか。

社会科は、社会と人間が対象であり、社会と人間とその両者の関係を認識させるところにねらいがある。即ち、その時代、その地域、その社会とそこに生きた(る)人々の(願いや)かなしさ、辛さ、喜びをかかえて生きる)姿をより広く深く見つめさせ理解させることである。

より広く深く見つめ考えさせるには、いかに社会事象にこだわらせるかが鍵になる。複雑さを避け、わりきって考えようとすることが多いのが、今の生徒である。なかなかにこだわり、つきつめようとしない。私たちは、生徒が、こだわりつきつめていこうとする必要感を、どのようにして持たせていくかが大切になる。それには、「よく見つめ(直さ)なければならぬ」という営みをつくり出していくとともに、「学んで良かった」と、学習した自分を確かに見つめていく営みをつくり出していくことが重要である。

つまり「どうも今まで考えていた以上だぞ」とか「どうも今までの見方考え方ではとらえられないぞ」とか「もっと別の本当の理由がありそうだ」…「なるほど、そうか、そういう見方考え方があるのか」と成就した喜びを味わい、「それなら、これはどうなのだろう」と追究し続けていこうとする生徒

の意識を大事にした授業をつくり出していくことである。別の言い方をすれば、生徒が立ち止ま、て自分を見つめ(自分の見方・考え方を問い直し)、より新しい自分(広がる自分・深まる自分、新たな課題を持つ自分)に出会える授業(私たちの学校では「自己評価のある授業」と呼んでいる)をつくり出し、そうして自己充実感を持たせていくことが大切だということである。

2. 社会事象についての見方・考え方を広げ深める為に

(1) ねらいとねらいに迫る手立てを明確にする為に単元の構想図を作成する。

- ・ 作成にあたっては、①分野の求める力を念頭において単元の目標を明確にし、②その時代・その地域・その社会とそこに生きた(る)人々の姿に迫らせる単元の中核となる授業を考へ、③その授業を必然とし、またその授業を生かす単元の指導計画として、構想する。

- ・ 地理・歴史的分野においては、それぞれ、時間的・空間的要素を取り入れた学習をすすめるようにする。

(2) より広くより深く社会事象をとらえようとする意識の高揚をはかる指導のあり方を工夫する。

① 生徒がそれまでの学習で抱いた思いを感情的なゆれを伴いつつ増幅させたり、待たせかけ、課題を喚起させる資料や、生徒の心をゆさぶり視野を広げ深める。そこに生きた人々にふれる資料の開発・提示に努力する。

② 課題に対して 作業学習(調べさせたりメモさせたりする。個別指導の場としても活用する。)やグループバスをとり入れ、自分の足場を確かに持たせ、見方・考え方を鍛える。特に、単元の中核とする授業では、ずれを明確にしたり、明瞭な対立を組織するように心がける。

③ 授業終末において、生徒が自分の見方・考え方の広がり深まりを自覚でき、次への学習意欲が持てるように、自己評価活動を工夫する。生徒自身にそれまでの学習を見つめさせ、それを生かして学習の高まりを自覚させること、更に次を求めようとする意欲をかきたてる方法として具体的に工夫する(私たちは、第3の資料(7)本時で得た見方・考え方をい、そう膨らみ

- も、て確かめられるような新たな資料を、(1)次の新しい課題に目を向けていくような わからなさや期待を持たせるものである (といった観点から選んだり、作成したりして提示する。)とノートにまとめる活動を重視)。
- ④ 学習のつながりや課題意識の膨らみを願い「感想」として毎時間の学習をまとめさせる。

▶社会科学習とグループバスについて……本校社会科では、追究過程でのねりあいの中で、大勢に流されないでほしいという願いから、特に課題が見えてきたところで、一人ひとりに考えを持たせるという意味から、或いは、白地図作業を行うときなどに、バスをとり入れている。生徒は、それについて「何をやるかはっきりするし、わからないことがわかって、考えが持てるようになる」と好感を持っている。

教科内のグループバスを位置づけ育てる為に、特に学習リーダーとバスの進め方について、(I)学習リーダーを集めて、何をどうすることが学習リーダーとして大切なのか、そのかまえと働きについて指導する。(II)学習リーダーを集めて、実験の場合、学習を確かめる場合、課題について考えを深めたり、結論を出そうとする場合に分けて、バスの進め方について指導する。(III)授業の具体的な場で、学級全員に、バスの進め方をB紙等で明示しながらバスを進めさせる。(IV)学級指導で、意図的に設定した授業をふり返らせるながら、位置づけた教科内バスのねうちや改善点について見つめさせる。(V)その場で、直接的・具体的に指導する。尚教科内バスでは、初回巡視をしながら、生徒の質問に答えることを大切にしている。

3. 歴史学習で大切にしたいこと

- ① その時代・その地域・その社会とそこに生きた人々の姿を豊かにイメージさせるとともに、時代と時代の変化・発展をとらえさせる。
- ② 「なせだろう」という思いをかきたてるような必然性のある指導計画や学習過程を工夫し、課題解決に意欲的に立ち向かわせ、課題解決の方法を身

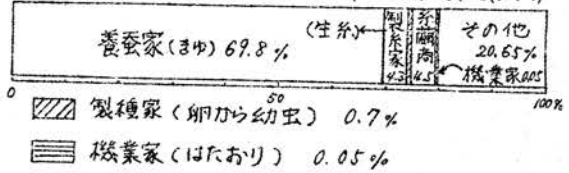
(4) 展開の概要

本時をむかえるにあたり、前時(「自由民権運動の展開」)の終末で、民権運動の末期に各地で大きな事件が頻発したことに着目させた。そして、その代表として秩父事件をとり上げ、事件のようす(いつ、どこで、誰が、何を、どれくらいの規模で)について、年表・写真からおさえた。

(I) 事件についての感想発表に続き、生徒の考えを大切にさぐらせる

T なぜこの時期、秩父の農民がこのような大きな事件をおこしたのか、次の資料をもとに調べてみよう。〈資料①〉 養蚕・生糸関係職業構成 全戸数13,071戸

〈資料①〉から

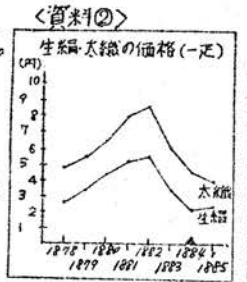


- C₁ 養蚕家が69.8%を占めている。
- C₂ 養蚕・生糸に関係する人が80%も。
- C₃ 年表に、参加者1万人とあったが

秩父全部で1万34戸だから、大部分の家から参加したようだ。

- C₄ まゆや生糸を売って 必要なものを買っていたようだ。

〈資料②〉から



- C₅ 価格を見ると 1881~1882年が一番高く、その後下がってる。
- C₆ 事件の時が一番下がっている。一番苦しくなった時だと思ふ。

〈つなげま〉

- C₇ 秩父の人々の生活を支えていた生糸の値段が下がり、生活が苦しくなったから。
- C₈ 1884年、秩父の人々の生活を支えていたまゆや生糸の価格が下になり、生活に困り、借金も重なり、苦しくなった。どうにもならなくなったのが1884年だ。

(II) 苦しめておこしたのにと考えてきた生徒に、待たせかけ、さぐらせる

T 君たちは、苦しめて、どうにもならなくなっておこした、と言うんやね。もう一つ この事件のリーダーの職業や借金の有無などについて調べた表がある。見てほしい。

- C₁₀ リーダーになるぐらいだから よほど生活に困っていたと思っただけで、皆が皆 困っていない。お金を貸している人もいる。
- C₁₁ お金を貸しているということは 困っていない。
- C₁₂ 生活が苦しいというだけでないようだ。皆、自由党員でしょう。何か そのへんが 関係しているようだ。

〈資料③〉 リーダーの職業や借金の有無など

氏名	職業	借金の有無	備考
田代栄助	農民	借金あり	自由党
加藤謙平	農民	借金あり	自由党
井上伝蔵	生糸関係	借金あり	自由党
菊池貞平	農民	不明	自由党
新井周三郎	教師	借金なし	自由党
坂本宗作	農民	借金なし	自由党
高岸善吉	農民	借金あり	自由党

〈グループバスを設定し、その後 全体で遡究〉

第8分科会 英語

研究主題 自主的、協力的な学び方を育成し、個に応じた指導をどのようにすすめるか。

兵庫県姫路市立飾磨中部中学校 山田 恵美

26

要旨

複線式授業による研究主題の実践

研究内容

1. 導入段階での興味づけと全員参加への一方法
2. 展開時における集団指導と、個に応じた指導
3. 授業への全員参加を目指す班の活用方法
4. 評価の方法

1. はじめに.

銚子中部中学校は、学校数16 (うち特選見学校1) の中規模校である。町中にあり、生徒は全体的に人柄がいいところがあるが、受身的であり、集団行動ができていく、問題行動をもつ生徒も少なくない。

今年、私は、1年生を受け持っているが、全体として、学力的には、差が大きく、授業に参加する意欲を失っている生徒もいる。

本校では、今年から、「複線式授業」というのを研究主題として、学校全体で、取り組みを行っている。複線式授業というのは、集団指導の中に、個別指導を組み入れて、個人の適性や能力に応じた指導を行って、いこうとする授業形態である。授業への全員参加を目指し、個々の生徒の能力を高めていこうとする点で、バス学習と、共通点が多くあると思う。

複線式授業に対する取り組みは、まだ十分なものではない。暗中模索といえるところで、今は、いろいろな方法を考え、試みている段階である。か、どこまで研究主題にせまれるか、1年生での実践を中心に、問題提起としていきたい。

2. 興味づけ.

四月に入學してすぐ時から、1年生にかかわってきて、私自身がこれから授業をしていく上で、1つの大きな課題であらうと思う。どの一つに、学力差の問題がある。今の段階で、すでに、英語がわからないということで、学習意欲を失っている生徒もいくつかいて、授業に参加させていくのはよいのか。

その一つの手段だが、英語に対する興味づけであり、導入段階が1つの勝負になると私は考えている。そのために、私自身が心がけていることは、

① 視聴覚教材をなるべく多く使うこと。② 重要文型の導入にふさわしい場面を設定すること。③ 文型練習がしやすい教材を使うことの4点である。

導入段階で、生徒達が、教師が示す教材にとびついてくると、為期間に学習する、文型の *pattern practice* がやり易くなり、結果として、定着の度合いが高くなるのではないかと、思う。そのためにも、これから一層、教材作り力を入れていかなければ、いけないと考えている。

2. 複線式の授業—集団指導と個別指導

複線式の授業とは、集団指導と個別指導を、授業の中に取り入れて、生徒一人一人の学習能力を高めていくものであると、本校では、解釈しているとは、前に述べたが、形式には、いろいろあって、例えば、レッスンを1つの大きな単元とみなし、課題を与えて、数時間、課題に取り組ませた後、一斉授業をして、まとめるという方法もある。この方法は、中学2年生の後半から、3年生にかけては、可能であると思うが、中学1年生の場合には、少し無理がある。個人で考え得るだけの英語に対する知識が十分でないこともあるが、1年生の段階では、まず英語という言語に慣れること—教師の範読や、テープに耳を傾け、実際に声を出して、何度も繰り返して、言う、いろいろに言い換えていくといった、ドリルの要素を多く含んでいるためである。そこで、試みとして、1学期にやってみることは、1つの part の目標分析を行い、中間テストの結果をもとに、レベル1からレベル3に生徒を分け、各々のレベルに応じて、到達目標を決めるというものである。教師の側としては、到達目標を考えるということで、各生徒を指導していくための目安がかけられる。練習問題も、1枚のアリトに、Step 1から Step 3

までの段階、各レベルに応じたものと考え、レベル3の生徒が、重要文型を口頭で言うようになること、Step1の問題が出来るようになることを中心に、授業を進めていく。口頭練習では、一斉練習の後で、個人練習という形式をとったが、興味づけという点では、picture card を使って、一応は成功したものの、定着度は、レベル3の生徒においては、今一歩というところであった。又、定着しない時のサポートはどうするのかという問題についても、考慮が足りなかった。

さて、今考えていることは、評価の問題とも関連してくるのであるが、目標分析をして、到達目標を決めたものと、プリントにて、生徒に配布し、授業の感想も含めた、自己評価を生徒自身にさせてはどうかというものである。社会科の分野で、すでにこの方法をとられている先生がいらっしゃるが、一度、それを英語でも、試してみたいと考えている。成果については、まだ実践していないので、何ともいえぬが、全生徒と授業に積極的に参加させていく手段としては、有効なものはなかろうかと考える。

3. グループ(班)の活用.

今まで、私自身かとしてきた授業形態は、教師主導型のものである。そのため、どうしても生徒にとっては、受身的になりやすい。ある意味では、授業は、スムーズに行くが、同時に、自分から進んで、学習しようという意欲を育てにくいのではないかと、実際、自分自身の授業進め方の反省にもなるが、教室に座っているだけという生徒がいる。個別練習もするのだが、ほかほか定着していくが、授業に参加する意欲が失われていく生徒を見ることは、非常に辛いことである。何とかする手段ではないものだろうか。

1学期の授業を反省してみ、全員が、授業に参加していく手段として、班を使ってみようと考えている。文型練習、本読み、意味調べ、ノートと写すといったところで、班を活用していくつもりだ。その1

つとして、予習プリントと作ってみた。9月は、体育大会の練習等
が、あって、授業がとんだりして、TJがほか軌道にのらふ状態
であるが、予習プリントをまず家庭でやる、班を促しての答之
合わせとするといったところから、班を活用していきたいと思ってる。
各々の生徒が、授業において、自分の場所を見つけることができ
た時に、はじめて、本当の意味で、授業に活気が出てくると思う
のである。

4. 評価

各生徒が、学習内容をどこまで、自分のものにしているか、ということ
把握することは、指導の上で、大切なことである。では、どのように、
評価していけばよいのだろうか。小テストなどを行うのも一つの
手段であろうか。今一考えているのは、先にも述べたように、
生徒の手による自己評価である。自分自身、どこまで、やれるか、今
の段階では、何ともいえないか、できる限り、やってみようと思ってる。
しかし、評価の出しっぱなしでは、いけないので、評価をもとにして、
何らかのフィードバックの方式を考えなくてはいい。
それも合わせて取り組んでいくことか、今後の私自身の課題であると
思っている。

1. はじめに

ここ数年来、中学校においては校内暴力、いじめ等の様々な生徒指導上の問題をかかえているが、本校もその例外ではない。これらの事例の一つひとつを見るとき、問題行動を起こす生徒はもとより他の多くの生徒に対しても本当の意味でのよりよい人間関係が育っていないと感ずるのである。学級が単なる集合体でなく、そこに生徒相互の働きかけがあり、意図的な営みがあれば、これらのことがもっと解決できるのではないかと思うのである。学級経営の営みは、教師と生徒、生徒と生徒の心の通い合いであり、そういう意味で毎日確実に生徒と接することのできる朝と帰りの短い時間（S・Tと呼ぶ）の活用の意味は大きい。私たちは、単なる連絡の場としてすまされがちなこのS・Tに着目し、その実践を通して、何でも話し合え、助け合えるよりよい人間関係の育成をめざしたいと考えた。

2. 研究の目標

- (1) 小集団を基盤としたS・Tへの取りくみを通して、豊かで好ましい人間関係の育成をはかる。
- (2) 実践に対して同一方向に志向することの意味は大きい。S・Tの公開等を通して、学年・学校全体の質的向上をはかる。

3. S・Tについての考え方

- (1) 本校では、朝と帰りそれぞれ20分のS・Tを設けている。先生と生徒、生徒同士がふれ合う時間をもっと欲しい。互いに刺激し合い、磨き合える時間として各々20分は必要であろう。
- (2) S・Tは学校生活と家庭生活を結ぶかけはしであり、一日の生活を一つのサイクルとしてとらえる。
- (3) S・Tは学級集団の質を高める場となる。
- (4) S・Tはよりよい人間関係を育てる絶好の場である。

4. 研究の内容

(1) S・Tに取りくむまでの実態

各学年について調査した結果、時間通りに始まらない。司会がただらしている。皆の態度が協力的でない。S・Tの意味については、単に連絡の場としてとらえていて相互活動の場となっていない。等の結果となった。

(2) S・Tを有効に

一日の出発点、それは朝のS・Tである。一日の生活のまとめ、それは帰りのS・Tである。この時間を有効に生かしていく方法について学級会で話し合った。

○活動内容の例（朝）

- a 健康観察
- b 一日の生活目標を話し合う。
- c 家庭生活の確認と反省
- d 忘れ物はないか。
どのように準備するのか。

（帰り）

- a 一日の学校生活の反省
- b その日の授業のポイントや理解の確認
- c 家庭学習計画、方法、内容も（班での宿題など）
- d 班・学級の問題を話し合う。
- e 明日の学校生活を豊かにするために

(3) S・Tへの取りくみ

ア S・Tで取りあげられてきた内容(各組の取りくみから)

- ・授業三悪の追放(ムダ口、忘れ物、チャイムで席につかない。)
- ・学習でわからないところを班内で何とかならないか。
- ・服装点検
- ・清掃の仕方、清掃時の着がえをみんなで実行するには
- ・生徒会活動のとりくみ(あいさつ、クリーン作戦、530運動)と評価
- ・行事にかかわる内容について
- ・係活動について
- ・学習の取りくみについて
- ・給食当番の活動について
- ・進路について
- ・弱者いじめ、のけものあつかいされている子について
- ・活発な班活動をするために
- ・学級レクリエーション
- ・週刊の取りくみについて
- ・班の約束について
- ・友人関係(男女の交際)
- ・班の問題について
- ・班新聞の作成
- ・生活態度(家庭学習について)
- ・悪口やいたづらについて
- ・班目標の達成について

※ それぞれの組が、その時の状態を分析し、身近な問題を取りあげ、S・Tであつてきた。本年度、各組がとりあげてきた内容をまとめたものであり、どの組もこれだけの内容をあつかったという意味ではない。

イ 取りくみの中で(具体例)

(ア) 自主性を育てるルールづくり

数々の学年の問題をふまえ、「自分達で作ったルールは自分達で守ろう。」「ぼくたちが鷹中をよくしていこう。」を合言葉に各クラス毎にとりくんだ。それらの例を次に示すと

- ・先生に注目
- ・44-1=0
- ・チャイムで開始
- ・授業三悪追放
- ・おい、こっちを向けよ。
- ・給食は25分までに全員着席
- ・全員そろって、いただきます。ごちそうさま。
- ・聞くこと、書くこと、話し合うことの区別
- ・ハンドサインはしっかりと、発表はしっかりと
- ・みんな着がえてさあ清掃
- ・「やめ」で注目
- ・まず自分で考えよ。
- ・全員そろって基学の提出
- ・苦しい時は前進している。
- ・声のダイヤル 0123

(イ) 班活動を高める評価表

一日のとりくみがどうであったかについて、班毎の取りくみがきちんと評価されて、相互活動が一段と深まりをみせていかなければならない。うまくいかなかった点はフィードバックし、翌日はプラスになるようにしていくのである。とくに、基本的なルールについては、学年共通な評価表を作成して実践をしている。

○1年の例(班の生活反省記録表から)

- 朝のS・Tで
1. 服装、頭髪点検
 2. 朝学習のとりくみの状態
 3. 今日の目標—学級、班

- 帰りのSTで
1. チャイム着席はできたか。
 2. 授業中の私語はなかったか。
 3. 宿題や持ちものの忘れはなかったか。
 4. 班の反省
 5. 学級全体の反省
 6. 提案—班の活動をよくするために思ったこと。

(ウ) 班日記の活用

班日記は、班や学級を高めていくのに大変よい材料となる。班日記を書く意味とねらいを次のように理解させて書かせている。そして、よい実践例はS・T時にみんなに紹介をし、場合によっては話し合いをする。

○1年生での指導例

- ・一ページは必ず書く努力をしよう。
- ・事実をおげるだけでなく、自分の考え、対策、実践を書くこと。
- ・班や学級に関することを書く。
- ・自分の行動や態度に対する反省、感想を書く。
- ・班や学級に対する主張、提案を書く。
- ・班活動で自分が得をしたり、苦勞したりした経験を書く。
- ・できれば教師に対して書くのではなく、仲間に向けた姿勢で書く方がよい。
- ・まじめな態度で書くこと。

※当番を決め、毎日家庭に持ち帰り書く。翌日、教卓の上にS・Tの始まる前にのせておく。

1の8 4月25日 永野 大介

.....ここでぼくが言いたいのは、「けじめをきちんとつけて欲しい。」「今村君はもっと他の言い方ができなかったのか。」「級長、早く注意しろ!」ではなく、自分たちの班で静かにさせて欲しい。それに、他の班の人が注意してはいけないことはないのだから、クラスのみんなまで注意してほしい。等のことだ。今村君は、授業中にしろ、何にしろ、このごろ目立ってけじめがない。気をつけて欲しいな。.....

5月21日 藤野 秀和

今の1年8組で忘れ物をなくすことは決して不可能なことではないと思います。それぞれの班で協力しあえば忘れ物0作戦を成させれると思います。ちゃんと決めたからには、0にならないのがはずかしい。まだ、はっきりといえないが、ぼくたちの班はまた2・3個から0にもどすことができました。これから先、0が維持できれば忘れ物作戦は大成功だ。1年8組もみんなが協力すればできないことはないくらいになるにちがいない。だから、S・Tの時間をうるさくしないことも可能にちがいない。でも今の8組は可能を目前にしながらくずれかけている。ぜひ可能にしたらずばらしいと思う。もっと小集団やクラスにまとまりがあったらいいね。

(ア) 基礎学力の向上めざして一今年度重点目標

a 家庭学習計画ノートの活用

本校では 学校と家庭を結ぶものの一つとしてこのノートを使用している。帰りのS・Tで家に帰ってからの学習計画をたてる。

b 小集団学習の効果を高めるために

① チームワークづくり

- ・親切な心と感謝の気持ちを忘れずに
- ・リーダーをもちたてよう。
- ・落後者を出さないように
- ・他の組にも働きかけよう。
- ・サインをつくろう。

② よい学習習慣を身につけよう。

- ・チャイムで活動開始
- ・おり目、切り目をつけよう。
- ・「Hip Up」
- ・不必要なものは置かない。
- ・集中力と粘り強さを養おう。
- ・「ハイ」と答えて、しまいはっきり

③ 厳しさをもとう。

- ・お互いの活動のし方を評価しよう。
- ・班の約束をつくろう。
- ・一にきびしく 二に親切 三に協力

④ 話し合いについて(二人バスから六人バスへ)

⑤ 授業のすすめ方について

⑥ S・Tの公開一月1回随調週間、水曜日朝の職員打合せなし

(4) 考察

まだまだ実践を始めたばかりであり、分析資料をとる段階にいたっていないが、昨年までほとんど成立しなかった授業が、今年は真鍮に行なわれており、グラウンドでは運動に励む生徒が半以上にふえ、授業やクラブ活動、生徒会活動など他の領域に好ましい影響をおよぼしはじめた。各学級では授業へのとりくみ、生活ルールへのとりくみ等の粘り強い取りくみが始まっており、これらを通しての成就感や満足感が学校を変えつつあるように思われる。

6月10日 平岡 幸子

・・・こんど、教生の先生が来られるが、この時こそチャンスだと思う。鷹来村は思いように思われているが実はそうではないという事を教えてあげるチャンスだと思う。だからといって特別なことをしなければという事ではない。ただありのままを見てもらわなければいけないと思う。・・・

これまでの実践から、特別活動の様々な領域に良い影響がみられるようになったが、一学期間にとりくんだ生徒の活動は次の通りである。

ア 学校行事で

- ・修学旅行 5・21～23 林間学校 5・28～30 宿泊合宿 4・10～11
～学年生徒会、実行委員会による活動

イ クラブ活動で

- ・部活動日誌 キャプテン会 顧問者会 部会 ～参加度アップ 練習内容の向上

ウ 生徒会活動で

- ・あいさつ運動 4・22～27 7・8～13 9・17～21
～全職員 全父兄 生徒会執行部 議員
- ・球技大会 5・22～28 ～生徒会 体育委員会
- ・夏休み生活宣言 7・15 ～生徒会
- ・生徒集会 毎週 ～生徒会
- ・530運動 毎月30日 ～生徒会 美化委員会

5. おわりに

好ましい人間関係を求めての今回の実践は、ごく当りまえのことであり、特別の喜びでも何でもない。しかし、荒れる学校にあっては、ごく当然の喜びができなくなっている事もまた事実である。本校もそうした水面下の学校の一つであり、その解決の第一歩としてS・Tの見直しから歩みはじめたところである。小集団を基礎としての実践の中で、遅々としてではあるがクラスや学校をよくしたいという子ども達の気もちの高まりが感じられるようになったのは喜しいことである。好ましい人間関係の育成は、まだまだ程遠いものがあるが、S・T以外の場でも相互活動を生かした実践を深め、目標到達に度力したいと考えている。

修学旅行スキー研修の運営と効果

—生徒の自主性を引き出す試み—

三重県立朝明高等学校 坪橋三洋

28

三重県下で最低の校といわれる高校で、修学旅行にスキー研修を初めて導入した。

引率教師集団が生徒の実態を把握し、議論し、指導目標を明確にして、それを明示しながら、生徒達には形成的評価を取り入れながら、事前指導を繰り返していった。

その過程に、生徒達の中から「自分達の修学旅行」という自覚が生まれ、旅行計画の細部まで、積極的な意見を取りよせ、進言するようになった。

そこで、その代表的な集団を「修学旅行実行委員会」として、生徒達も、引率教師達も認めた。

この「修学旅行実行委員会」は、生徒達の修学旅行に対する要望をとりとめて、指導係の教師を通じて、「修学旅行引率者会議」に提案したり、また、「修学旅行引率者会議」の意向を生徒達に報告して、生徒個々の集団で話し合う機会を求め、指導目標の真意を伝える役割をはたした。

こうい、た多くのディスカッションは、次のような結果をもちた。一つは、学校と対外的にアピールするための象徴として、バナー（バナー）を作成したこと、もう一つは、旅行直前指導の時、服装違反の生徒に、「修学旅行実行委員会」の代表の者が「オレ達で話し合っで決めた約束だ、着かやろう」と説諭し、違反の当事者はもちろん、全員が納得し合っで、旅行に参加できたことである。

その外、この修学旅行では多くの効果を発見することかできたが、本報告では、とくに「修学旅行実行委員会」のせい立ちとその実績を報告する。

修学旅行スキー研修の運営

S58. 4

学年主任：これまでの社会見学的な修学旅行に疑問を持つ
 ①引率教員の疲労が多い——四六時中、生徒を見張らなければならない
 ②生徒の生活が乱れる——夜は眠らず、車中が眠る。

学級担任：スキーの導入はどんなものかと考える。
 ①スキー技術に優れる者、スキーに興味を持つ教師がいる。
 ②近隣の学校でも校外活動にスキーを導入する傾向にある。
 ③スキー修学旅行を指導的立場で実施した教員の赴任してきた。

学年会議

校外活動委員会
 : 実施時期の問題が出る

S58. 5

職員会議

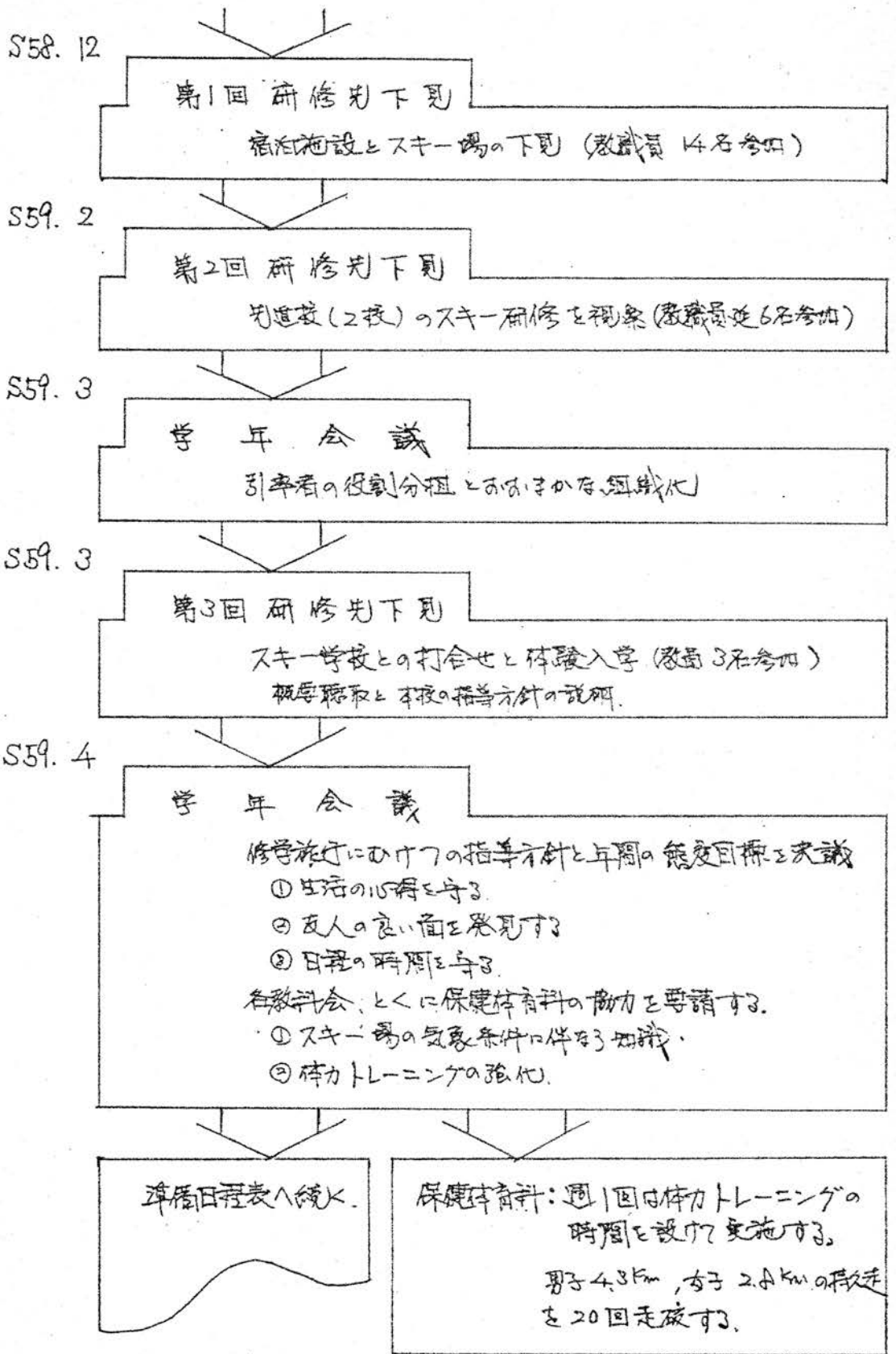
体育科：スキー修学旅行を本校生徒に実施することの問題点。
 ①運動能力テストの結果から本校は全国平均に2~3年劣る。
 ②健康・安全に関する理解力が劣る。
 ③スキー指導の方法論が未確立である。

S58. 6

旅行業者との検討会(3回)

S58. 9

生徒側：スキー修学旅行に反対する意見が出た。
 ①生徒の意見は何も聞かず、一方的に教師がスキーへ変更した。
 ②気象条件として、寒い時期に極寒地へ連れて行くのである。
 ③体力疲労の激しい訓練的な旅行になる。
 ④友人関係で拘束される時間が多く、自由がない。



準備日程表とコメント

5月16日	事前指導(1)	映画「雪の信州」
5月23日	事前指導(2)	ビデオ「長野高のスキー研修」 スライド「2月下旬の記録」
7月25日 ~ 31日	PTA地区懇談会	電話連絡中: 保護者への概要説明
8月		ソシオ図作り
9月5日	第1回引率者会議	* ソシオグループの、機械的に組立の 意見が出た、
9月17日	事前指導(3)	スキー班とソシオ図を基に 生活班と各準備の構成して、 各班の役割分担をさせる。
11月9日	事前指導(4)	スキーウェアの試着会
11月~ 12月	手紙持抱	各市町村の医療機関へあいびつ インフルエンザ
* この項 は定例の如く、準備品についての質問があれば要望を申し出る。		
12月11日	第2回引率者会議	「修学旅行実行委員会」を認める。
12月10日 ~ 24日	(金) 修学旅行実行委員会と 指導係との討議の場を連絡	① パナソニックの旅行 の旅行中の服装に関する約束
12月25日 ~ 1月7日	冬休みの課題	体力づくり(なわとび 1日100回)
1月9日	事前指導(5)	集団行動(所属グループの確認等)
1月11日	第3回引率者会議	実行委員会提出の服装に関する約束 を4項目を認める。
* この項の 実行委員会者のリーダーシップをとり、活発に準備をする。		
1月14日	事前指導(6)	レクレーション係の活動の指示、援助
1月16日	事前指導(7)	健康調査(健康状態のチェック)
1月23日	事前指導(8)	集団行動訓練
1月25日	事前指導(9)	スキー技術の解説
1月30日	事前指導(10)	学年の服装検査

- 2月5日 第4回引率者会議 旅行日程の綿密な打合せ
- 2月6日 事前指導(11) スキー前 校医検診
HRT, 服装, 携行品, 心算のチェック
- 2月7日 第5回引率者会議 引率教職員変更に伴う旅行日程の綿密な打合せ
- 2月8日 事前指導(12) 所属グループの確認ゲームと下半身強化のための運動
- 2月9日 事前指導(13) 携行品検査
保健指導
スキー用具装着実演
諸注意, 連絡
- 2月12日 直前指導(1) 服装検査, 携行品再検査 ※この時
旅行用服装に違反あり。教師に注意され生徒が興奮したためにより、実行委員を止めた。
- 2月13日 直前指導(2) 専校長訓話
団長訓話
諸注意, 連絡
- 同日 第6回引率者会議 ※この時、各班、各係のチェック用名簿
旅行日程の毎日の日程表等、実行委員の
手準備ができており、又バス旅行中の
ために、歌集とクオテプロ、生徒の手
準備ができていた。
- 2月14日 修学旅行
~ 16日
- 2月20日 事後指導(1) 修学旅行の感想文
- 2月21日 事後指導(2) 写真交換会 記念品の持ち帰り
※この看みつに、旅行中に実施した諸調査の資料は、由指導順にま
りと整理して、各係→係の代表→実行委員へと渡り、整理しやく
なつた。
- 3月~ 4月 ※「諸調査の整理に協力して下さい」と申し出て生徒の
数もつてきた。

まとめ

本校が実施した修学旅行スキー研修は、当事者達の主体的自覚性はあるか、うまく実施できたかと判断したい。

その理由の一つとして「修学旅行実行委員会」の誕生をみまよりに生徒達の自主性を引き出すことができたときえらめるからである。

この成果を生み出したと思われる要因は次の事項が挙げられる。

- (1) 引率者および教師達が目的意識を明確に把握し、生徒指導をすることができた。
- (2) 修学旅行を立案・計画する過程で、生徒達に危機感を持たせ、意見を述べせようとした。
- (3) 引率者が予め体験をし、スキー学校と綿密に打合せし、本校の指導方針を伝えることができた。
- (4) 生徒達の各々の意見を一本化させる機関を認める一方、教師側の意向を一人の教師(指揮係)から報告するという形式をとった。
- (5) 生徒側からの意見、教師側からの意向は、「修学旅行実行委員会」と指揮係を通じて、連絡された。この時、納得できない事項については、集中的に討議が繰り返され、実行委員会では各学級の意見を集約し、指揮係は学年会議に問うという形態をとった。
- (6) 引率者会議は生徒達の希望をできる限り受け入れるように努力した。
- (7) 修学旅行への準備行動は生徒にまかせようと生徒達を信頼した。
- (8) 体育の授業をひかめず、事前指導を何回も実施した。
- (9) スキー研修の手引き書に、目標を明記し、事前指導、修学旅行中、旅後の形成的評価の質問紙を付けた。

第 9 分科会 特別活動

研究主題 ——生活規律の向上と活性化をめざし、

やる気と抑制力をたかめるにはどうすればよいか。——

兵庫県姫路市立広嶺中学校 山口 英雄

1. 奇妙なことばの創造と推進実践までのこと

29

生徒の生活をここ数年間ふり返る時、全国的な傾向とも相まって本校においても活性化にはほど遠い無気力で投げやりなやる気のみられない様が全体的にみられた。具体的にはゴミが散らかっていてもそのまま、集会や集団行動への参加のだらだらさ・部活動への集中的・精力的なとりくみの欠如・他人のせいにしてしまう責任転嫁への近寄り、等々。

ふり返ってみるとその当時私たち教師集団もこれに類似した意識構造なり気持ちのもち方をしていなかったかということが、反省としてある。これでいいのかという気持ちはどの教師にもあったであろう。だが、その変革への切り込みは——、努力は——

大多数の生徒が内容理解できる言葉での指導がより具体的でなかった。むずかしい言葉優先の指導だったのでは、と整理してみる。たしかに心の持ち方とかメンタルなものへの接近にはどうしても抽象的言辞が出てくるため未消化に陥り易いことは多くある。しかしそういった指導がはたして生徒の心のゆさぶりになったり「—今日は先生の話されることなんやろ—」になりにくい点はあった。教条的、事大的与え方のため、受けとる側の混乱、焦点のしぼりにくい受容態勢を作りだしていたのではと考えられるふしがある。加えて終始一貫したものとして理解できるにはよほどの訓練のいることであるためむずかしい、わからへんになっていくと分析できる。(個々の教師の教育活動ではいろんな接近がなされていったことはもちろんであるが)

より具体的で、より行動的で、より認めあう立場で、より集団的で生徒にアプローチがなされていけたかという点を現在反省をしてみることができる。

2. 「私はええ格好はいいません。やるからには勝ってこい。」までのこと。

なんとか校内を美しくしようやないか、破損したか所をみんなの手で直すことはできないのか、部活動の活性化をするためにどうしたらいいのか職員の意志疎通を求めるため

に家庭への働きかけをどう展開していくか、冗談がいたり笑いのある職場・教室になるためにどう手だてを講じていったらいいのか生徒会の活動をさらに活発にするためには以上の内容を。

管理職は管理職で、事務分掌上で、世代別で、計画的にも偶発的にも何回となく話し合ってきた。その話された内容の深まりを見せるのは、「お互いが認め合うことができる。」雰囲気作りが根底にあった。「ごくろうさん。」と云える大切さ。「大変だったでしょう。ごくろうさん。」の価値を今さらのように痛感せずにはいられぬ。見えない所でも、見える所でも認めあえる仲間を作る心がけ、特に年配の先生は若い教師のひたむきな努力を公開してそれを知らしむ行為を続けていった。すべてうまくいったわけではない。不満の受け皿にもなった。側面的援助を陰から送った。意見を吸い上げていった。代弁もした。特に心がけたのは理屈ではなく身体を動かすことを中心に考えて実践したつもりである。

少しずつ運動のさかんな面が出てきた。土日祝祭日返上のきびしい練習が結果としてあらわれた。「一年間になん日学校へきてるんやろ」と当時の部活顧問がよく話し合ったものである。(以前より部活はさかんな学校ではあったが沈滞気味だった。)朝練、放課後、夜間練、合宿もあった。親からの苦情を何回聞いたことか。それでも認めあう――生徒がくらくらいついてくるに至らないまでも、あいさつが朝から始まった。登校の教師に、親に、友達に。

部活激励会の朝、朝礼で校長が大声で話した。「私はええ格好はいいません。やるからには勝ってこい。」と。「勝てなかったら勝つ方法を先生と練習の中で話し合って、勝つ努力をしてきなさい。生活態度もふくめて。」と。

3. 生徒、校区父兄、教師が同時進行で、きじうれの実践のこと。

冒頭に書いた奇妙な言葉の創造が「きじうれ」である。きじうれ作戦の推進である。こんなことに気をつけて学校生活をよりよいものに作っていかうと話したことは頭文字 4字である。別に意味合わせをしたものでもない。誰がいだしたか、生徒に記憶し易いようにその言葉を昨年より使いはじめた。この言葉はさらに印刷物として生徒の家庭へ、校区の家庭へ配布されていく。

みんなで考えよう！ 自分たちの学校生活を！

—————きじうれ作戦の推進—————

き きれいな学校——整理・整頓（物の大切さ）清掃美化（無言）
じ 時間を守る学校——けじめ、登下校、授業の終始（3分前行動）
う 運動のさかんな学校——部活動・昼食後
れ 礼儀正しい学校——あいさつ・会釈・言葉遣い・マナー（作法）
身だしなみ（服装・頭髪）

“いつでも・誰でも・その場で注意を”

以上の内容をイラストを挿入して啓発活動に努めていった。生徒にはもちろん、育友会集会・あすなろ教室・町別懇談会・学年だより・広報紙などありとあらゆる所で話し実践化を訴えていった。

生徒の反応はあった。学年だよりや生活作文の中に、「きじうれ作戦」に関することが書かれはじめた。命令されたわけでもない。3年生の女子生徒が朝早く登校して玄関と階段の清掃を毎日始める。卒業するまで何日続いたことだろう。毎日毎日の行動であった。生徒会は便所の下駄をそろえる提案を確立していった。平素の目立たない活動であったが、交代で帰りの点検活動を執行部が中心となってはじめた。紙飛行機がとばなくなってきた。障害児学級生徒の清掃活動が先生方により紹介されて生徒への語りがなされた。保健だよりもかかれる。弁論大会にその真摯さをとり上げて発表した生徒もあった。「ベル着」の言葉が出てきたのもそのころである。ベルが鳴ったら自分の席に着席して授業を待つという態度作りの推進用語であった。じ作戦の一部である。遅れないで学校に来ることを保護者に徹底して学級担任は話していく。

教師側にも変化が見られてくる。雑布をもって清掃現場に向かい出ていく姿、便所の清掃に生徒と共に楽しみや工夫をこらす。自分たちで自分の分担場所を営繕活動にまで高めていった。グループは、教師と共になんらかの安らぎのようなものを感じたと話してくれる。

清掃時には職員室は空になる。必ず清掃場所に向かい出ている。「美しい方が気持ちがいいやろ」「ハイ」「そんなら誰かがやらんときれいにならんわ」「そうやね」「家

では誰かがやっているんやろ」「だいたいお母さんや」「学校は誰がきれいにするのんや」「みんなでやらんとあかんということでしょう」「そうやみんなでやるしか方法ないもんな」このようなやりとりの構造が随所で見られた。

学校への関心が高い本校区の父兄が育友会活動でよく来校される。昨年から今年にかけて「学校が美くなりましたね」と声をかけていただく。日曜土曜に他校から練習試合に生徒を引率して先生が来られる。「部活のさかんな学校なんですな」と話される。そのようなやりとりをその時点でとどめておいては生徒への心の喚起にはならない。ありのままのやりとりを話していく。集会で、朝礼で、部活の場で。そのことがやる気を起こさせる要因になっていることを理解していき実践していくことが大切なのである。

いろんな立場の生徒を認めていく。それは必ず実践を伴った行動化されたものであること。基底にある理論をその所に置きたいものである。それに付随しているのは、「先生もがんばっている」ということを教師の行動で示すことだと確信して言える。

4. やっぱり教師が変わっていかんとあかんこと

① 会議は1時間30分～2時間の範囲で

従来の会議は長すぎた。冗慢さで会議をしていたことはないが内容のつかみにくい長談議には思考力が働かない上にあきらめとなげやりが出てくる。もうどうでもいいわ、という流れが出てくると必ず意欲という面で後の行動化する際にも支障をきたす。生徒は敏感にその点に反応していくものである。

② 教師の中にある能力を認め合うという姿勢で

必ずその教師の中に眠っている能力がある。それを引き出す役割を管理職なり、比較的年齢経験のいった教師が、認め引き出すことを心がけるべきである。いつの場合にも働のなめあいにおわることは厳につつしみたいものだが、活性化していく学校をめざす時、教師に活性が見受けられない限り生徒の活力ある実践は望めない。一言の「ごくろうさん」のことばが、「たいへんだったでしょう。つかれを一杯のんでとれよ」の仲間のことばが重要な役割を持つてくる。

③ よく学び、よく遊べる仲間

主義主張はともかく、冗談がいたりアホな話ができる職場づくりが大切な要素を持

っている。それには必ずムードメーカー的な人材が居るものである。テスト処理などに忙しいことはあるが、試験の日の午後は会議を持たないと決めて、男女とも運動をする日を一日とっている。(学年対抗ソフトボール大会など) 婦人部・青年部・壮年部の会で、語り、食べ、飲むことの推奨。

④ 学年の枠をはずした取り組みで

必然的に行動できない学年間の枠は存在する。しかし、意識的にこの枠をとりはずすための営みは可能だと思えるし、実際に実践してきた。批判がましいことを口に出さないことと少しの思いやりの言葉をかけることにより徐々に枠の堅さはゆるやかなものになっていく。

⑤ 安易な方へ、安易な方へ流れない方向で

「〇年生のことやけどな、みんなの先生方が協力するということでの先生方もがんばってんや。」「ふーん」「1つの学年だけでできへんこともあるやろ。その時はほかの学年の先生も協力してくれてんのや」「わかったあ」「広嶺の先生はなかよしなんだぞ」などというPRも生徒にはよくする。職員会議での討議も、問題解決のための方途は安易に流れない志向を心がけている。

⑥ 失敗したことを語ることで

教師間でも対生徒に対しても、私たちが生活経験で失敗したことを話すことが重要な作用をおよぼしていくのではないかと考える。ありのままというわけにはいかないが、デフォルメした形の失敗談は実感として生徒に抑制力に関与したものとして受けとめられるようである

5. 今年の夏求めていったこと。

今年の夏休み前、いろんな会を持った。1つは夏休みのラジオ体操と奉仕作業を去年までのようすとちがって、いきいきした張りのあるものにするためである。半分あきらめていた点もある。結果は35%程度の出席率が80%を越えた。中身もだらだしたものから変わった。「中学生のラジオ体操がこんなものかと思われなくなかったから、小学生諸君の手本になるものをみせてやったらうやないか。そのかわり先生方もがんばる。」主旨と語りをそのようにして行った活動はさすがすがしさがあつた。

もう1つは休み前の保護者対象の町別懇談会である。きてほしい人にきてもらえずというなやみをどこの学校ともかかえていると思うのだが、いろんな手だてを講じていったため90%以上の出席をみる。やれば出来るものだという実感をたしかな手ごたえとして受けとっている。

6. さらに求めていること。

学校という所へは様々な苦情が来る。苦情から逃れるつもりは毛頭ない。しかし地域社会でなんとかできることがある。それを理解してもらい、そのためにはお父さん、お母さん方が変革してもらわなければという願いをもっている。生徒は学校の主人公であるとともに地域社会の財産なのだから、地域社会への、地域社会の大人への挑戦を語り続けたい

最後に、手作り弁当の奨励である。子供が家で作ってもらった弁当を感謝して食べるこのころみ。精神的なものを創っていきたいという願いを求めているところである。

研究主題 「生徒と共に歩むために」

広島県立忠海高等学校 高橋 幸博

要旨

30

研究内容

被差別部落出身生徒Kに対して何を、どのように取り組んできたか。そしてその取り組みの中で私が何を気づかされてきたのか。高校を卒業し、短期大学を卒業しようとしている生徒との五年間を「中間総括」し、今後の取り組みの一歩としたい。

1 「二、三年経ったら帰って来るけんね」(1985 8)

夏期休業の大半をアルバイトに費いやし、盆過ぎに帰省した生徒を訪ね、現在の生活、卒業後のこと等を話し合っていた時のことである。「解放奨学金があったから私は進学できた」と言い進学していった生徒は、部落解放運動に参加することを明らかにしている。

2 「中学校を卒業したら集会所に来んでもよくなると喜こんだのに……」(1981 6)

「解放研に入れや」部落出身生徒が解放研に入らんで何をするんかと入学直後の解放研の集まりのある日に勧めた。事前の中学校、支部との連絡により様子は少し知り得ていたものの、私の言葉に対する確たる回答はなく、それでも初めての

集まりには参加していた。参加したその集まりの中での解放研、地域での活動等の話題は生徒にはこたえていた。「何もせんでもいい」はずであったのが「何でも、何処でもせんといけん」ものになっていく。「何んでうちにばっかし来るんね」と泣きながら私達のあり様を追ってくる。

2 「あんた自身が部落をマイナスにしか見ていないのではないか」(1981 7)

尾三合同解推部合宿研で生徒への取り組みを発表した後、仲間の多くから、私自身の部落の見方を指摘された。「面倒見のよだけの先生じゃいけまあ」と。祖父母、父母の仕事、結婚のことと関連させて差別について話すもののそれも「昔のこと」とし、自分は差別されたことはないとそれ以上話の進まない話をくりかえしながら、私自身は集会所に集まる婦人部の活動に参加（とはいっても一緒に居るだけのようなもの）し始めた。「ごくろうさんですのお」のあいさつが、「あんただけが知って帰るだけではダメで」に変わっていった。

3 「集会所へ来いや」(1981 10)

高校にいったら集会所へ行かんでもようになると喜んで中学を卒業した高校生を集める仕事を始める。同級生四名が三校に分れ通学している。互いに各校の様子を、解放研の活動も含めて話し、解放研を止めると息まいていたKが入部を勧めたりしながら雑談が中心になりがちな話は遅くまで続いた。

そんなKの変わり様は夏休みの終りに見えてきた。解放奨学生との話し合いの場、話しの中で「逃げてはいけん。今やっておかんと」と言われたことがきっかけになったという。「生徒は一人で変わっていくんじゃないか」とこの変わり目に関われなかったことを嘆いた所で指摘もされている。

4 集会所での話し(1982)

新しく高校に進んだ二名を加え計六名となった高校生の集まりはにぎやかさを増し、その内容も継続したものも多いが地域のこと、子ども会のこと、退学していった友人のこと等拡大していった。とりわけKにとってその動きに「はずみ」をつけるものとしてあったのは、「解放奨学金の貸与化」問題、全国奨学生集会への参加、六名の仲間のうち一名の登校拒否的症狀に対する取り組み、そしてそれらをふまえての東南部連事務局の担当であった。行動範囲の拡大とそれに比例してのより多くの仲間との接触、語り合いが前へ進む彼女のエネルギーとなっていた。「先生、部落外のものが(解放運動を)やれえというのは、やっぱりおかしい」といい始めたのがこの時期である。

5 狭山集会のとりくみの中で(1982 10 1983 5)

多くの仲間との接触により「今も」部落から逃げてはならんと思われ知らされ、「解放奨学金の貸与化」問題により解放運動が自らのものに近づいたものの「自分」を語ろうとしないKに対して、「お前が一方的に、皆んながわかってくれないと断じるのはいけまあ。質

問してもらって答えてみいや」と学級の生徒の前に立たせ
応答させる。その中で少しずつ自分のことを話し始める。
この時期にKが私の同僚に書かされた「私の生いたち」が
ある。そこには「解放教育？また石川さんのことかと言っ
ていたクラスの人と言わなくなりました。どうしてかよく
わかりません」と書いています。

6 「先生、あんたが来るぶんだけ子どもがめけていきよる」
(1983 冬)

集会所の和室にいつものように集まり、「人権と教育を考
えるシンポジウム」への高校奨学生への参加の働きかけの要
請は受けていたが、話を始めて直後、支部青年部のTさん
が顔を出し「行かんいうもんで」という私の言葉をとって
「来いいうとったろが。こんな学習会やったら集会所使
うてもろうては困る。解放運動は、組織はこんなところで
動いとるんじゃない」「根拠さえあれば先生をいつでも追
い出すんじゃが」という。

婦人部の集まりの中でも聞いた「昔は先生は私らの敵じゃ
った」と重ねて一人で落ちこんでしまう。

Kは「私も先生を追い出すくらい強くなりたい」という。

7 まとめとして

大学進学用調査書に「部落解放研究部」に入って活動して
きたことは記入して下さい。そうでなければ高校三年間何

をしてきたのかわかりませんからと言ひ進学していったK。
Kとの関わりは私が彼女の担任になって始まったものの、そ
のような「義理」の甘い関係でないことは確かである。
Kと私の、部落と私との関係を鮮明にするところから始めな
ければならないと考えています。
Kに関するレポートは、その都度Kに見せながら書いてしま
した。機会があればその逆の、Kによる私のレポートをさせ
るつもりです。

第10分科会 道徳・同和教育

研究主題

人の心がわかり、共に生きる生徒の育成をどのようにすすめるか。

親の願い、地域の願い、友だちの願いにこたえられる生徒の育成

—— 別室におけるきめこまかな指導のあり方を考える ——

兵庫県姫路市立花田中学校 高橋 渉 31

研究内容

- ① 本校の実情 *本校は姫路市東部を流れる市川流域の東に位置しており、校区の北部に対象地域をかかえ、対象地域の大半の親は古くからの伝統的産業である皮革工場に従事し、南部の地区の親は会社員、兼業農家と、とも稼ぎが多く、国道に面したところは、さまざまな産業が点在している。

*1年生4クラス(44/151) 2年生3クラス(46/127)

3年生4クラス(60/143)

*推進教員 5名

*過去花田中学校の教育は、対象地域の生徒を根底に、個人個人の生活上の諸問題を中心にすえ、仲間としてどう動いていけるかということを取り扱うなかで、教師も生徒も一人一人と共に歩んできた。しかし、本年度は複数指導を第一に考え、その中から、どのように親・地域・仲間の願いに対する重みを、自分の重みとしてとらえきっていかせることができるかという姿勢で進めている。

- ② 本年度にいたるまでの複数指導の取り組み

(56年度) ア 生徒指導上————教科の能力面もさることながら

基本的な生活習慣の育成の確立をめざし、同室複数型の型をとる。しかし、専門外の教師が担当するため、時間数の調整になりがちな面を残した。

- イ 英・数・国は同室複数指導 ———— 読み・書き・そろばんという生きていく上で最低限度の学力は身につけさせようという視点から、行なっていたが、同室複数指導の時間数が少なく、系統性に欠ける面もあり、また生徒・親にその意義が十分理解されずに進められてきた。

(57、58、59年度) ア 生徒指導上の問題がうすれ、その必要がなくなりつつあった。そのため・・

- イ 教科も英・数・国にしばられ、時間数がかけられるようになった。その中で諸条件がかなえられた英語科については、別室の方向で検討実施へと移行していった。又、ノート指導・放課後学習・個別指導という方法も教科によっては考え出されてきた。つまり、いろいろな方法を試み、一步一步前進していく試行錯誤の状態であった。

(60年度)

生徒の実態と過去の反省による教師の考え

- i) 生徒の基礎・基本的な学力が低い
- ii) 親・地域の願いを生徒に伝えたい (目標・希望をもたせる)
- iii) わかる喜びを生徒に感じさせたい (能力を十分発揮させたい)
- iv) 基本的な生活習慣の確立・定着を (生徒指導上も含め)
- v) 生徒の生活の裏には、ひたむきな地域の親たちの願いがこめられ、親の生きざまがかくれている。 (共通理解)

vi) 就職する生徒のうち、対象地域の生徒には、生きていく、
自立の意識を深めさせたい。

—— 原点に帰り、花田中学校方式を再認識する。 ——

花田中学校の濃密な指導10ヶ条 (昭和52年度)

1. 生徒のつまづきに合っていること。 —— 個別化
2. 継続的・系統的であること。 —— 継続性
3. 将来の発展を見通すこと。 —— 展 望
4. 自立・自学の方向に向いていること —— 自 立
5. 仲間意識を育てるものであること —— 連 帯
6. よりわかりやすい方法を子どもの姿から
学び、生み出すこと —— 創造性
7. わかる喜びをもって前進するものであること —— 成就感
8. 全職員へ拡がりがあること —— 共通理解
9. 子どものおくれの原因をつかむ —— 背 因
10. 教師の使命感の上に立つこと。 —— 社会的責務



そこで、全職員次のことを共通認識として得た。

- ① 親の生きざまから子どもを見つめよう
- ② 地域の学校に要求していることをつかみきろう



- ① 一歩誤れば「差別」の再生産である。
- ② 授業中^ので取り残していくのも「差別」かも知れない。
- ③ 最低目標「わかる喜び」を伝えよう。
- ④ 同一教材・同一進度・同一考査を基としよう。
- ⑤ 抽出生徒は、対象地域の生徒を中心に5～7名
固定しないようにしよう。
- ⑥ 教科面の能力もさることながら、生徒との対話を深め、
生徒の訴えをきき、理解に努めよう。

事前指導 (職員の生徒・親・地域への取り組み)

——抽出生徒の意識の向上をはかる手だてとして——

すべての学活、道徳・同和の授業を通して

- ① 地域の親の願いを考えさせる。
 - ・ 高校進学を
 - ・ 勉強できなくても“しっかりした人間”にしてほしい。
 - ・ 親の働く生活の苦勞・姿をわかってほしい。
 - ・ 部落差別を解消する力のある子に
 - ・ 部落差別に負けない部落の人間を
- ② 学力がなぜ必要かを考えさせる。
 - ・ 学力とは何か
 - ・ 部落差別の悪循環を断ち切るために
- ③ 仲間がなぜ大切かを考えさせる。
 - ・ 個人は集団により、仲間により支えられ鍛えられる。

・仲間の願い、生活を考えあう。

④ 先輩の歩んでいる道、歩んできた道の見直しをさせる。

・高校の中途退学者、転職者、現在それぞれの場所ではがんばっている者からの手紙による後輩への忠告を教材化する。

⑤ 花田校区の先人の苦勞、努力を知らせ、考えさせる。

————— 原学級に残る生徒の仲間意識向上の手だてとして —————

① 別室へ行く生徒の気持ち、決意をわからせる。

② 仲間として、何ができるか考えさせる。

③ 自分たちの今までと、これからの授業に対する意識を考えさせる。

④ 学年集会・全校集会等でも、校長より説明。

————— 親・地域への理解を得るために —————

① 家庭訪問でのくり返し説明

② P T A 総会で学校の意向に対して理解を得る。

実施

	英語	数学	国語
1年	3/3	2/3	3/4
2年	2/3	3/4	4/4
3年	1/3	4/4	4/4

・すべて専門の教師で

・別室の環境を整える。

・5月20日より

・1年英語については2学期より

経過 ① 「高校へ行きたい」「授業がわかりたい」という気持ちを素直に出してくれた。又、学力だけは身につけさせたいという親の願いから、かなりの希望があり抽出生徒の決定に迷う。

- ・対象地域の生徒を核にする。
- ・塾へも行けず、私学へも行けない子
- ・「別室で教師がなんとかしてくれる」という甘えをすてさせ本来、原学級でがんばるものであることをくり返し指導。
- ・仲間のおかれている状態、生活を考えさせる。

という教師の取り組みがはじまる。

- ② 別室では、当初の目的がはたせられ“わかる喜び”をつかませられるが、教師が目指している学力、生きて働く力には今一步である。
- ③ 教師間でも“よりわかる授業”の工夫が芽生えている。
- ④ 子どもを通して、親の願いが再認識できる。
- ⑤ 子どもとのふれあいが活発化する。

- 内容**
- ① 数学科は、別室においてプリント学習を中心に進めている。
 - ② 英語科は、別室において単語を中心に英文の読み、書きを進めている。
 - ③ 国語科は、別室において対話を基として、正しい日本語が話せることと、漢字の読み、書きを進めている。

- 問題点**
- ① ほとんどの生徒が将来に対する展望ある目標をつかんでいるが、クラスで1～2名のあきらめの強い生徒は、意欲がなく原学級に残る生徒と別室においてがんばっている生徒との学力、意欲、意識面での差が開きはじめている。
 - ② 別室が授業につまづいた時の逃げ場所になっている面もある。
 - ③ 別室に行けば教師がなんとかしてくれる。という受身的な考え方の生徒が出はじめている。
 - ④ 別室から原学級にもどった時の自立性。

研究主題 **目標をもち自己実現をめざす生徒の育成をどのようにすすめるか**

愛知県春日井市立高森台中学校 河田博仁

1. はじめに

夏休みも終わり、一雨ごとに秋のさわやかな風が校舎をふきぬける昨今、3年生の生徒たちは進学・就職にと将来の進路を、真剣に考えなければならない時期がやってきました。特に本年は公・私立高校とも推薦制が導入されたり、入試教科が3教科から5教科に増えたことで生徒たちの心の中をより不安にしています。

身近で現実的な進路に、私達教員も戸惑っている現状ですが、その中において、進路指導本来の「人間の生きかた」・「職業感」・「自分を知る」といった内容を自分で考え、仲間達で話し合う時間を持ちたいと考えてきました。

2. 本校の様子と現状

本校は名古屋市のベッドタウンとして春日井市の東のはずれに計画された高蔵寺ニュータウン内に位置します。開校8年目です。保護者の方々は非常に教育的関心が高く、生徒たちの塾通いも盛んであり、高校進学率も極めて100%に近い状態です。しかし、元来が全国からの転入者の集まりで、愛知県の高校入試の様子が分からない人が多く、疑問や質問が高校のことに集中し、そのために現実的で必要最小限な進路指導になっていたような気がします。

2年生の3学期に学年懇談会を「学習と進路」というテーマで行った時のアンケートでも次のようになっています。

1. 進路について親子で話し合ったことはありますか。				
ある 84%			ない 16%	
2. 進路について話し合った時の中心の話題は何でしたか。				
5%	16%	14%	62%	3%
ア	イ	ウ	エ	オ
ア. 人間の生きかた	イ. 将来の見通し	ウ. 職業	エ. 進学	オ. 就職

3. 進路指導の考えかたとめやす

愛日地区の教育過程では「学級の時間」の中での進路指導の時間が、1年6時間・2年8時間・3年9時間となっています。しかし、進路指導は本来「学級の時間」だけではできるものではありません。僅かな時間を使った個別指導、朝や帰りのSTの時間など学校にいるすべての時間に関わる重要な指導です。本校では校内の生活全般に小集団を取り入れているので、STの時間などを利用して将来の進路等について話し合うようにしています。その折のめやすを次のように考えています。

- (1) 自分を正しく見つめ、自己に合った将来を展望し、そのための大きな目標を掲げ、それに向かって努力する姿勢を育てる。
- (2) 自分というものを多角的にとらえ、仲間の意見を素直に受けとめ、気づかなかった自分を発見するようにさせる。
- (3) 社会の一員としての自覚をし、小さな社会である小集団の仲間をお互いに尊重しあい、個々の役割を正しく認識し、行動に移していくことのできる生徒を育てる。

4. 進路指導の実践（小集団を通して）

一学期に「なぜ高校へ行くのか」というテーマで話し合った時の事、男子・女子とも「私だけ高校に行かないのは」とか、「このまま就職するのは」という意見がでたが、男子は「一流の大学へ入り、いい所へ就職したいから」という意見に対して、女子は「いまだき短大ぐらい出てないと」とか、「高校生活に憧れて」といった意見もいくつか出てきました。そこで今回の話し合いでは、「男性と女性の違いと平等」というテーマで話し合うことにしました。（資料は9月11日付中日新聞家庭版「みんなの教育」より）そして、ポイントを次の3つに絞りました。

- (1) 生まれてくるなり、男子は「たくましく」とか「積極的に」、女子は「やさしく」とか、「素直に」と育てられるが、どう思うか。
- (2) 男性が社会で働き、女性が家庭を守るほうが効率が良い、という意見をどう思うか。

(3) 大学進学率（男子38.6%・女子13.7%）及び短期大学の進学率（男子2.0%・女子20.8%）の現状（文部省の調べ）をどう思うか。

まず、STの時間に3つの課題を提示し、白紙に自分の意見をまとめるようにしました。その際は自分自身の考えを書かせたいので、一斉の形ですすめました。そして、次の学級の時間で小集団を使って話し合いを進めました。授業の様子は次のとおりです。

T. 今日、前に君たちに書いてもらった意見を参考にしながら、話し合いを進めようと思う。まず、最初の問いだが、君たちの小さい頃は男子と女子の育て方の違いがあったか。また、君たちが親になったらどうするか、という事を考えながら班で意見を出しあってほしい。5分間話し合いなさい。

〔班活動〕……………机間巡視（初めに発言をしてくれる人を決める）

T. はい、それではやめ、班で出た意見を出して貰おう。○班のA君、君たちの班ではどんな話がされたのかな。

A男. 僕は小さい頃から「男の子でしょ、しっかりしなさい。」と言われ続けてきたけど、みんな話を聞いていると、あまり区別なく育てられているみたいなので驚いた。僕の家では姉と僕とでは随分区別されていたと思うよ。僕としては当然だと思っていたんだが。

B子. (挙手→指名) それは偏見だと思います。女の子だって「積極的に」ならないと今はだめだし、優しくればいいってわけじゃないと思います。「たくましく」って言葉はあまり女子には向かないけど、「元気」とか「丈夫」だとかだったら当然女の子だって必要だと思います。(同感の声多し)

C男. (挙手→指名) 僕の班では、そんなふう育てられた男子が多いから男子に優しさが足りなくなったんだという意見が出ました。女子ばかりに掃除を押しつけて、いばってばかりいるって言われました。

☆ その後、男子と女子の意見の対立があり、やや騒々しくなる。中で出た意見をまとめると、

- ・女子の門限が男子より早いのはおかしい。(姉と兄の場合)
- ・先生だって学校で遅くまで残っていると、女子だけ早く帰れと言うのはおかしい。わからないわけじゃないけど。
- ・女の子だからそんなにレベルの高い高校へ行かなくて良い。近くでいいよなんていう親がいるけど、それはおかしいと思う。

☆ やや感情的な場面もあったが、参加度は高かった。

☆ 途中から、個人の意見が多くなってしまった。意見を言う人がやや固まってしまった。

T. いろんな意見が出たな。どっちが正しいという問題ではないが、お互いが異性の良さを知り、特性を理解した上で、助け合って付き合うことが大切だな。ただ男の子だからとか、女の子だからと言うのではなく、ひとりひとりの個性を大切にしよう。それでは次の問いに移ろう。男性が働き、女性が家庭を守るということについてどう思うのか。君たちのアンケートではほぼ半々の意見だったが、それについて話し合ってみよう。

☆ 話し合いの結果、発表された意見は次のとおりです。

- ・男性の方が給料もいいし、出世もしやすいから男性が働く方が効率がいいと思う。
- ・男性ばかりが能力があるわけじゃないから、能力のある女性はその能力にあった職業を選ぶのを妨げることは男性にはできないと思う。
- ・女性でも働きたい人は働けばいいと思う。しかし、男性と同じだけの給料を貰いたいなら宿直とか責任のかかる大事な仕事もしなければいけないと思う。女だからといって文句を言ってはいけないんじゃないかな。
- ・子守りをするのはやっぱりお母さんの方が似合っていると思うよ。
- ・家に帰ってお母さんが「おかえり」と言ってくれるのはやっぱりうれしいよ。かぎっ子には不良が多いんじゃないかな。

☆ 話し合いはかなり活発だった。できるだけ多くの人に発言させるため、班

の意見をまとめられない人もいた。友達の見解に対する第二の発言は多い。

☆ 男子・女子で意見が分かれると思ったが、女子の中にも「それでいい」と思っている人が多いのには驚いた。

☆ 小集団で話し合ったことで変化した意見としては、

・僕は、初め女性が家にいることが当然だと思っていたが、話し合っているうちに、やっぱり平等でなくちゃいけないと思うようになった。だって、共かせぎが多くなってきたし、男女で家庭内の仕事を分担しなくちゃいけないんじゃないかな、と思えてきたよ。

・お母さんの家での仕事を、もっと認めてくれる社会をつくらなくてはいけないと思う。

T. 女性が家庭に閉じ込められていると感じているうちは男性に苦情がくるだろうな。女性の家庭での仕事が、もっと目標となるような職業として認められればいいけど。でも女性ももっと将来について大きな目標を持つべきだと思うよ。なぜか、女性であることに甘えている人がいるみたいだからね。

☆ 3番目の問いに対しての見解はここでは省略する。ただし、生徒たちは来春実施される「男女雇用機会均等法」にはとても興味を示したようで、話し合っているうちにできれば四大へ行きたいと考えるようになった生徒が出てきたのは頼もしいかぎりだった。

5. 小集団をおこなう上での留意点

(1) 小集団での話し合いで一人でも多くの生徒を授業に参加させる。

a. 6人の話し合い中で、必ず一回は発言しよう。(一人一発言)

b. 仲間の意見に付け加えたり、自分と違う意見の時はすぐ発言しよう。

(第二の発言)

(2) 個人思考を小集団での話し合いにおいて修正し、積み上げさせる。

a. 仲間の意見を素直に聞けるようになる。

b. 自分の意見を出来るだけ分かりやすく説明しよう。

c. 話し合いで得たよい意見は確実に自分のものにしよう。

(3) 課題を適切に提示する。

a. 話し合う価値のある課題を与える。

b. 話し合いが深まる課題を与える。

c. 課題により適切な話し合いの時間を与える。

(4) 小集団の人間関係を正しく育成する。

a. 名指しで発言させるが、決して中傷ではないことを事前に説明しておく。

b. 常にフェアな心で討議し、正しい目で評価しあおう。(少数意見尊重)

c. 自分のグループが高まれば自分自身も高まることを体験しよう。

d. 協力し、教え合うことでグループが高まっていく喜びを体験しよう。

(5) 小集団学習で陥りやすい点を把握させる。

a. 無駄話を追放しよう。

b. 人に頼ってばかりではいけない。自分でまず考えよう。

c. 姿勢にはきをつけよう。先生が話している時は体を前に向けよう。

d. 話し合いが活発になるあまり、他の班に迷惑のかかる大声は慎もう。

6. おわりにかえて

小集団での話し合いは、とかく時間がかかり面倒だと思われています。事実私もあせって、生徒たちに無理やり知識を押しつけてしまうことがあります。しかし、生徒たちはとても素晴らしい考えを持っています。一斉学習では表に出ない意見を小集団の話し合いの中でうまく引き出してやる、それも小集団学習の利点です。そのためには、班長への指導・班内での話し合い方の助言・人間関係の育成等、まだ不十分な点について努力をしなければならぬと思っています。本校での小集団は、まだ初歩の段階で全職員での徹底した研究が進んでいませんが、今後積極的に小集団(バズ)の研究を進め、研修に励みたいと思います。

研究主題

「自己の進路を自らきりひらいていく生徒の育成」

33

要 旨

人は小さいころから将来への夢を持っている。その夢は自分の成長とともに実現可能な目標へと変わっていく。その目標をよりよいものにするには自分の能力・適性を知り、進路の情報をさぐり、先生や家族と話し合い、自己決定し、目標に向かって努力しつづけねばならない。しかし、現実には単に教科の成績のみによって志望高等学校や就職先を決定しようとしている。このことが中学3年の後半になったときに生徒が気持ちを落ちこませたり、なげやりな態度になる原因となっている。また、就職した生徒の多くが転職したり、進学した生徒の296強が1年間に中途退学しているという現実になってあらわれている。そこで、生徒と生徒、生徒と教師のかかわりを深め、よりよい人間関係を養い、生徒に自己の進路を自ら考え、調べ、決定していく能力を身につけさせる援助をすることをめざしていきたい。

研究内容

1 「進路学習ノート」を活用した指導

学級指導として行い進路の適切な選択の学習はややもすると深まりのないままに終わりやすい。そのため生徒に「進路学習ノート」や「進路の手びき」等を持たせ、ノートに書きつづらせることによって自己の生き方に関心をもたせる。また、進路相談を通して自分のなやみを自己解決できる能力を養う。

(1) 「進路学習ノート」の活用をはかる年間指導計画を作成した。

年間計画

第1学年

1 学 期				2 学 期				3 学 期		
4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
		わたしの夢	わたしの進路	働くということ	いろいろな進路	人と個性	自分を知り、のびす		先輩に学ぶ	自分の進路を考える。

第2学年

	将来の生き方	働く理由	職業の種類	進学目的	上級学校 (1)	上級学校 (2)		上級学校 (3)	私の進路希望
--	--------	------	-------	------	----------	----------	--	----------	--------

第3学年

進路への心構え	進路の設計	進路選択の条件	進路相談	進路先の調査		進路のための準備	進路のための準備		受験の心構え	卒業後の心構え
---------	-------	---------	------	--------	--	----------	----------	--	--------	---------

(2) 「進路学習ノート」は昭和59年度からの使用であり、学年研修において教材研究、各教師1回以上の研究授業を実施し研究会を行い、また、講師(神大富本教授、市教委指導主事、進路学習ノート作成者)を招いて年4回の職員全体研修会を行った。

(3) 進路学習の授業は①生徒たち自身で課題を考え、調べる。②グループで話し合い、まとめて発表する。③全体のまとめをする。というグループ学習の形態ですすめている。

生徒の進路学習ノート記入例

—わたしの夢 (1年)—

<p>ミ=新聞</p> <p>はじめの希望 先ずは、自分の将来の夢を、新聞記者にしたい。そのためには、まず、英語を勉強し、新聞の編集や取材の仕事をしたい。</p>	<p>将来の希望 私は、理数系の教科が好きなので、将来は電子工学に進みたい。そのためには、まず、数学と物理を勉強し、実験もしたい。</p>	<h1>道</h1>
<p>職業について、上で調べたことをまとめよう。</p> <p>自分にあいそうな職業の種類や名称 子どもを相手にする仕事がいいので、幼稚園か小学校の先生にしたい。</p> <p>その他 タイピスト、編集者なども興味がある</p>	<p>その職業を選ぶ理由 先生 = 中学校の先生は勉強がむずかしいからあんまり自信がない でも子供好きだから小学校...できれば幼稚園の先生がいいな タイピストはタイプライターの好きだから(今度買いたい)</p>	<p>プロフィール 氏名 性別 女 学年 4 年 科目 A 趣味 お茶屋 お茶 ILP-コンシンク</p>

—将来の自分の職業 (2年)—

<p>○ 職業について、上で調べたことをまとめよう。</p> <p>自分にあいそうな職業の種類や名称 子どもを相手にする仕事がいいので、幼稚園か小学校の先生にしたい。</p> <p>その他 タイピスト、編集者なども興味がある</p>
<p>○ その職業を選ぶ理由 先生 = 中学校の先生は勉強がむずかしいからあんまり自信がない でも子供好きだから小学校...できれば幼稚園の先生がいいな タイピストはタイプライターの好きだから(今度買いたい)</p>

(4) 生徒が自分で調べ、考える資料として次の項目からなる45ページの冊子を作成し授業、進路相談、保護者との懇談会等に利用している。

- 第1章 職業の選択
- 第2章 就職の手順と資料
- 第3章 各種学校の紹介と手順
- 第4章 高等学校(高専)の選択
- 第5章 進学の手順と資料
- 第6章 受験期の心得

(5) 平素の教育活動を通して生徒と教師の信頼関係を確立する。この信頼関係を土台として、時を失しない相談活動により悩み、迷いの解消につとめる。

生徒と教師 - - - (定期の相談、随時の相談)

生徒と保護者と教師 - - - (保護者会、家庭訪問)

—相談での発言例—

・ 絵を書く仕事をしたい。将来の生計を考えると絵では不安。美大をめざさないでふつうの大学を出てから考えるのがよいか。

・ 水族館の飼育係のような仕事がむいていると思うが、大学への進学は必要だろうか。

・ 電話交換手のような仕事がしたい。商業高校はどんな勉強をするところですか。

・ 考古学か天文学かをやりたい。そんな職業につけるだろうか、趣味としてするのがよいだろうか。

・ 父と同じ車関係の仕事がいいと思うが夜がおそくて大変だ、しかし、時間の自由がきくので商売もいいと思うのですが。

進路相談表

昭和52年 延徳中学校

氏名	〇〇〇〇	学年	
相談日	1月 日	2月 日	3月 日
相談時間			〇〇〇〇

相談内容	通 訊 美術と並んで13...3ヶ月間の人と言葉を変えたい
相談結果	
相談者	
相談場所	

相談内容	全別科進科(名大校) 理系進科(高専校)
相談結果	
相談者	
相談場所	

相談内容	他人の学歴は大きく進学に対する意味を大きく 1. 高校(2年) 進学(2) 進学(2)
相談結果	
相談者	
相談場所	

相談内容	高校の総合校) 職業科の中で
相談結果	
相談者	
相談場所	

氏名	相談日	相談内容(生徒) (教師) (保護者) (その他)	相談結果
〇〇〇〇	1/10	理系進科(高専校)と並んで13...3ヶ月間の人と言葉を変えたい	1. 高校(2年) 進学(2) 進学(2)
〇〇〇〇	1/10	全別科進科(名大校) 理系進科(高専校)	
〇〇〇〇	1/10	他人の学歴は大きく進学に対する意味を大きく 1. 高校(2年) 進学(2) 進学(2)	
〇〇〇〇	1/10	高校の総合校) 職業科の中で	

2 支えあい、はげましあえる集団の育成

人が生きていく基盤は信頼できる友、助けあえる友があることである。この人間関係づくりをめざして学級会活動、学校行事、生徒会活動等は計画、実行、評価を生徒自身の手で行わせ、教師はその援助にあたっている。このことが自主性、所属感、連帯感の育成につながっていると思われる。

(1) 基本的な生活習慣は社会生活を営むうえで人間関係を保つ人としての最も大切なことである。その育成をめざして家庭と協力しあいながらおしすすめている。

- ・ 時間を守る。「あいさつ」をすることの徹底
- ・ 生活態度、服装のチェック
- ・ 保護者への啓発と連携
- ・ 生徒会や週番の自主活動

(2) 主体的に自己決定できる生徒、協力しあえる人間関係をめざして生徒自身がとりくみ、活動する場を多くしている。

① 教師主導型の行事から生徒主導型の行事への移行

学校主導型	折中型	生徒主体型
<ul style="list-style-type: none">・ 儀式的行事・ 訓練的行事	<ul style="list-style-type: none">・ 体育大会・ 修学旅行・ 自然教室・ マラソン大会	<ul style="list-style-type: none">・ 新人生歓迎の果い・ 対面式・ 夏季体験・研究発表・ 卒業生交歓会・ 文化発表会・ 陸上競技大会・ 球技大会

② とりくみの例

本校では2年の修学旅行で京都の嵯峨野を、3年の修学旅行では長崎市内を班別に自由行動させている。その内容は班(グループ)で計画・実行・評価の話し合いをし、支えあり班活動・主体的に判断し、計画していく班活動・各自が係としての責任を果たし自主的に実践していく班活動をめざしてとりくんでいる。

(3) その他、互いにはげましあえる仲間づくりの場、個性・特性の発見伸長の場、礼儀作法・ルールを守る場としての部活動の振興をめざしてとりくんでいる。

3 基礎学力の定着と自主学習習慣の育成

- (1) 学級での学習スローガンの作成、係生徒の活動、朝学と確認テスト
- (2) わかる言葉での授業、教育機器の活用、どの子にも目を注ぐ授業
- (3) 自主研究と作品展、研究や体験の発表会、「学習の手びきの活用」
- (4) 教育相談
- (5) 班での話し合い学習

4 保護者との連携

進路指導は保護者の理解と協力がなくては成果を取めることはできない。学校と家庭が相互理解のうえにたって進めるよう努力している。

- (1) P T A全体会において、進路指導の目標と基本方針 並びに 計画の概要を説明し共通理解をはかっている。

(5月 P T A総会、5月学年別総会、10月学級懇談会、11月進路説明会)

- (2) 個々の生徒の不安や悩みを解消し、意欲と展望を持たせる生徒・保護者・教師の相談活動をすすめている。

(家庭訪問、7月12月 1月(3月)の保護者会)

- (3) P T Aの広報活動として「城乾」を年2回、学年だより(英知、自律、集い)を年1回、また、学年のとりくみとして「学年通信」を月1回出している。これらの中に進路についての記事をのせ、家庭と学校の連携をはかるとともに保護者の意識の向上をはかっている。

— P T A 機関紙「城乾」の例—

●あなたは子どもに将来の計画を立てさせたことがありますか。(複数可)

ある 100人
ない 298人
総票数 408

●将来の計画を立てたという人は親子とも半数以下です。また娘のなかで無計画の人が三一人もありました。無計画なものでしょうか。●将来のことは、進路に就いていても、その時々の時で考えていなければならぬのではないのでしょうか。

●あなたは子どもに将来の計画を立てさせたことがありますか。(複数可)

ある 298人
ない 330人
総票数 638

●あなたはお父さん、お母さんと将来について話し合ったことがありますか。(複数可)

ある 298人
ない 330人
総票数 638

●子どもと将来について話し合ったことがありますか。

ある 344人
ない 148人
総票数 493

●親子とも同じような結果が出ています。やはり将来についての話し合いが必要があります。子どもに希望を持たせる意味でも必ず実行していただきたい。

進路について

NO. 12 59,720.

PTA・広報部

〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

TEL 03-3261-1111

FAX 03-3261-1112

© 1998 城乾PTA



NO. 14 40 720.
 中城庫中学校
 PTA・広報部
 〒974-0202 福島県いわき市
 中城庫 1-1-1
 TEL 0246-23-1111

会談座
 6月11日(火)

八年目を迎えて 進路問題を考える

今、私たちは子供達のために
 何をしたらよいか、何をしようか！

開会 本日は校長先生をはじめの皆様
 方お集まりいただきありがとうございます。
 本日は、進路問題を考えるというテーマ
 でお集まりいただきありがとうございます。
 本日は、進路問題を考えるというテーマ
 でお集まりいただきありがとうございます。

校長先生、本校中学位置は、今年
 になり一時的にどんなに困難でも
 マンションに転居する時期だといわれて
 います。本年の方針を含めて
 お願いいたします。

校訓を再確認し 三本の柱を立てる

定例 開校四十年、おられた
 先生方もおそろしくお集まりいただき
 ありがとうございます。進路問題を
 考えるというテーマでお集まりいただき
 ありがとうございます。進路問題を
 考えるというテーマでお集まりいただき
 ありがとうございます。

進路指導
 そのためにPTAは
 何をすべきかを考える

進路指導
 そのためにPTAは
 何をすべきかを考える

進路指導
 そのためにPTAは
 何をすべきかを考える

(4) その他、PTA会員による高等学校の訪問(バス2台)ビデオによる高等学校の紹介を行っている。

5 今後の課題

進路指導はひとりひとりの生徒が自己に適する進路を選ぶ能力を身につけ、目的と意欲をもって日々の生活にとりくむことの援助である。その達成には、支えあい、はげましあえる人間関係と自己決定の能力を養い、これを基礎として学びつづけようとする意欲・態度の育成をはからねばならない。

- (1) 生徒の活動を大切にしていけるための時間確保
- (2) 指導・援助にあたる教師が多くの上級学校や職業についての知識を得なくてはならない。
- (3) 班の話し合いの中で本音を出せるグループづくり

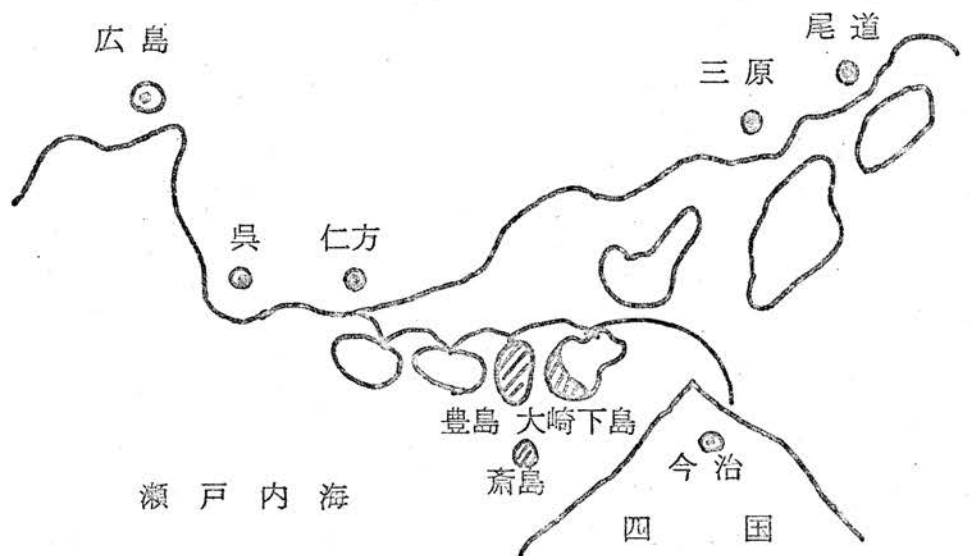
研究主題 【 地域課題をふまえた指導のあり方 】

広島県豊田郡豊浜町立豊浜中学校 望月 民雄

1. 生徒をとりまく環境

① 地域の実態

- ・本校は、広島県南部・瀬戸内海に浮かぶ豊島（12km）と大崎下島の一部と齋島（4km）の三島からなる豊浜町にある。



- ・職業分布は、小型漁船による漁業とミカン栽培の農業とに二分される。漁業は、単独漁法で家族労働にたよるため長期の不在家庭が多く、農業でもミカン不況による出稼ぎが急増している。

② 生徒の生活状況

- ・本校生徒の過半数が漁業家庭であり、幼児期には、両親と共に船上生活をおくり、就学年令になると兄弟・姉妹との生活がはじまる。

24

※ 両親不在の生活状況

	人 数
・本人だけで生活している	7人
・兄弟姉妹で生活している	17人
・祖父母と生活している	26人
・学寮で生活している	22人
計	72人
全校生徒に対する%	40%

③ 学 校

・本校には、豊島小学校（児童数 227名）、大浜小学校（50名）、蕭小学校（3名）より入学してくる。

大浜小学校から入学してくる生徒は渡し舟で通学し、蕭小学校から入学してくる生徒は寄宿舎に入っている。

④ 進 路

・卒業生の98%は進学し、2%は県内企業に就職する。進学者の40%は、となりの島にある高等学校に進路をとり、残りの60%は呉・広島方面の高等学校に進学し下宿生活に入る。

2. 教育的問題点

・本校には、他校には見られない独特な生活体験を持つ生徒が多い。幼児期には、父母と共に船上生活を送り、就学年令に達すると両親不在の子どもだけの生活に入ることである。こうした状況には、次のような問題がある。

- ① 基本的な生活習慣がつけられていない
- ② 社会性に欠ける面がある
- ③ 言語量の不足

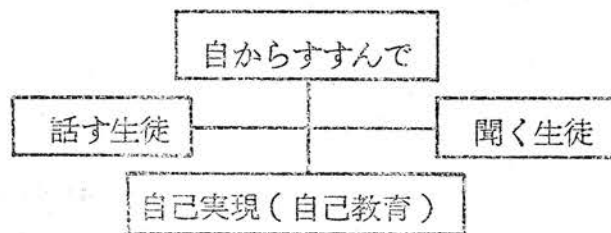
①は、生まれて学令期まで父母との船上生活、その後は、子どもだけの生活に入ることから生活は不規則となり基本的な生活習慣に欠ける。

②③は幼児期の船上生活で、話す相手は両親以外にはおらず遊ぶ友達のいないことにより、語彙量の不足をきたし、その後の学習へ影響を与えている。このことは地域の課題であると同時に本校の教育課題である。

3. 教育課題（地域課題）への取り組み

① バズ方式の導入

こうした教育課題を克服するため、集団の相互作用を通して学力を伸ばすことと、人間関係を高めることを同時に達成させることをめざしたバズ学習方式が取り入れられた。教科によるバズ学習は、もち論のこと 学校生活の全領域でバズ場面が活かされている。



② 幼小中高 一貫教育態勢づくり

・地域ぐるみの取りくみなくしては真の解決にはせられないとの考えから、〔地域の教育課題をふまえた教育内容の創造 — 幼小中高一貫教育態勢づくりをめざして〕という主題のもと豊浜町と豊町にある幼稚園5園、小学校6校、中学校2校、高校1校の計9校5園の全学校が参加して一貫教育態勢づくりをめざす共同研究組織がつくられた。5ヶ年にわたる学校生活を中心にした実態調査を行い、この地域のもつ教育課題を具体的に、は握し

全校共通実践目標として

〔共に生きる集団づくり〕

〔教育活動の全領域で言語認識を〕が設定された。

こうした共通課題のもと授業研究・研究発表・情報交換をしながら課題解決につとめている。

本年度、推進協のなかで、基本的な生活習慣の確立を幼小中高の一貫態勢のもとでどうとりくむかと、生活指導委員会を組織して活動をしている。その中で、具体的には、夏休み前の会合で各校の夏休みの指導計画を持ちより話し合い、自転車の2人乗り・危険な花火などについて、商工会と連絡をとって販売をしないとか、地域に放送で呼びかけて地域の協力を求めて成功した例もある。

③ 町内バズ

・本校の教育課題は、地域の課題でもあり地域ぐるみの取りくみなしにはむつかしいとの考えから、家庭・学校・地域の結合の場として町内バズが取り入れられた。

- 保護者・生徒・教師の人間関係の向上をはかる
 - 地域住民の教育に関するゆさぶりをかけ理解と協力をはかる
 - 家庭学習の習慣化をはかる
 - 各会場ごとの自主的活動と協力をはかる などを
- 目標として毎週水曜日の放課後、町内の10会場(1会場約20名)で教科学習をしたり、地域の清掃をしたり、レクレーションなどの地域活動をするものである。

④ 地域懇談会

・毎月一回の授業参観の他に学期に一度、各地域に出むいて保護者と諸問題について話し合い学校教育に対する理解と協力をお願いすると共に保護者の願い、子どもの生活状況などを聞かせてもらっている。

⑤ 巡回指導

・各地域に教員住宅が建てられており、日頃から夜間の巡回指導を行っているが、今年度から学校教育問題懇談会という組織がつくられ(小中高のPTA・町の校外補導委員・警察・教員-----)夏休みの夜間の巡回指導と、声かけ運動が行われ、その後町の公報や、放送を利用して地域に呼びかけが行われている。

⑥ 海の清掃と交通安全指導

- ・ プールを持たない本校では水泳場所の清掃を生徒が行っているが今では町民あげて協力していただけるようになった。
- ・ また、「1」のつく日は交通安全の日と定められ、生徒会役員・教員と共に警察・婦人会・町職員の方々も協力して指導してくれている。

4. 今日、社会的には、いじめ・暴力・無気力・無目的- - - - - など問題が山積みされており、物の豊かさに比べ心の豊かさがついていけなかったという反省も聞かれる。ともすれば事後の反省だけが残っていくという時だけに、おしえる事はしっかりおしえ、ゆさぶり、多くの体験を通して学んでいく子どもを学校・保護者・地域社会が手を取りあって育てていかなければなりません。

不在家庭の問題も、学校教師が2~3人の子どもを住宅にあずかって通学させるという例も出てきて、民生委員会・教育委員会その他の関係者の協力で親代りの養護施設として、豊浜学寮が開設されることとなったと聞きます。まず私達が活動することによって地域の理解と協力を得て、地域の子どもは、地域で育てる運動に高めていくことが大事だと考えています。

2012大会
論文発表

楽しい学級集団をもとめて

京都女子大学附属小学校 川村 憲 雄

要 旨

- 1 新しく編成された3年生をもとにして、児童が何を考え何を目的として友達を捜し集団を形成していくのか、その意識の変化に焦点をあてソシオメトリックテストによって分析を試みた。
- 2 このソシオメトリック・テストの結果をコンピューターで整理し分析できるシステムを作成し、それがさらに汎用性を持つシステムへと再構成し努力しようとしている。

1. 目 的

六才から十二才といった学童期の子ども達は、その社会生活の範囲を自我の世界から徒党（小集団）の世界、そして、集団の世界といった三つの世界を同心円的に押し広げていくことによりその生活経験を豊かに獲得していくものと考えることができる。その中でも、小学校三年生といった年齢は一般にギャングエイジといわれ、遊びの中においても徒党を形成し活動しようとする潜在的活動力を持った時期であり、学習活動の中においても小集団を形成して相互作用を与えながら社会的思考を深め形成しようとする時期である。

すなわち、低学年期のような「親と私」「先生と私」「友達と私」といった自己と他者の二者関係の世界から、「友達と友達、そして、私」「友達と先生、そして、私」といった自己と多者関係、特に友達社会へと移行を始め、その意識下では親・兄弟といった肉親関係への信頼から友人への信頼関係に重みをおこし始める時期である。

とすると、低学年の家族的雰囲気を持った世界から仲間社会へと移ろうとする児童達に焦点をあて、その学習仲間や、遊び仲間がどのようにして

形成されていくのか、特に、年長の指導的立場に立つものがない平面的社会の中で、児童が何を考え何を中心として集団を形成していくのか、その力動作用をみることはよりよい学級集団を形成するための一方略を考察する上で大きな力となるものであると考えることができる。本研究は、小学校三年生に焦点をあてその学習仲間・遊び仲間の意識態度についてアンケート調査を行ない、年長者のいない平面的社会の中で児童が何を考え何を意識して集団を形成していくのか、その集団意識を探ることからよりよい学級集団を構成するための一方略を考察しようとするものである。

2. 方法

- 1) 調査日時 一回目 … 昭和59年12月10日3校時
 二回目 … 昭和60年 3月10日3校時
- 2) 被験者 京都女子大学附属小学校3年2組38名

- 3) 調査方法

質問に対しては自由記述とし、友達と相談しあうことは禁じた。
時間は1時限(45分)としこの時間内で答えさせた。

- 4) 調査内容

問題は以下に示される(ア)から(オ)までの5つの内容のもとに19個の質問項目から作られている。

- (ア) 班仲間について
- (イ) 学習仲間について
- (ウ) 班活動について
- (エ) 遊び仲間について
- (オ) 机の配置について

また、学級集団の中において児童の意識に対してマイナスの影響をおよぼすと考えられる、例えば、「この学級の中で、だれが一番きらいですか。」「この学級の中で、あまり遊びたくない人はだれですか。」といった質問はさけることにした。

記述された質問事項・選択事項については、必ず、その説明を要求し記述させるようにした。

3. 結 果

本結果については、(1) 学習友達について、(2) 遊び仲間について、(3) 机の配置について、の3項目についてのみ考察することにする。

(1) 学習友達について

「あなたはこの組の中のだれといっしょにべんきょうがしたいですか。なまえをかいてみましょう。」といったように、一緒に勉強したい児童の名前を記述させそれを整理し、一人の児童が選択した人数を示したものが図-1である。

図-1からわかるように1回目と2回目の選択人数の増減の様子をみると、男子は増加しているが女子は減少していることがわかる。

表-1からその選択した理由についてみると、1回目男子はぼらつきがありまとまりがなかったが、女子は「好きな人」「友達だから」という理由の選択が多かった。次に、2回目の理由についてみると男子・女子ともに「友達だから」という理由が多くなっていることがわかる。

(2) 遊びについて

「あなたはこの組の中のだれといっしょにあそびたいですか。なまえをかいてみましょう。」といったように、一緒に遊びたい児童の名前を記述させそれを整理し、一人の児童が選択した人数を示したものが図-2である。

図-2からわかるように1回目と2回目の選択人数の増減の様子をみると、男子は増加しているが女子は変化がないことがわかる。

表-2からその選択した理由についてみると、1回目男子・女子ともに「おもしろいから(たのしいから)」という理由に集中しているが、2回目の理由においては、男子・女子ともに「おもしろいから(たのしいから)」という理由のほかに「友達だから」という理由を選択する児童が多くなっていることがわかる。

(3) 学習のときの机の配置について

本学級では、机を、一学期には黒板の方に向けた学習を、二学期にはお互いに向かい合った席で、そして、三学期もお互いに向かい合った席で学習をした。その変化のなかでどちらの座席配置の方が子ども達にとって好

ましいのか尋ねてみた。

図3. 1は向かい合ったときの学習が楽しいかどうか尋ねたものである。これをみると、机を向かい合わせて学習することのほうが「楽しい」と答える児童の方が一・二回目ともに多いことがわかる。次に、次の学期には机を向かい合わせて勉強がしたいのかどうかその意思を尋ねてみると、図3. 2にみられるように、机を向かい合わせて勉強したいと答える者のほうが黒板へ向いた方と答える者よりも多くなっていることがわかる。

表-3. 1はその選択理由について書いたものである。その理由には、一回目の調査のときは「楽しいから」と答える者が多かったが、二回目の調査のときは「楽しく勉強ができる。」「みんなと相談ができる。」といった目的意識を持った理由を書くものが多くなっていることがわかる。

4. 考 察

学級を再構成した三年生という学年では、友達に対する意識は始め何等理由を持たないで寄り集まっていた「寄り合い集団」から、「友達」、特に、「おもしろい」「楽しい」といった「お楽しみ集団」へ、更に、その友達を楽しい「遊び友達」から「相談する相談相手・仲間」「話し相手」といった意識集団へと変化させていき、お互いの思考の中に何か共通点を見つけ同化していこうとする傾向をみることができる。

とすると、この時期の友達関係を育成することは学童期後半の人間関係、さらには、その思考力・学習意欲といったものに大きな影響を与えるものであり、教師はその社会関係については十分注意を払わなければいけないといえる。

こういった児童の社会関係について分析考察するための方法としてソシオメトリック・テストの活用を考えることができる。しかし、このソシオメトリック・テストの実施・分析には、多大な時間と労力と専門的知識を必要とするものであり簡単に実施できないのが事実である。

そこで、筆者らはこのソシオメトリック・テストをコンピューターにプログラムするとともに、その専門的知識を取り込むことにより、学級の社会関係を思考し判断し教師の意思決定を支援してくれるシステムを現在作成しようとしている。

それは、ず4-1に表わせるような基本的データ一図のもとに学級成員の相互選択の様子を図や数量化していき、それを利用する教師の任意の考

え方に合ったグループ構成を容易に支援してくれるようなシステムを構築しようとしているのである。

このシステムについては、現在思考再構成中であるのでその詳細については次の機会に発表したい。

＜ 資料 ＞

図-1 勉強したい友達の数

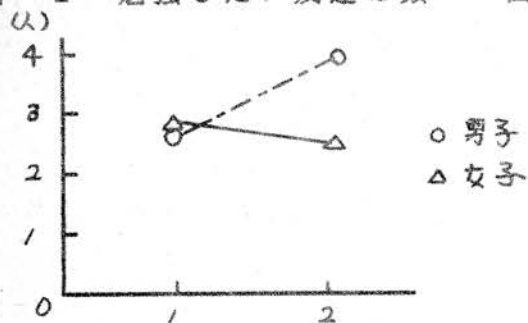


図-2 遊びたい友達の数

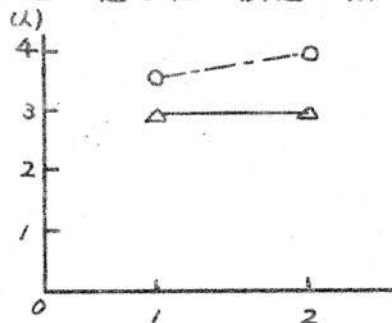


表-1 いっしょに勉強したい理由

	1回目		2回目	
	男	女	男	女
あそんでいたから	2	2	1	3
おもしろいから	2	1	1	1
友達だから	3	5	6	5
好きだから	2	6	1	3
たのしいから	1	2	2	1
一年生から同じ組だから	1	0	1	0
スポーツをよくするから	1	0	0	0
仲良く勉強しあえるから	2	0	0	4
あまり仲が良くないから	0	1	0	1
言うことをきいてくれる	0	1	0	0
頭がいいから	0	0	2	0
静に勉強ができるから	0	0	2	1

表-2 一緒に遊びたい理由

	1回目		2回目	
	男	女	男	女
友達だから	3	3	4	4
あそびたいから	3	3	1	2
いい人と思うから	1	1	1	2
たのしいから	5	8	4	5
すきだから	1	1	1	3
仲良く遊べるから	1	2	3	3
いろいろな事を教えてくれる	0	1	1	1

< 資料 >

図-3.1 机の配置 (%)

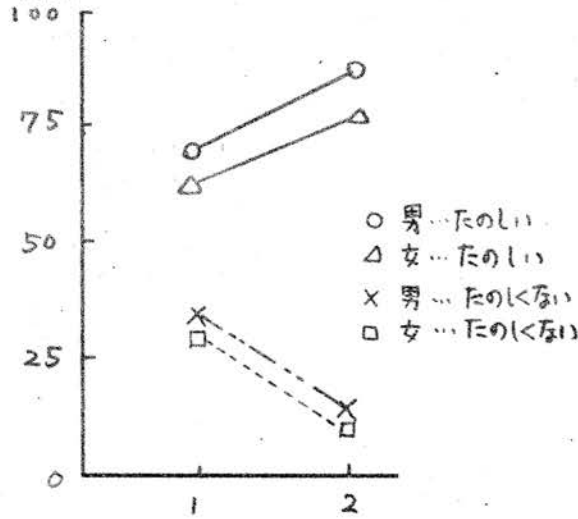


図-3.2 次の学期の机の配置 (%)

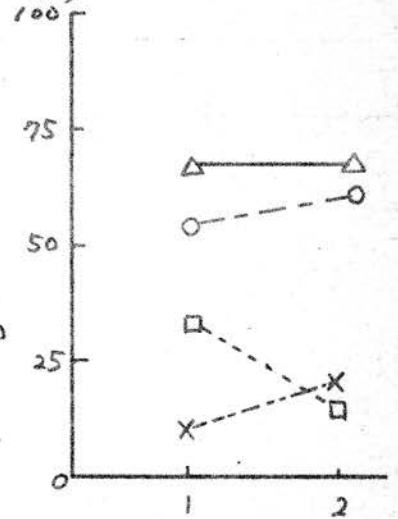


表-3.1 机を向あわせたい理由

	1回目		2回目	
	男	女	男	女
楽しく勉強ができる	5	5	2	1
みんなと相談ができる	1	3	6	5
みんなと協力ができる	1	0	0	0
楽しい	1	3	3	1
友達の顔がみえる	2	1	1	3
友達がふえる	0	0	0	1

表-3.2 机を向あわせたくない理由

- 先生の書いた字がよくみえない。
- 黒板がみにくい。
- 一年生のときからしていないから
- 隣や前が答えをみたりぬもうとするから
- 顔をみ合っていると文句をいわれるから

図-4 ソシオメトリックテスト Row DATA

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	A	B	C	
1		A	A		A	A		B	A	A				A	A		B	A	9	2	0	
2			B		A		B			A	A			B				A	4	3	0	
3											C		B				A	B	1	1	2	
4							C	B					C				A		1	1	2	
5								A				B						B	1	2	0	
6																		B	0	2	0	
7											C	C			C	B		B	0	2	3	
8																	C		1	0	1	
9																			0	0	1	
10													C	B	C	B		C	A	1	2	2
11														A				B	1	1	0	
12																			0	0	0	
13																	B		0	1	0	
14																	B		0	1	2	
15																		B	0	1	0	
16																			0	1	0	
17																			0	0	0	
18																			0	0	0	
A		1	1	0	2	0	2	0	0	2	2	0	0	2	1	0	2	3				
B		0	1	0	0	0	1	1	1	0	1	0	2	1	1	3	1	5				
C		0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1	2	1	1	0	2	2				

A B C
 : : :
 相被選
 互選扱
 扱者者
 者者

20日 研修

研修講座 (小学校)

バス学習の実践

岐阜 小島 幸彦

1. バス学習との出会い

(1) 昭和23年生れの子どもたち (ベビーブーム)

非行の続発 進学戦争

・・・学力と人間関係を高める指導の統合

↓
部活と復習バス

⇕
学力を非行のない学校
がっコ

(2) 37才になった教え子との同窓会で

- ・バス二世
- ・「継続は力」

2. 瑞浪小学校での実践

(1) 教育構想 ・・・資料 /

・心と形 情けある子

・不如意の教育

(2) 研究の視点 ・・・資料 /

・子どもの奥ゆきをとらえる (子ども理解)

・授業を動かす軸となる子ども及びそれにかかわる子どもを予測する。

(組織化) ・・・資料 2, 3, 4

・子どもがつくる授業の充実を図る (実践・充実)

(3) 人間関係の最少単位としてのペア ・・資料5

- ・隣の机のお友だち ペア+ペア+・・・
- ・1-6 2-5ペア, ペア学級 親子ペア
給食 清掃 児童集会 勉強会 お楽しみ会 小遠足など
・・・教えることにより学ぶ

(4) 授科指導における生徒指導「同時（付随）学習」

(5) 自由バス

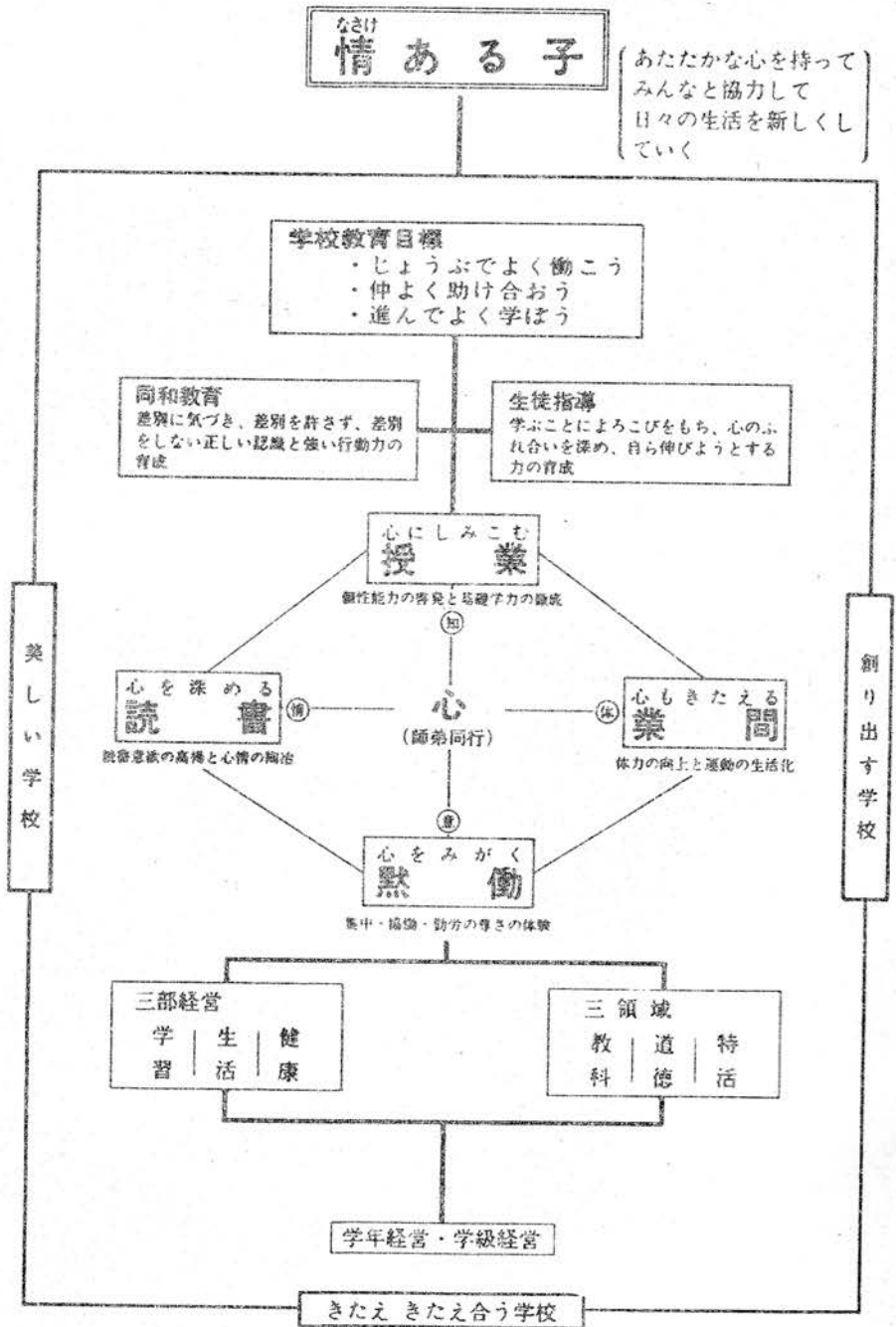
- ・短時間に
 - ・課題の質を吟味して
 - ・学級の成熟度
 - グループ成員の数 グループの数 孤立児 男女のバランス
 - リーダーの評価
↓
現在のグループのままで
- （ 同じ考えの者が集まって ・・資料2 3 4
 違う考えの者との交流

3. バズ学習の実践のために

- ・職員のと（職員バス）
- ・思いが強ければ道は開ける
- ・継続は力

II 教育計画

(1) 教育構想



(3) 研修計画

1. 研究の目的

わたしたちは、本校教育目標「仲よく助けあおう」「進んでよく学ぼう」を具現していくために「①進んで問題をとらえる ②級友と支えあう ③問題の解決に向かって意欲的に学習に取り組む」即ち、「自ら求め、自ら学び、共に学び、共に求める（自己教育力ある子）を当面する目標として具体的に考える。そして、これらを具体化していくため、指導目標のあり方・子ども理解・教材解釈・指導過程と方法の解明を研究の目的ととらえている。

わたしたちは、「授業こそ生命」と考える。また、授業研究こそ研究の中核であると考え、この立場から、「心にしみこむ授業」を実践することにより、子ども達ひとりひとりに成就感・満足感を与える授業を目指し、研究推進している。そして、前年度までの成果として、「・事象から問題を見つける力 ・自分なりの考えづくりをする力 ・友達とのきたえあいの中で問題を解決しようとする態度」に高まりが見られるようになった。今年度は、さらに、問題発見から解決に至るまでの追究の持続性の強化を図るため、次のテーマを設定し、研究を推進していきたい。

2. 研究テーマ

心にしみこむ授業

問い続ける子を求めて

〈問い続ける子〉

- ・常に対象に働きかけ、問題を持つようとする子
- ・経験を足場に、自分なりの考えを持つようとする子
- ・粘り強く考え続けようとする子
- ・自分なりの生きる姿勢を持つようとする子

3. 研究内容

研究をより焦点的にしていくため、次のように視点を設けて、研究の累積を図る。

〈研究の視点〉

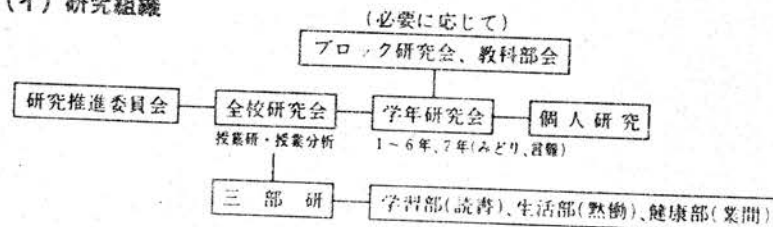
1. 子どもの奥ゆきをとらえることを具体的な目標とする（子ども理解）
2. 授業を動かす軸となる子ども、及びそれにかかわる子どもを予測することを具体的な目標とする（組織化）
3. 子どもがつくる授業の充実を図ることを具体的な目標とする（実践・充実）

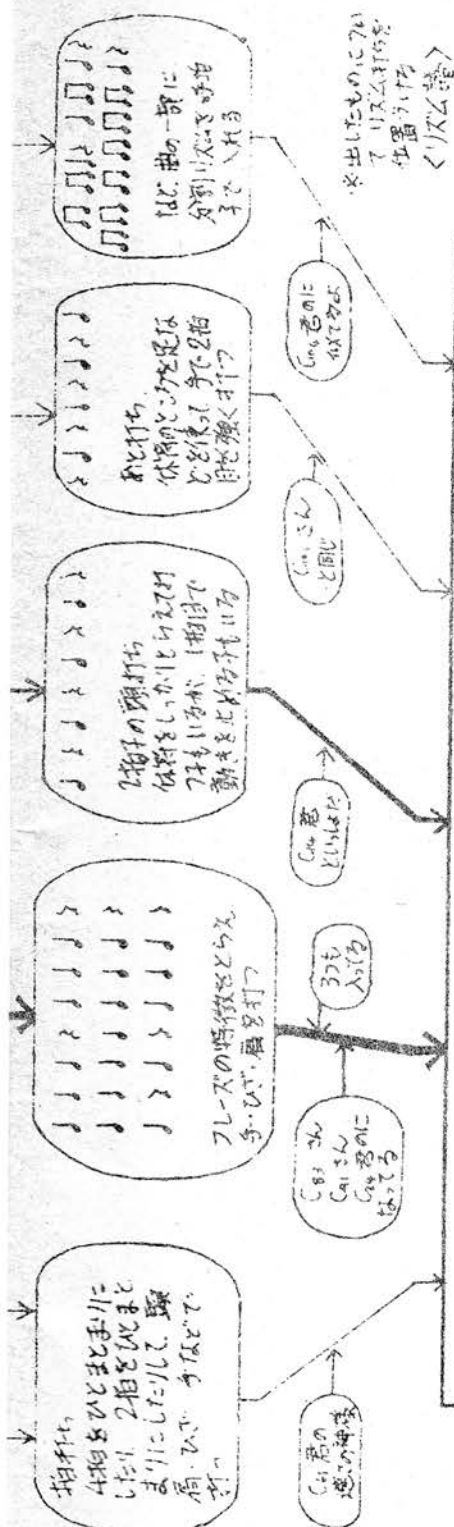
4. 研究方法

(ア) 基本的な立場

- ① 個人研を主体とし、ひとりひとりの教師が厳しい状況の中で個人の力をつける
- ② 尚、今年度からは、教師ひとりひとりの力量をさらに高め、個人研を強化していくために、全校共通教科として社会科を取り上げ、同一地盤に立つての共同研究も同時に行う。

(イ) 研究組織





※伴奏は自由な身体表現をする
 二化して感じることが出来る

※教皇を四つにイスで切り、コーナを作る
 各コーナーに一人ずつ、豆を食事に、他の
 の手たちも、それを模倣する

※どのときも、すべてのコーナーをまわる

※四つのコーナーをまわる時に最も気の
 入る瞬間

コーナーに分かれ、それぞれのリズムのおもしろさを
 自由に模倣する

① 基本リズムフレズのコーナー

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪
 (♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪)

※フレズの時数をとり、フレズは
 入れる

② 2拍子

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

※休符をしっかりとせろ
 ※全曲通す

自由な模倣

③ リズムカハは分割リズムコーナー

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪
 ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

④ アウトビートを生かすコーナー

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪
 ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

※全曲通すが、フレズの
 終わりは、♪♪♪♪♪と
 終止感のあるようにする

※歌と身体表現を含めたり、本打ちを
 いっしょにするのは、実態として無理
 なさもあるが、歌いながら、リズム打ち
 をいっしょに

※個々に楽しんで、いろいろリズムあそびの中から
 右の四つのもので取り上げろ

※四つの特徴を、リズム譜や体感によりつかませろ

※1つに決まらず、自分の最も気に入るものを
 合わせて (手ごとの実態)

最も気に入ったリズムを、歌に合わせて全曲で楽しめろ

5年育組 理科学習指導案

第2校時
中舎 第1理科室
指導者 小泉 南海江

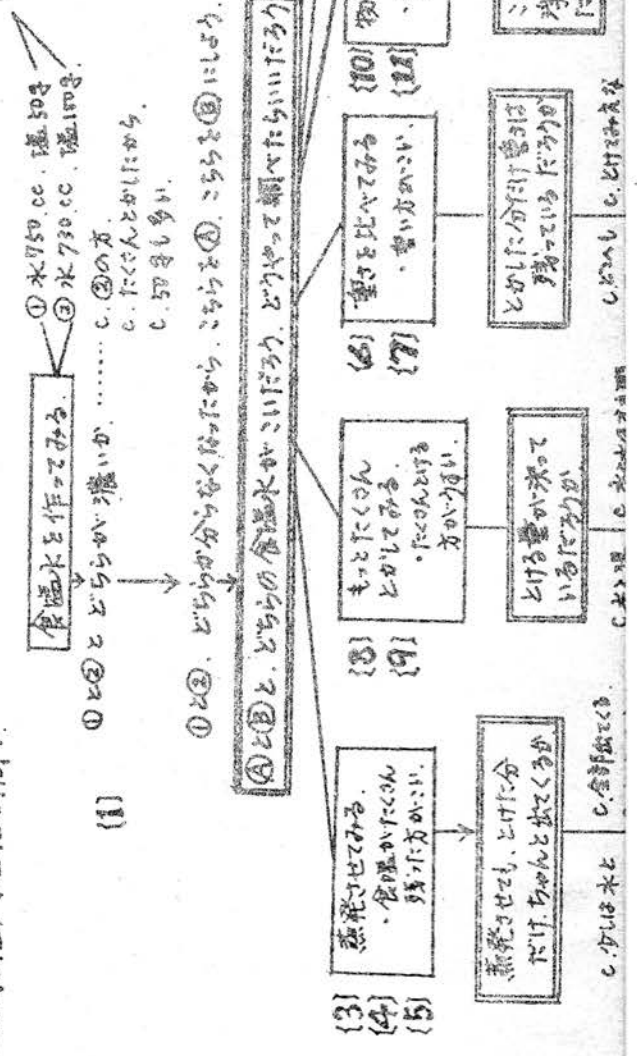
1. 単元名: 食塩水の濃さと重さ (東京書籍: 新しい理科)

2. 指導目標: (1) 濃ゆめちかゆ 2つの食塩水を子どもの発想に方法で、見分けていき、食塩水の水分の蒸発の仕方、食塩の溶解限度、食塩水の濃さと重さの関係を理解する。

(2) 濃さを見分ける活動をしなから、溶解と析出の関係(可溶性)、水の量と溶解量、濃さと重さとの関係に目と向けて追究する。

3. 指導計画 (全12時間)

※ 溶けた状態での質量に注目しよう。
 ※ 食塩水は、水に食塩とをかき混ぜると、
 ※ 水に食塩を混ぜると、
 ※ ④⑤のエネルギー



このとき、自分の考えを整理する。

• とけて見えなくなってきたから
よくなる。

教師実験

1. ① ② ③ ④
1粒ずつ、時を計り、かた
ゆくり落とす。かた
むく様子をみせる。
2. ① ② ③ ④
1粒おとし、かた
ゆきで、②の粒
か見えなくなつた
のとき③の粒を
おとし、やがて④の粒を
おとし、かたゆきを
みせる。
3. ① ② ③ ④
反対のじーカード1粒
おとし、かたゆきを
みせる。反対にかたゆき
の様子をみせる。
4. ① ② ③ ④
この同様には見させる。

• とけて見えなくなつて
重さはそのまゝある。
少しはへるかもしれないが
ない。

※各自、考え付から見せて。

※考を、詳しくノートで書き、
鏡で目で見て見させる。

※実験を見て、わかると、問題に
しつこく、質問して見せる。
細へ方、閉息をとり、ノートで

自分の考えと、自分でたしかめてみたこと(1)に整理する。

※細へ方、閉息をとり、
わからぬところは
相談する。

①の重さ、何つぶ(何粒)で
重さのちがいが出る
だろうか。

①の重さと
入れに、②の重さ
のちがいは出る
だろうか。

①と②でも
重さのちがいが
出るだろうか。

とけておいて、③の場合でも
とけておいて、④の場合でも
入れに、⑤の場合でも
重さのちがいは出るだろうか。

次時、自分の問題で、追究する。

※反対の考えや
細へ方と聞いて
取り入れて、よい
ことを指し示す。

初等教育資料

昭和60年 4月号

は苦役でなく、心をみがく学習の場となる。

五 教えることを通して学ぶ

本校の黙勤清掃の特色の一つにベア活動がある。ベアの組み方は一年生と六年生、二年生と五年生であり、三・四年生はベアを組まないで一人だちして清掃を行わせている。

・六年、二・五年のベアは一年間固定し、兄弟、姉妹として学び合うよう指導している。

また学級同士も交流させ、清掃以外にも給食の世話、ベア集会など独自の計画による活動を仕組んでいる。

ベアによる清掃は一・二年生が兄や姉から清掃の仕方を学ぶという効果はもちろんであるが、むしろ五・六年生の教える側の方がより多くを学んでいる。例えば

(一) 教えるという立場に立つために、自分が清掃の仕方をきちんと把握していなくてはならない。

・どんなことでもベアのお手本になるようにがんばろう。

(二) 高学年としての意識が育つ。

・全校的な視野に立つてものが考えられる。

・清掃の意義を考え、教えていく。

・人の持つ良さを発見し、自ら励む。

(三) 仲間意識、心の触れ合いができる。

だいのー



60.6.18 A組

はんがえ

6月17日。きょう、はんがえでした。はん長
の名前は、山田さん、にのゆさん、木戸くん
八十島さん、いくらくん、高谷さん、はまわ
きくん、にわくんです。だいがの人の中から
えらばれた人であって、いい人がはん長にえ
らばれました。

1	山田	水小川 長谷川	おてつだい
2	にのゆ	おた、前橋 さとう	うた ほけん
3	木戸	大庭中村 太田	ごうれい
4	八十島	田中藤次 ふくおか	花といく
5	いくら	むと、知恵 いづ、若原 長御前	れんらく 学あう文こ
6	高谷	むと、市人 すすき	？
7	はまわき	平智小森 いい田	黒ばん、せいとん
8	にわ	青山、上 吉田	がくしゅう

水、えい
もうすぐ、水、えい
うい、えい、きいて、
がけて、えい、えい、えい、
えい、えい、えい、えい、
えい、えい、えい、えい、
えい、えい、えい、えい、

はん長

にのゆさん
いまのはんは、
いいと思う。い
ままのよきに
やましき
いまのはんは、
いてくれまさん
か、たのでせん
か、はります。
いくらく
いまのはんはよ
いから、いまの
もこも、えい、えい、
くみ、えい、えい、
えい、えい、えい、えい、

きつつかえでからみまじり、ぼくのバンドの
 ススメがしんでいました。

ぼくは大声で「それがこえをこやした」と
 叫びました。

かわいそうでした。

ぼくは、用心ほに

うめよじと思つた

けれど、たほほか

やめて自分の

腹のぼりにうめ

ました。なまほ

DDPp

なから、がせーと

なまほした。

DDPpのぼりに

かこつてにしました。

こそもかたしかた。

大谷たけしのお日記より

かこつてぼくが

うめよじのぼりに

かこつてなまほ

DDPpのぼりに

かこつてなまほ

DDPpのぼりに

かこつてなまほ

DDPpのぼりに

かこつてなまほ

DDPpのぼりに

かこつてなまほ

DDPpのぼりに

かこつてなまほ

「お父さん」——福永 ゆうすけくんの日記より
 まつぼくが家に帰るとしてへん強としてなり、お父さんの新にたり、お父さんが
 耳を押しひびりました。ぼくが「耳がちかかると言たり、お父さん、またぼえて
 へん」と言したり、ぼくは「お父さん、だる」と思いました。

春の4の2

はーるの4つにあがるいらす

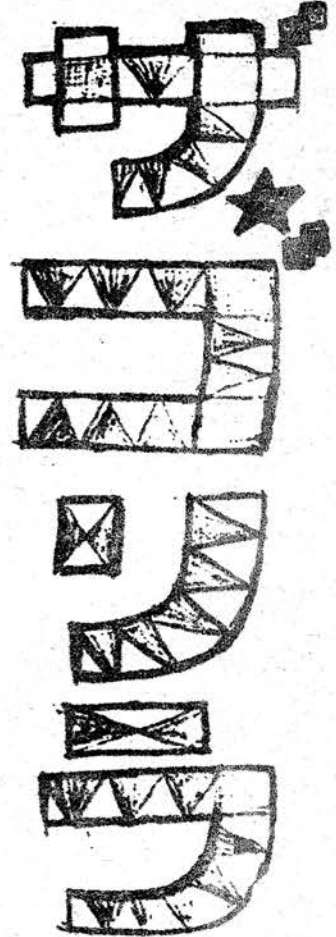
みんなはにこにこうれいがおさ

そらうもにこにこうれき あはれ

にこにこうれき たのいいいらす

「みんなのぼりに
 うめよじのぼりに
 こえをかたか
 てました。
 おもしろいねー
 ぼくはぼくが
 ぼくはぼくが
 P-p

1985.5.31 (金)
4.2 字級通信



No. 49

(中村 くら)



カバウのQちゃん

これはサ上
陽介さんのお母さんの作品
お母さんお父さんもお父さん
作品を生しくたさね

あっ!! くらまに五月が
終ってしまいましたね
「お母さん」と思うと
同時に「お父さん」
な感じがするみたい
という感じがあって
楽しそうに書いてます
いよいよ「二期後半」
はいつまでかというので
また「元持」をひきしめて
おもしろいかなって
思いますねえ

さんすう とくくきょうし

<III> に20円のビー玉があります。ひさし君は7つ
みゆきさんは5つ買いました。2人あわせていくら
はらえばよいでしょう

① $20 \times 7 = 140$ ひさし
 $20 \times 5 = 100$ みゆき
 $140 + 100 = 240$

まとめると
 $20 \times 7 + 20 \times 5 = 240$
① ②

② $7 + 5 = 12$ 2人で12つ
 $20 \times 12 = 240$

まとめると
 $20 \times (7 + 5) = 240$
② ①

と、いうふうに
それぞれ1つの式にまとめることが出来ます

<IV> 1780円のチョコレートがあります。ひさし君は8つ
みゆきさんは6つ買いました。代金のちがいはいくら
ですか。

① $80 \times 8 = 640$ ひさし
 $80 \times 6 = 480$ みゆき
 $640 - 480 = 160$

まとめると
 $80 \times 8 - 80 \times 6 = 160$
① ② ③

② $8 - 6 = 2$ 2人のちがひ
 $80 \times 2 = 160$

まとめると
 $80 \times (8 - 6) = 160$
② ①

おちえいとして考えると、はらちりてはるはるで
たは、1本にまとめる式を利活用すると
 8×98 といふのがかんたんに出てくる
つまり、 $98 = 100 - 2$ といふので $8 \times 98 = 8 \times (100 - 2)$
といふことつまり $8 \times 100 - 8 \times 2$ といふこと
自分で計算しやすいように式をくみかたいていこうといふこと
たいせつです。がんばり!!

阪神タイガース
優勝おめでとう

ついに阪神タイガースは21年ぶりに優勝をした。
513で打ち込んだ9回から布
野呂博一はランナーを打ち、点差は
二点とつめよる。
その後、フック田田はこの日暮
のツッパースヒツを打た、
それをバントで送って、二死三塁の
大チャンス。
ここで代打は佐野。
佐野はどせにフライを打って
三塁へ送り、田田が、かえり、
これでスコアは5-1の目
点。
阪神はギリギリで同点にお
りした。
9回からはおとこえの中西が
マウンドにきて、長打。
9回は、うまくもきりぬけ、10回
は、タイガースは0点でスワ
ローズはツッパースヒツであと一人
という所を中西は、ピッチャー
プロにこつちとつた。
これで阪神は21年ぶりに
優勝した。

紅？ 白？

今年の運動会は、紅が勝た
わけて、また、白が勝たわけて
もない。
なんと同点だった。
800円で白がリードをした。
は、紅が勝って、試合は、同点
に終わった。
しかし、その日の運動場は前の
日の雨のおかげで、じりじり
濡れていた。
土で水たまりをうめるくら
いだった。
その中で、紅と白は、いっしょ
けん命に勝利をあらそって
同点で、運動会はおわ
った。

赤	0	0	0	0
白	0	0	0	0
	?			

76年ハレー彗星

運動会が終りよう後四年二組だけの運
動会が行われている。
まず第一日は組分けとどるまは、こびと
ぼう引きた。
ぼう引きたは、5-4で、紅が負けた。
どるまは、こびと、白のミスから、紅が勝った。
第二日は、こびと、いい試合をした。
次はおう、えんが、せんの予定になんてい
るか、れん習が、で、こびと、いい
ので、今度の週に
日がかえ
られた。
76年ハレー彗星
76年ハレー彗星にせ、せんするハレー彗星、
星が、もう、表れる。
11月、ころから5月、ころまで、ぼつ、せん、こびと、
また、内、内、内、見、え、る、こびと、試合、が、あ
る、その、お、せ、な、い、チャン、ス、だ。
お、の、が、し、た、ら、今、度、表
わ、れ、る、の、は、二、千、五、十、八
年、だ。
お、の、が、や、な、い、よう、に
し、よ、う、つ

